

宮城県文化財調査報告書第197集

中野高柳遺跡Ⅱ

—宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅱ—

平成16年3月

宮城県教育委員会
宮城県土木部

序 文

新たな世紀を迎え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、宮城県土木部との保存協議に基づき、仙台港背後地土地区画整理事業に先立って実施した仙台市中野高柳遺跡の発掘調査のうち、流通地区の平成6・7年度と13～15年度の一部について調査成果をまとめたもので、背後地関連調査報告書の2冊目にあたります。発掘調査の結果、鎌倉時代から室町時代に営まれた武士階級の屋敷跡の様子が明らかとなりました。中野高柳遺跡がある仙台市北東部から多賀城市西部には、中世に「八幡荘」と呼ばれた荘園がありました。本遺跡に屋敷を構えた人々は、八幡荘の管理・運営に深く関わっていたと考えられます。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成16年3月

宮城県教育委員会

教育長 白 石 晃

例 言

1. 本書は宮城県教育委員会が行った仙台港背後地土地区画整理事業にともなう中野高柳遺跡流通地区的発掘調査のうち、平成6・7年度と13~15年度の一部について調査成果をまとめたものである。仙台港背後地関連発掘調査報告書の2冊目にあたる。内容は、本遺跡の発掘調査が現在も進行中であることから、事実報告を優先した。なお、流通地区の一部と北に隣接する都市計画道路部分は、発掘調査を担当した仙台市教育委員会から成果が公表されていないため、今回の報告では触れることができない。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』(小山・竹原: 1973)を使用した。
4. 発掘調査の測量は、遺跡北西部の第X系国家座標X = -191,850.000、Y = 12,860.000 (日本測地系 - 改正前) を原点とした東西・南北の基準線をもとに3mの方眼を設定しておこなった。本書に掲載した遺構図中に示された方位はすべて座標北を指している。なお、磁北との偏差は西に8° 30' 40"である。
5. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。その際、仙台市教育委員会による遺構番号との重複を避けるため、1000番から付している。また、遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。
掘立柱建物跡 (S B)、塙跡・柱列跡 (S A)、溝跡・河川跡 (S D)、井戸跡 (S E)
水田跡・畑跡 (S F)、土壤 (S K)、道路跡・堅穴遺構・他の遺構・湿地跡 (S X)
6. 発掘調査および整理・報告書の作成に際して、以下の方々と関係機関から指導、助言を賜った
(五十音順、敬称略)。
相沢清利、飯村均、井上雅孝、入間田宣夫、及川司、大石直正、小井川和夫、佐藤甲二
須田富士子、高桑弘美、高橋学、田中則和、千葉孝弥、羽柴直人、藤沼邦彦、堀江格
本田泰貴、松本秀明、八重樫忠郎、柳原敏昭、吉田江美子
岩手県教育委員会文化課、多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史博物館
平泉町文化財センター、宮城県多賀城跡調査研究所
7. 本書の整理、遺構・遺物のトレースは、村田晃一・茂木好光・三好秀樹・白崎恵介・大沼美代子・佐藤由美子・加藤明日香がおこなった。
8. 遺構のトレースは、平成6・7・13・14年度の平面図・断面図と15年度の断面図は、1/20の実測原図をスキャナーで、平成15年度の平面図はトータルステーションのデータをコンピューターに取り込み、それらを下図としてデジタルトレースを行った。
9. 遺物の実測・トレースは、実測原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、それを下図としてデジタルトレースを行った。
10. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議ののち村田晃一・三好秀樹・白崎恵介が担当した。
11. 陶磁器の産地や分類、時期については、主として以下の文献を参考とした。
【中世陶器】
・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼きをおって』資料集

- ・藤沢良祐 1995『瀬戸』『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集 瀬戸市埋蔵文化財センター
【輸入陶磁器】
- ・山本信夫 2000『太宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一』 太宰府市の文化財第49集

太宰府市教育委員会

12. 遺物観察表で簡略化した表現は以下のとおりである。

外→外面 内→内面 完形→完形もしくはほぼ完形

13. 遺物実測図に示した塗りは以下の特徴を表現している。

使用灰 ■ 黒色處理 ■ 黒漆塗 ■ 漆(付着物) ■ 油煙灰 ■

14. 本遺跡の調査成果については、平成13・14年度宮城県遺跡調査成果発表会や宮城考古学第4・5号、木簡研究第24号でその内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

15. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

調査要項

遺跡名：中野高柳遺跡（宮城県遺跡登録番号 01146）

遺跡記号：K X

所在地：宮城県仙台市中野字高柳

発掘面積：約10,450m² (A～C区 うち確認調査1,210m²)

調査期間：平成6年10月～11月、平成7年7月～8月、平成13年4月9日～11月6日

平成14年4月8日～11月12日、平成15年4月7日～11月17日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平成6年度

　　村田晃一・小村田達也・藤村博之

平成7年度

　　山田晃弘・高橋栄一

平成13年度

　　村田晃一・相原淳一・天野順陽・千葉直樹

　　鈴木朋子（亘理町職員技術研修）・中鉢琢也（山元町職員技術研修）

平成14年度

　　村田晃一・茂木好光・岩見和泰・吉野武・西村力

平成15年度

　　村田晃一・佐久間光平・奥山芳明・三好秀樹・白崎恵介

目 次

| | |
|---------------|-----|
| 第Ⅰ章 調査の方法と経過 | 1 |
| 1.はじめ | 1 |
| 2.調査の方法 | 1 |
| 3.調査の経過 | 1 |
| 第Ⅱ章 基本層序 | 6 |
| 第Ⅲ章 発見した遺構と遺物 | 7 |
| 1.古代 | 7 |
| (1)河川跡 | 7 |
| (2)第VII層検出遺構 | 9 |
| 2.中世以降 | 13 |
| (1)道路跡 | 13 |
| (2)区画溝跡 | 20 |
| (3)湿地跡 | 24 |
| (4)B区 | 32 |
| (5)C区 | 82 |
| 第Ⅳ章 まとめ | 91 |
| 報告書抄録 | 100 |



遺跡全景（南東から）

第Ⅰ章 調査の方法と経過

1. はじめに

本書は、仙台港背後地土地区画整理事業にともなう中野高柳遺跡の平成6・7・13・14・15年度発掘調査のうち、流通地区A～C区の古代遺構と、B・C区の中世より新しい遺構に関する報告書である。宮城県教育委員会が発行する中野高柳遺跡の報告書の2冊目にあたる。「調査にいたる経過」、「地形環境」、「歴史的環境については、『中野高柳遺跡Ⅰ』（宮城県文化財調査報告書第194集）第Ⅰ章、第Ⅱ章で述べているため、そちらを参照していただきたい。

同事業にかかわる中野高柳遺跡の発掘調査は、平成6・7年度に県文化財保護課（以下、当課とする）が担当したのち、仙台市文化財課（以下、市文化財課とする）が平成7～11年度まで調査を行い、平成12年度からは再び当課が担当している。

2. 調査の方法

平成12年度からの調査は、住宅地区北西隅に測量原点（第X系国家座標）を設置し、それをもとに東西・南北に基準線を延長し、調査区全域に3m方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西・南北方向の距離で表した。

検出した遺構の実測図作成や遺構の写真撮影は、平成14年度までと同15年度で異なる。前者は平面図を原則として1/20の縮尺で作成した。その際、平面図は前述したグリッドを基準に作成している。遺構写真は、35mmと6×7cmのカメラを使用し、それぞれモノクロとリバーサルフィルムを使用して行った。平成15年度は、平面図の作成をトータルステーションを用いた電子平板測量で行い、遺構写真は通常6×7cmモノクロフィルムとデジタルカメラで撮影し、重要度が高いものについては6×7cmカラーリバーサルフィルムを用いた。各年度とも調査成果がまとまった段階で、空中写真を撮影している。

3. 調査の経過

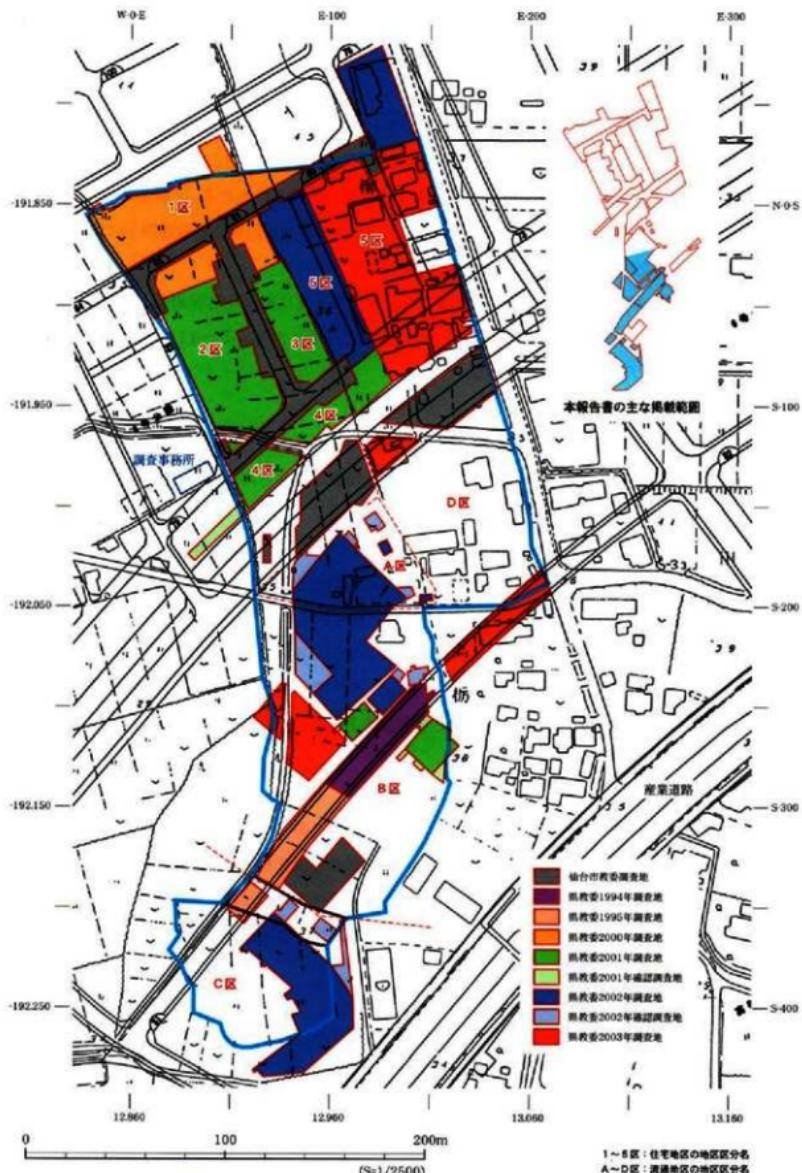
中野高柳遺跡の発掘調査は遺跡全体が対象となるため、調査面積が広大で多年次にわたると予想された。そこで、平成12年度からの発掘調査では、住宅地区を市文化財課の調査区や湿地跡を反映した低地部分を境にして1～5区に、流通地区は既存道路や湿地跡を反映した低地部分を境にしてA～D区に区分した（図版1）⁽¹⁾。本年度までに県文化財保護課が行った発掘調査の概要は、以下の通りである。

① 平成6年度の調査

平成6年度は、流通地区内を都市計画道路「中野線」に平行して南を走る幅12mの道路予定地のうち、北半部の調査を行った。調査面積は1,050m²である。その結果、13世紀～14世紀前半頃の武士階級の屋敷跡の一部を検出した。主な遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などである。特筆すべき出土遺物としては、大型土壙から出土した修验者もしくは僧を墨で表現した「人物墨書き」がある。

② 平成7年度の調査

前年度の続きをあたる道路予定地の南半部を調査した。調査面積は950m²である。主な検出遺構は、



図版1 遺跡の範囲と調査地点

南北道路跡の東側溝、区画溝跡、掘立柱建物跡などである。区画溝跡は前年度に確認した屋敷の南辺を画する可能性が考えられた。

③ 平成12年度の調査

本年度より仙台市教育委員会から発掘調査を引き継ぐこととなり、住宅地区の1区と2区・3区の北端部について調査を実施した。調査面積は3,250m²である。その結果、平安時代と中世より新しい遺構を確認した。平安時代は河川が住宅地区中央を南へ流れ、右岸の自然堤防は畠、その西の自然堤防線から後背湿地は水田として利用されていた。これらは10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰で廃絶する。その後、畠は復旧されるが、河川の氾濫で廃絶しており、平安時代の遺構は2度の自然災害を受けていることがわかった。

中世より新しい遺構は、武士階級のものとみられる屋敷跡である。屋敷は幅3mの溝で方形に区画されており、2時期の変遷がある。古い屋敷は一つの区画からなり、新しい屋敷は二つ以上の区画で構成されていることがわかった。古い屋敷は遺跡の範囲外に延びており、東辺を一部拡張したが、北辺は確認できなかった。

④ 平成13年度の調査

発掘調査は本年度から通年（4月～11月）となり、住宅地区は昨年度から継続部分（2・3区）と4区および5区南西端、流通地区ではB区内の2箇所で調査を行った。調査面積は、事前分が6,200m²、確認分が300m²である。平安時代の遺構は住宅地区に認められ、2区や3区で昨年と一連の畠跡や水田跡を確認したほか、新たに4区で灰白色火山灰より古い畠跡を検出した。また、河川跡は灰白色火山灰後下後の氾濫で、流路が変わり湿地化したことがわかった。湿地は12世紀代にゴミ捨て場となっていたり、土器・陶磁器・漆製品・木製品・鉄製品・動植物遺体などが出土した。

中世より新しい遺構は、住宅地区的屋敷跡が2時期加わって4時期となり、年代は古いほうから鎌倉～南北朝時代→室町時代→戦国時代→江戸時代とみられたほか、鎌倉～南北朝時代の南北道路跡を検出した。流通地区は、平成6年度の調査区の南北両側を1箇所ずつ調査した。その結果、鎌倉～南北朝時代の屋敷に伴う建物、ゴミ穴とみられる大型土壙などを検出した。屋敷の東側は湿地に面しており、大型土壙や湿地跡から土器・陶磁器・漆製品・木製品・鉄製品・動植物遺体などが出土した。

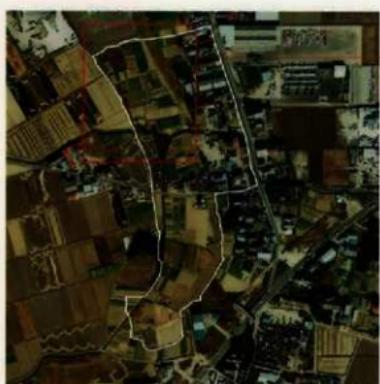
⑤ 平成14年度の調査

住宅地区は5区西側と5区北東隣接地の2箇所、流通地区はA区で4箇所、B区で3箇所、C区とその隣接地で2箇所、あわせて11箇所で調査を行った。調査面積は、事前分が9,280m²、確認分は1,120m²である。5区西側では、湿地跡の東でそれと平行して南北に延びる溝跡や近世屋敷の区画溝跡を検出した。5区北東隣接地は遺跡の範囲外であったが、工事に伴う掘削で遺構が発見されたため急速調査を実施し、平安時代の畠跡や室町時代とみられる大型土壙などを確認した。流通地区的C区は、東側の南隣接地に中世遺構が延びると予想されたため、仙台港背後地土地区画整理事務所（以下、事務所とする）と相談の上、調査区を南へ拡張した。一方、C区西側は表土を剥いだところ、遺構数がきわめて少なく、近世より古い遺構が認められなかつたことから、事前調査は行わなかった。

平安時代の遺構は、A・B区で灰白色火山灰に覆われた畠跡、区画溝跡を検出した。また、住宅地



上：遺跡周辺の空中写真（写真上が北、縮尺=1/10000）

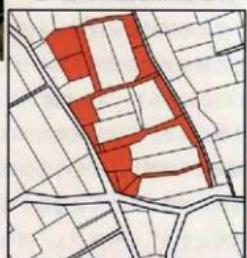


左：遺跡空中写真
(白枠内が遺跡の範囲)



左：赤枠内の拡大写真
(耕作地に区画道路を反映した区割りがある)

下：左上写真的模式図
(塗り部分が区画道路を反映した区割り)



図版2 遺跡空中写真

※ 空中写真是全て「国土画像情報（昭和59年度整新カラー空中写真、利用番号：CTO-84-2）」国土交通省）を一部加工して転載

区と一連の河川跡がA・B区東縁を南へ流れ、C区北東部で向きを西へ変えていることを確認した。中世より新しい遺構は、昨年度検出した南北道路跡をA～C区で検出し、遺跡内を縦断(390m)してさらに南に延びることがわかった。B区では、平成6・7・13年度に確認した鎌倉～南北朝時代の屋敷跡の北辺と西辺を検出し、屋敷の規模は約半町四方であることが判明した。また、A区では住宅地区の室町時代、江戸時代の屋敷跡の南辺を確認した。それぞれ

の規模は室町時代が東西半町、南北一町で、江戸時代は東西一町以上、南北半町とみられる。

⑥ 平成15年度の調査

本年度は、中野高柳遺跡と竹ノ内遺跡の調査を実施している。中野高柳遺跡は、住宅地区で5区東側、流通地区はB区で1箇所、D区で2箇所のあわせて4箇所で調査を行った。調査面積は、6,930m²である。その結果、住宅地区は立ち退きの終了していない宅地分を除いて全て発掘調査が終了した。住宅地区的検出遺構は、平安時代が河川跡左岸で灰白色火山灰に覆われた烟跡や水田跡を検出した。また、昨年度発見した南北溝跡と一連とみられる溝跡が東へ折れること、近世屋敷跡の北辺区画溝が東へ延び、屋敷の規模が南北35m、東西60m以上あることを確認した。

流通地区では、B区で昨年度検出した烟跡の南端を確認した。烟跡は住宅地区4区で検出したものと一連と考えられ、耕作域は東西16～32m、南北164mと判明した。中世以降のものとしては、南北道路跡などを確認した。また、D区で湿地跡東側の調査を行ったところ、古代の烟跡が遺跡の範囲外に延びることを確認したため、事務所の了解を得て発掘調査を実施した。その結果、中世より新しい遺構は少なかったが、灰白色火山灰に覆われる烟跡と区画溝跡を確認した。後者からは、10世紀前半頃の土器器食器がまとまって出土している。

竹ノ内遺跡は、平成13年度に実施できなかった部分について遺構確認調査を行った。その結果、堆積土に灰白色火山灰が入る東西溝1条を除くと、近世以降の屋敷跡、寺に関わる遺構などを確認するにとどまった。したがって、遺構検査の対象は、古代の溝跡のみで他は確認にとどまることから、事務所と協議したのち、事前調査も実施することになった。調査面積は1,850m²である。近世屋敷の区画溝跡から、割材に墨書きを施した木簡が出土した。

| 調査年度 | 調査地点 | 事前面積(m ²) | 確認面積(m ²) | 備考(区名は無査定) |
|-------|-------------|-----------------------|-----------------------|-------------------------------|
| 平成6年 | 流通 B2 | 1,060 | | |
| 平成7年 | 流通 B2 | 950 | | |
| 平成12年 | 住宅 1、2・3の一部 | 3,250 | | 遺跡範囲外295m ² |
| 平成13年 | 住宅 2～4、5の一部 | 5,550 | 210 | 遺跡範囲外210m ² |
| | 流通 B2 | 650 | 90 | ①～④区 |
| | 小野 | 6,200 | 300 | |
| | 住宅 5 | 3,650 | | E・NK 遺跡範囲外1,070m ² |
| | 流通 A | 1,560 | 270 | ②・⑦～S・NK |
| 平成14年 | 流通 B1・B2 | 1,800 | 470 | ③区 |
| | 流通 C | 170 | 90 | ④～⑧区 |
| | 流通 D | 2,100 | 290 | ⑤～⑨区、遺跡範囲外1,050m ² |
| | 小野 | 9,280 | 1,120 | |
| | 住宅 5 | 5,000 | | E区 |
| 平成15年 | 流通 B2 | 960 | | ⑩区、遺跡範囲外220m ² |
| | 流通 D | 330 | | ⑪区 |
| | 流通 E | 640 | | ⑫区、遺跡範囲外545m ² |
| | 小野 | 6,930 | | |
| 合計 | | 27,060 | 1,420 | |

第1表 調査年度と調査面積

(註1)「中野高柳遺跡」では、住宅地区を1～6区、流通地区をA～E区に分けたが、この区分では発掘調査時に境界が不明確になるところがあった。このため、住宅地区は5・6区を統合して5区に、流通地区はB・C区を統合してB区とし、「I」でD区、E区とした部分は、それぞれC区、D区と改めることにした。

第二章 基本層序

流通地区の表土から造構面までの基本層序は、大別で7層に分けられた。住宅地区との対応関係をみると、両者は基本的に共通する。図版3は、流通地区3地点の基本層序を柱状図にして模式的に示したものである。

遺跡内の微地形をみると、住宅地区の中央から流通地区的東縁に古代の河川跡（SD 1100）が認められ、その両側に自然堤防が形成されている。自然堤防の幅は右岸が50～60m、左岸は60m前後とみられる。住宅地区的河川跡右岸は、河川跡の凹地に接続する東西方向の凹地が4条あり、それらをつなぐ南北の凹地が観察できた。流通地区的河川跡右岸もまた、それに接続する東西方向の凹地が2条認められた（図版2）。発掘調査の結果、これらの凹地は中世の屋敷をめぐる区画溝跡であり、近世になると、こうした凹地や河川跡の低地は水田（Ic層）として利用されていたことがわかった。水田で囲まれた高い部分は、宅地や畠として利用されていた。これらの水田や畠によって遺跡全体は削平されており、中世以降の旧表土である第Ⅲ層は、D区の一部で確認したのみである。

第Ⅰ層

表土である。盛土（a層）、畠耕作土（b層：黒褐色～黄褐色シルト）、水田耕作土（c層：褐灰色～灰色粘土）に分けられる。c層の上にはa層が認められる部分が多い。厚さはa層が20～80cm、b層は30～40cm、c層は10～50cmある。

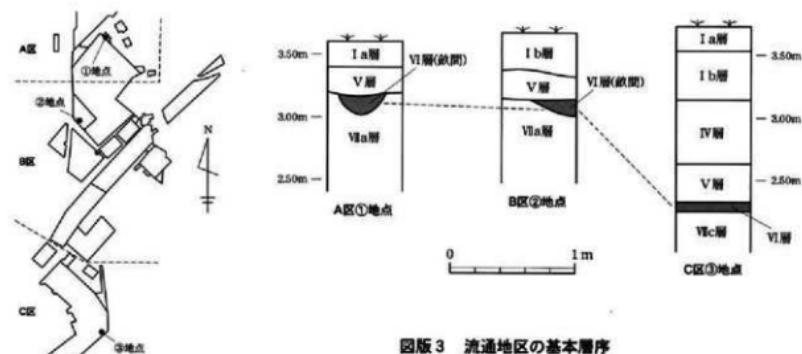
第Ⅱ層

にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトで、中世造構を覆う。面的な広がりは確認できなかったが、B・C区の中世造構の最上層で認められた。

第Ⅲ層

暗褐色（10YR3/4）シルトで、中世以降の旧表土である。D区南端で認められたが、他の場所では確認できなかった。厚さは10～20cmある。

第Ⅳ層



図版3 流通地区的基本層序

にぶい黄褐色(10YR4/3)の砂質シルトもしくはシルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層である。SD 1100河川跡を中心に認められる。氾濫によって、SF 1593畑耕作痕やSD 1592区画溝跡は河川と接する部分が壊されている。厚さは70cm以上あり、住宅地区では河川跡で260cmであった。層の細分が可能で、砂や粘土も認められる。

第V層

にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層と考えられる。SF 1593畑耕作痕を覆う。第III層の残りが悪いため、中世より新しい遺構は本層および第IV層で確認している。層の厚さは自然堤防の高い部分で10~20cm、C区南端で自然堤防の縁辺にあたる部分は30cmある。

第VI層

灰白色火山灰層である。1次堆積(b層)と2次堆積(a層)に細分できる。A・B区ではVI b層はSF 1593畑耕作痕やSD 1592区画溝跡を覆っており、厚さは10cm前後ある。VI a層はほぼ全域で認められ、厚さは自然堤防部で10~20cm、河川跡では20~30cmある。これに対し、C区のVI層は中央部のSX 1608湿地跡から南で認められたに過ぎず、検出レベルはA・B区に較べて80~90cm低い。その下層で水田跡は検出できなかった。したがって、C区は中央部以北をSD 1100河川跡が流路を変えながら流れしており、その南岸は湿地であり、住宅地区のように水田はつくられなかつたと考えられる。

第VII層

自然堤防部でa層を確認したが、住宅地区のb層に対応する層は認められなかつた。VII a層は灰黄褐色(10YR5/2)シルトで、厚さは20~30cmあり、SF 1593畑耕作痕が掘り込まれた。C区南端では、100~120cmの厚さで褐灰色粘土質シルト(VII c層)が認められ、その下層は砂層であった。

第三章 発見した遺構と遺物

1. 古代

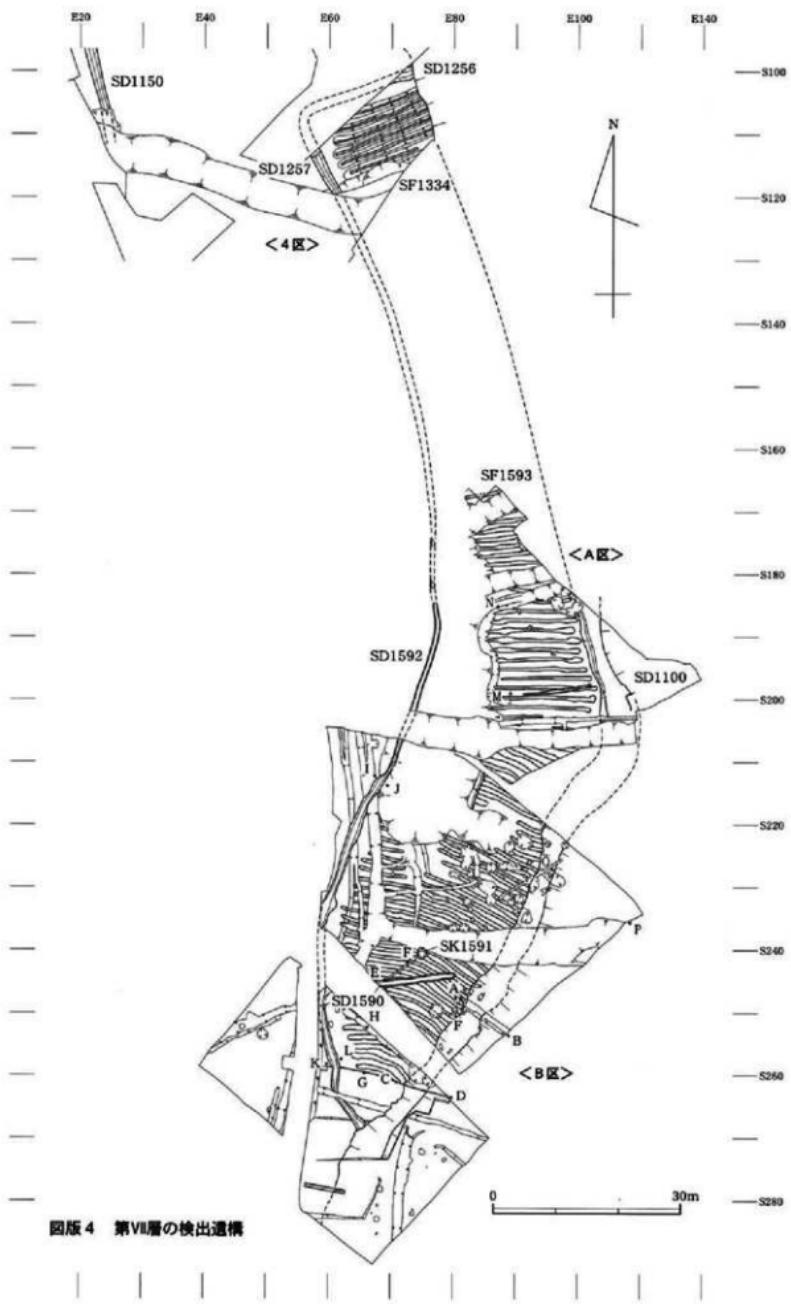
古代の遺構は、A・B区の第VII層で検出した溝で区画された畑跡である(図版4)。区画溝は東縁を流れる河川と接続しており、畑の西と南を示している。C区は北端から中央部が河川や河川敷となつておらず、その南は湿地となっていたため、遺構は確認できなかつた。古代遺構は、地区をまたいで検出されていることから一括して記述する。

(1) 河川跡

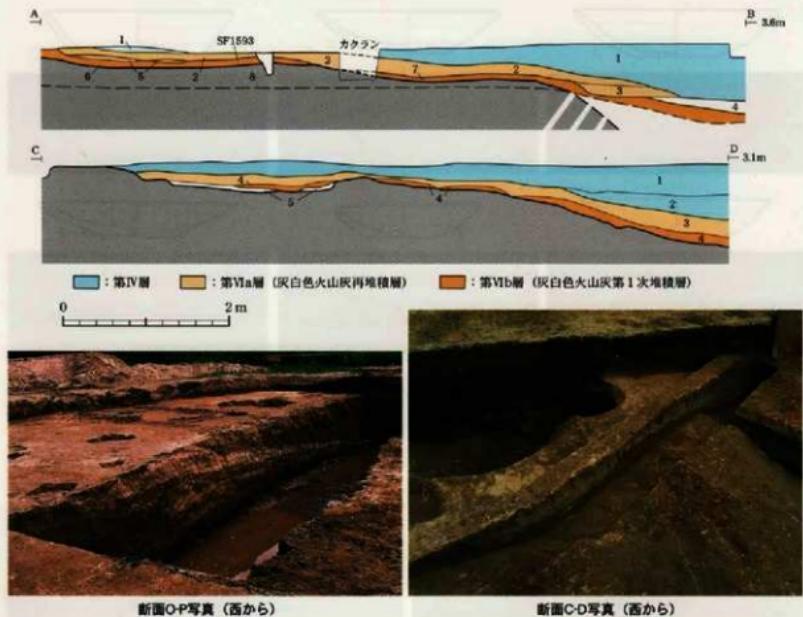
【SD 1100河川跡】(図版4・5)

A・B区の東端を南へ流れ、B区南東隅で流路を西へ変え、その後再び南へ流れる河川跡で、南北310m分を確認した。とくにC区は、南部を除く全域で河川堆積土が認められ、流路が一定していなかつたと考えられる。

堆積土から灰白色火山灰(第VI層)を指標として、火山灰降灰頃からそれ以後の河川跡(B河川跡)



図版4 第VII層の検出遺構



図版5 SD1100河川跡

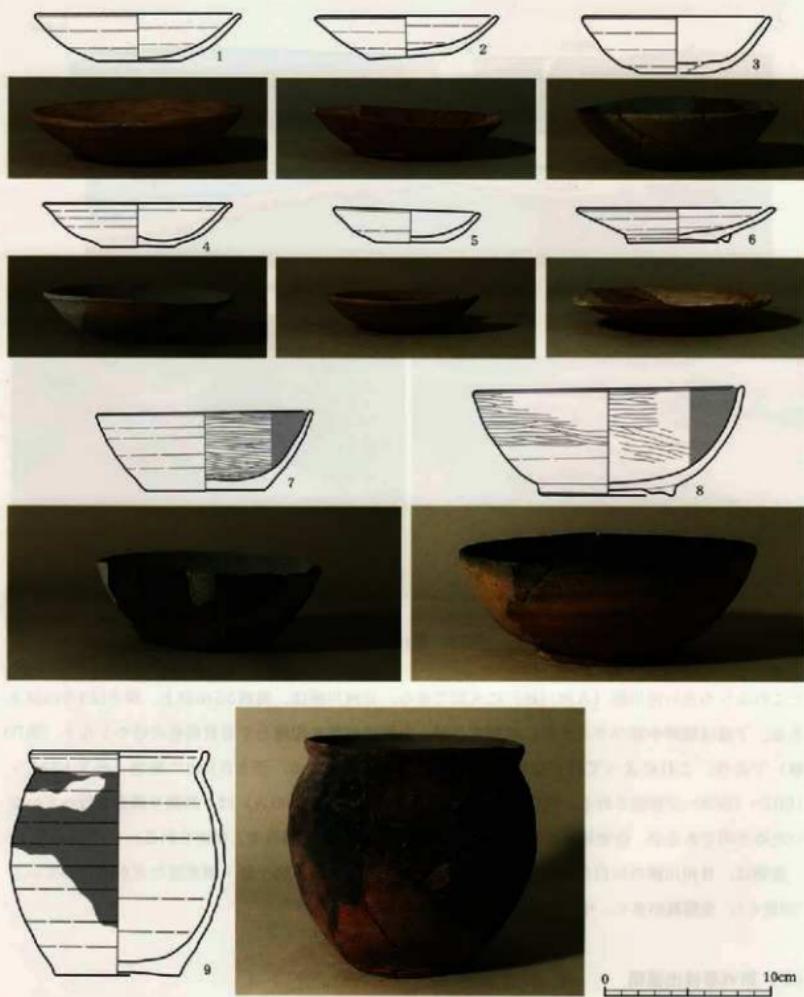
これよりも古い河川跡（A河川跡）に大別できる。B河川跡は、東西35m以上、深さは1.6m以上ある。下層は粗砂や砂がラミナ状に堆積するが、上層は氾濫を起源とする黄褐色の砂やシルト（第IV層）であり、これによって河川は埋没する。その後、東西9m、深さ0.6mの湿地（S X 1397・1607・1608）が形成される。灰白色火山灰下の河川跡（SD 1100 A）は、断割り調査を行っていないため不明であるが、住宅地区を参考にすると、B河川跡と同規模程度と推定される。

遺物は、B河川跡の灰白色火山灰より新しい層から土師器・赤焼土器・須恵器などが出土している（図版6）。食器が多く、中でも赤焼土器の占める割合が高い。

（2）第VII層検出遺構

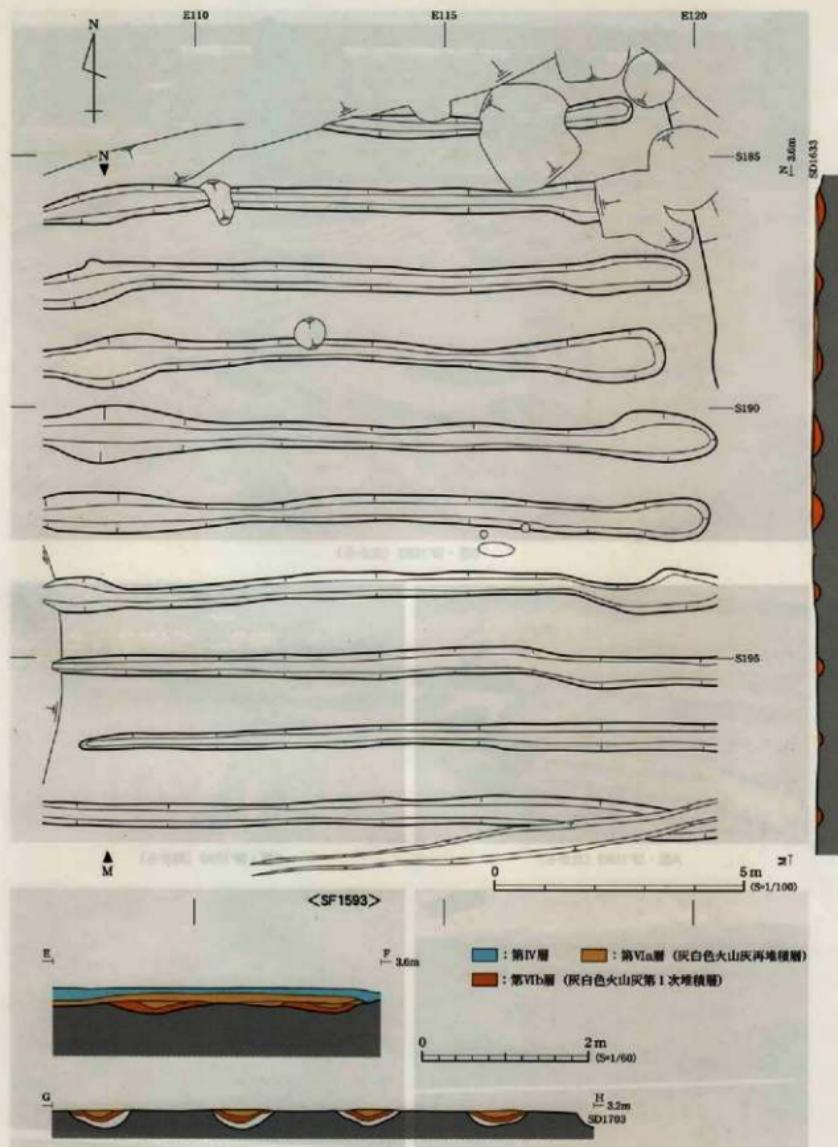
【SF1593烟跡・SD1592区画溝跡】（図版4・7～9）

A区からB区北半部西側で、溝によって区画された煙跡を検出した。耕作域は西端と南端をSD1592溝跡によって区画されている。耕作痕や溝跡の底面もしくは底面近くに灰白色火山灰（第VIb層）が認められ、歯本体は残存せず、そこに火山灰の2次堆積（第VIa層）が認められるところから、火山灰は畑耕作時あるいはそれに近い頃に降灰し、それによってSF1593は廃絶したと考えられる。SK1591土壤、SD1590溝跡より古い。こうした煙跡や溝跡は、4区で確認（SF1334、SD1256・1257）しており、両者は一連の遺構とみられる。



図版6 SD1100河川跡、第VII層出土遺物

| No. | 出土層段 | 種別 | 器種 | 産地 | 特 | 備 | 登録 |
|-----|----------|------|-----|----|---|---|-------|
| 1 | 縞泥土 | 赤陶土胎 | 杯 | | 口径12.4 底径6.0 高さ2.5 底部：回転条切 | | 94036 |
| 2 | 縞泥土 | 赤陶土胎 | 杯 | | 口径11.7 底径4.7 高さ2.5 底部：回転条切 | | 94037 |
| 3 | 電鍍土 | 赤陶土胎 | 杯 | | 口径11.2 底径4.5 高さ3.4 残存2/3 ロクロナデー 底部：回転条切 | | 02001 |
| 4 | 縞泥土 | 赤陶土胎 | 小鉢 | | 口径8.5 底径4.3 高さ1.9 完形 ロクロナデー 底部：回転条切 | | 02002 |
| 5 | 電鍍土 | 赤陶土胎 | 杯 | | 口径11.4 底径4.3 残存1/3 ロクロナデー 底部：回転条切 | | 02003 |
| 6 | 縞泥土 | 赤陶土胎 | 高台盤 | | 口径11.9 高さ6.1 高さ2.3 底部：回転条切 | | 94039 |
| 7 | 第VI層 | 土師器 | 杯 | | 口径13.0 直径7.1 高さ4.2 ロクロナデー 底部：回転条切 内面：ミガキ→黒色光澤 | | 02041 |
| 8 | 縞泥土 | 土師器 | 碗 | | 口径16.3 高さ厚径8.3 高さ(5.3) 残存3/4 低高台 内面：ロクロナデーミガキ 内面：ミガキ→黒色光澤 | | 01145 |
| 9 | 1層(第IV層) | 土師器 | 盤 | | 口径10.8 直径7.6 高さ13.4 残存1/2 ロクロナデー 底部：回転条切 外面にスヌ状付着物 | | 01149 |



图版 7 SF1593 烟耕作痕 (1)



B区・SF1593（北から）



A区・SF1593（北から）



B区・SF1593（南から）



SF1593断面 (E-F)



SF1593断面拡大 (E-F)

図版8 SF1593畑耕作痕（2）



図版9 SD1592区画溝跡断面図

SD1256やSD1592は、SD1100河川跡と接続することから、SF1334・1593は東がSD1100に面し、それに接続するSD1256・1257・1592によって北・西・南をコ字状に区画される。西辺のSD1257・1592は、自然堤防の縁辺に設けられており、流路はSD1100に沿って西へゆるやかなカーブを描いている。耕作痕は区画溝とSD1100の縁辺付近まで密接に認められ、方向は河川に対してほぼ直交する。耕作域の規模は、東西が16~32m、南北は164mほどと考えられる。耕作痕は上幅30~50cm、下幅20~30cm、深さ20cm前後、溝中心間の距離は1.2~1.5mで、底面に凹凸がある。

区画溝跡は上幅1.5~2.0m、下幅0.7~0.9m、深さは0.6~0.8mある。底面は平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は6層に大別できる。第6層は壁の崩落土を主体とする自然堆積、第5層は灰白色火山灰層、第4層は水成堆積、第3層は灰白色火山灰の再堆積層、第2層は自然堆積、第1層はSD1100河川跡の氾濫によって短時間に形成された層（第IV層）と考えられる。第IV層は、区画溝だけでなく、部分的ではあるが耕作域の全域で認められる。

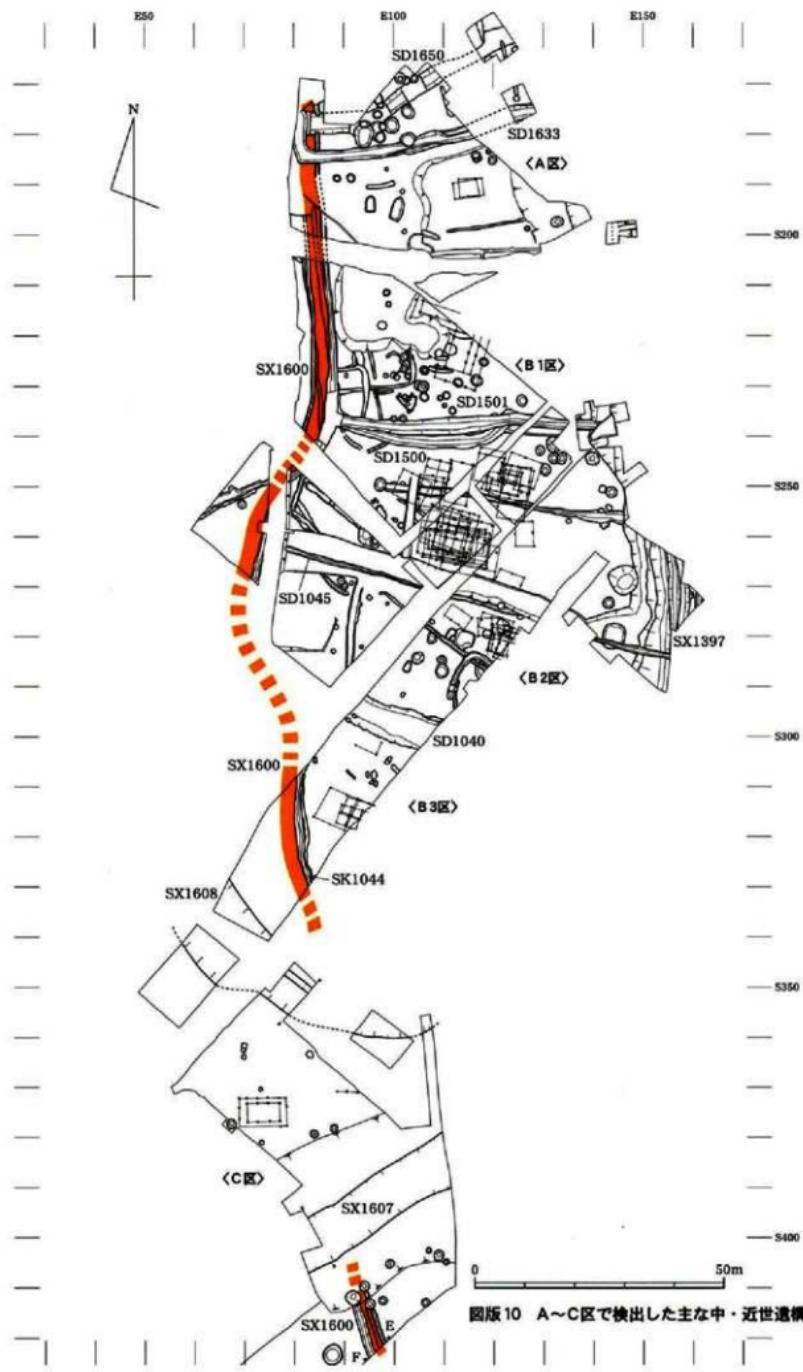
2. 中世以降

中世より新しい造構は、第IV・V層で確認した（図版10）。これらの記述は、道路跡や区画溝跡、湿地跡など複数の調査区にまたがるものから行い、個別の造構は調査区ごとに述べることとする。

(1) 道路跡

【S X 1600南北道路跡】（図版10・12~14）

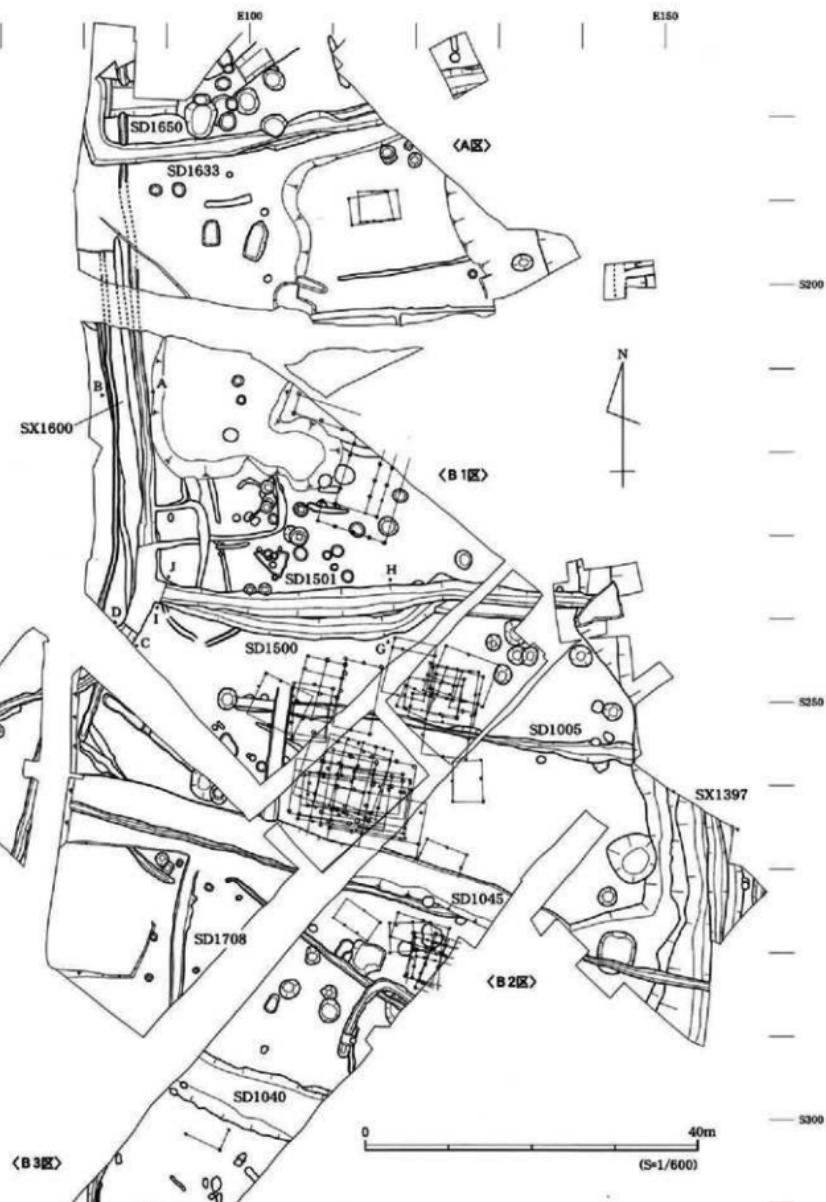
A区からC区で検出した南北道路跡である。削平のため側溝が検出できなかった部分もあるが、A区北端からC区南端まで認められ、南北250m分を検出した。道路は自然堤防の西縁に沿って設けら



図版10 A～C区で検出した主な中・近世遺構



図版11 遺跡空中写真



図版12 A・B区の検出遺構



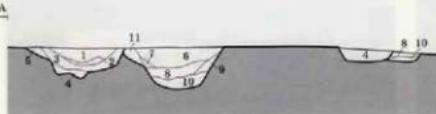
B1区（南から）



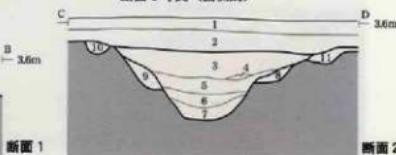
斯圖3寫真《寒例湯》



断面1写真（東側溝）



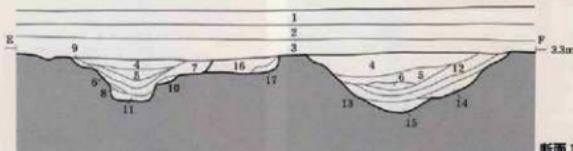
新而一



2

| No. | 土色・土性 | 固 体 物 な ど | 備 考 |
|-----|-----------------|------------------------------------|-------------|
| 1 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 第V種(ラミナ状に含む) | |
| 3 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 第VI種(ブロックで含む) | SX1600B用樹脂板 |
| 4 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 第VII種(ブロックで含む) | |
| 5 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 第VIII種(ブロックで含む) | |
| 6 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 化粧土(含む) | |
| 7 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 高さ・壁面ノックを多く含む | |
| 8 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 高さ・壁面ノックを多く含む (表面は、柱等の他の部位と異なる) | SX1600A用樹脂板 |
| 9 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 高さ・壁面ノックを多く含む | |
| 10 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 高さ・壁面ノックを多く含む | |
| 11 | 黒褐色(19)の土(2)シルト | 高さ・壁面ノックを多く含む | |

| No. | 土色・木性 | 樹 物 な ご | 備 考 |
|-----|-------------------|-----------------------|-------------|
| 1 | 黒褐色(1BN9/3)49%ルート | | 第TB版 |
| 2 | 黒褐色(1BN9/2)39%ルート | | |
| 3 | 黒褐色(1BN9/2)29%ルート | | |
| 4 | 黒褐色(1BN9/2-1ルート) | 黒褐色ブロッタ・東南米シモカシ | |
| 5 | 黒褐色(1BN9/2/2シルバ) | 暗褐色色味をラミナ状に含む | |
| 6 | 黒褐色(1BN9/2/3シルバ) | 黒シモカシ 黒シモカシのリード仕上げ | SX1600A地埋樹皮 |
| 7 | 黒褐色(1BN9/4ルート) | 黒シモカシを主とし、黒シモカシ色 | |
| 8 | 黒褐色(1BN9/4ルート) | 黒シモカシ主とし、黒シモカシ色 | |
| 9 | 黒褐色(1BN9/2/2シルバ) | 黒シモカシ ブロッタを多く含む | SX1600A地埋樹皮 |
| 10 | 黒褐色(1BN9/2/2シルバ) | 黒シモカシ ブロッタを多く含む | PR地埋樹 |



断面 3

| No. | 土色・土性 | 園 入 物 な ど | 備 考 |
|-----|------------------|-----------|--------------|
| 1 | | | 第1大層 |
| 2 | | | 第1B層 |
| 3 | | | |
| 4 | こじら海色(1)30%シルト | | B面大別1層(=第2層) |
| 5 | 緑褐色(10YR 5/3)シルト | | B面大別2層 |
| 6 | 灰褐色(10YR 4/2)シルト | | B面大別3層 |
| 7 | こじら海色(1)30%シルト | | |
| 8 | 褐色(7.5YR 5/1)シルト | | |
| 9 | 灰褐色(10YR 5/2)シルト | | B面大別4層 |

| 土色・土性 | 品 物 な ど | 備 考 |
|--|-------------|--------|
| 黒褐色(10YR3/3)シルト | IV層 ブロックを含む | |
| 黒褐色(10YR4/4)シルト | IV層 ブロックを含む | B端大IV層 |
| 黒褐色(10YR4/4)シルト c.より黒褐色(10YR4/6)シルト | IV層 ブロックを含む | |
| 黒褐色(10YR6/2)シルト | IV層 ブロックを含む | |
| 褐色(10YR5/4)粘土シルト | IV層 多く含む | |
| 黒褐色(10YR4/2)シルト c.より黒褐色(10YR4/6)シルト | IV層 ブロックを含む | A面毒植土 |

圖版13 SX1600道路跡（1）



B1区（北から）



B1区（南から）

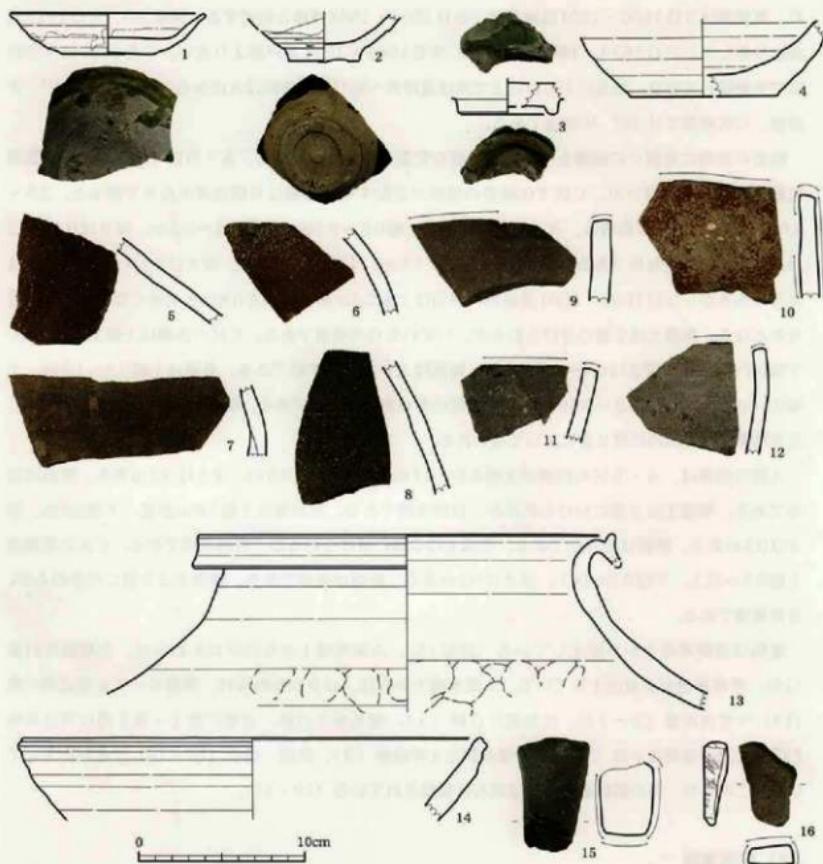


B1区（北から）
※人の立つ所がB周回道



C区（南から）

図版14 SX1600道路跡（2）



| No. | 出土 編號 | 施 別 | 規 格 | 產 地 | 特 | 圖 | 號 |
|-----|----------|-----|------|------|---|-------|---|
| 1 | 日周東漢・堆積土 | 陶器 | 小口 | 廁戶 | 口徑11.6cm 底徑5.4cm 高1.5cm 壁存1/4 口緣部內外面：尖輪底部：圓形斜切【吉澤戶後期】 | 02078 | |
| 2 | 日周東漢・堆積土 | 陶器 | 大口蒸陶 | 廁戶 | 高台徑14.0cm 內面～外面部基：圓輪底：圓輪切一切削面～輪高台【吉澤戶後1期～後3期】 | 02077 | |
| 3 | 日周東漢・堆積土 | 青銅 | 圓 | 廁戶 | 高台徑15.0cm 見込みに新切文 | 02079 | |
| 4 | 日周東漢・堆積土 | 陶器 | 片口鉢 | 廁戶附近 | 直徑8.8cm 內面磨耗 底部：圓輪斜切 | 02063 | |
| 5 | A周東漢・確認器 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 圓輪底盤+斜輪 | 02040 | |
| 6 | B周東漢・非堆積 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 圓輪底盤+斜輪 | 02080 | |
| 7 | B周西漢・堆積土 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 圓輪底盤+子 | 02081 | |
| 8 | B周東漢・堆積土 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 圓輪底子 | 03016 | |
| 9 | B周東漢・堆積土 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 圓輪底盤+斜輪：破片を紙石に転用 | 02082 | |
| 10 | B周東漢・堆積土 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 破片を紙石に転用 | 02084 | |
| 11 | B周東漢・堆積土 | 陶器 | 圓 | 常滑 | 破片を紙石に転用 | 02083 | |
| 12 | B周東漢・堆積土 | 片口鉢 | 圓 | 常滑 | 破片を紙石に転用 | 02085 | |
| 13 | B周東漢・堆積土 | 広口鉢 | 圓 | 常滑 | 口徑26.0cm 深幅【常滑5～6cm型式】 | 04016 | |
| 14 | A周東漢・堆積土 | 片口鉢 | 在地 | | 口徑28.2cm 口側に沈輪 | 04064 | |
| 15 | B周東漢・堆積土 | G器品 | 鐵石 | | 壁厚4.5cm 頂径3.1cm～4.2cm 壁厚4.3cm【砂押】 | 02349 | |
| 16 | B周東漢・堆積土 | G器品 | 鐵石 | | 壁厚6.0cm 頂径3.0cm 壁厚1.1cm【鋸灰鉄】 | 02353 | |

圖版 15 SX1600道路跡出土遺物

れ、東側溝はSD 1500・1501区画溝跡、SD 1564・1565溝跡と接続する（図版30）。SD 1713溝跡より新しく、SD 1633・1650区画溝跡、SE 1609・1611井戸跡より古い。SX 1600は住宅地区でも確認しており、総長は390m以上で南は遺跡外へ延びる。方向はA区からB区北端でN-5°-W前後、C区南端でN-18°-W前後である。

路面の両端は素掘りの側溝を伴い、2時期の変遷（A→B）がある。A・B区では西侧溝が東側溝に較べて幅が狭く浅いが、C区では両者の関係が逆転する。路幅はB期側溝の心々で測ると、3.0～4.0mである。B期の側溝は、A・B区の西溝が上幅0.6～0.7m、下幅0.4～0.5m、深さは0.1～0.2mある。断面は逆台形である。東溝は上幅1.2～1.5m、下幅0.5～0.7m、深さは0.3～0.5m、断面は皿形であるが、SD 1500・1501接続部の周辺は上幅2.4m前後、深さ0.8mと大きくなり、断面は逆台形となる。堆積土は5層に分けられるが、いずれも自然堆積である。C区の西溝は上幅1.7～2.5m、下幅0.7～1.0m、深さは0.4～0.7mある。断面は上が開くU字形である。東溝は上幅0.8～1.7m、下幅0.5m前後、深さは0.2～0.5mある。断面は凸形を逆にした形である。堆積土は5層に大別できるが、自然堆積で、最終的に第Ⅱ層によって覆われる。

A期の側溝は、A・B区の西溝が上幅0.5～0.7m、下幅0.3～0.5m、深さは0.2mある。断面は皿形である。堆積土は2層に分けられるが、自然堆積である。東側溝は上幅1.0m前後、下幅0.6m、深さは0.5mある。断面は逆台形である。堆積土は5層に分けられるが、自然堆積である。C区の東溝は上幅0.8m以上、下幅0.7m以上、深さは0.2mある。断面は皿形である。堆積土は2層に分かれるが、自然堆積である。

遺物は側溝堆積土から出土している（図版15）。A期堆積土からロクロかわらけ、在地産片口鉢（14）、常滑産甕が少量出土している。B期堆積土からは、ロクロかわらけ、常滑5～6a型式期の甕（13）や常滑産甕（5～12）、在地産片口鉢（4）、渥美産片口鉢、古瀬戸後I～後II期の天目茶碗（2）、古瀬戸後期の小皿（1）、龍泉窯系割花文青磁碗（3）、白磁、砥石（15・16）などが出土している。このうち、甕の胴部破片2点は砥石に転用されている（10・11）。

（2）区画溝跡

【SD 1500・1572区画溝跡】（図版12・16）

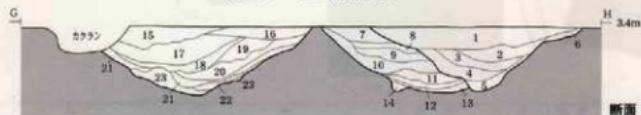
B区北部で検出した東西溝跡である。西はSX 1600A道路跡東側溝に接続し、東はSX 1397湿地跡に接続するとみられる。東西46m分を検出した。SD 1500は、SX 1600東側溝から東へ北向きのゆるやかな弧を描きながら36m延びた地点で止まり、その先は深さが0.5m浅くなったSD 1572が東へ延びる。SE 1571井戸跡より新しく、SD 1501区画溝跡より古い。

SD 1500は上幅2.5m前後、下幅0.7～1.0m、深さは0.8mある。断面は上部が大きく開く逆三角形である。堆積土は4層に大別でき、自然堆積したのち（2～4層）、最上層は人為的に埋め戻されている。SD 1572はSD 1500に接続して東へ11m以上延びる。上幅1.8m以上、下幅1.3m以上、深さは0.3mある。

遺物はSD 1500から出土している（図版17）。3層から常滑3～5型式期の片口鉢（3）や4型式



SD1500・1501 (南東から)



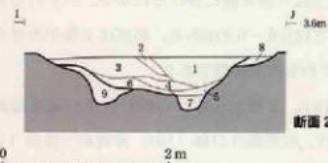
| No. | 土色・土性 | 腐入物など | 標 | No. | 土色・土性 | 腐入物など | 標 |
|-----|-------------------|----------------|-------------|-----|--------------------|-----------------|-------------|
| 1 | 黒褐色(7YR3/1)シルト | SD1501B層 1層 | | 13 | 黒褐色(5Y8/3)シルト | 泥V・瓦質・柱質がタマ状に堆積 | SD1501A層 5層 |
| 2 | 黒褐色(7.5Y3/2)シルト | SD1501B層 2層 | | 14 | 黒褐色(5Y8/3)シルト | 12層をタマ状に含む | SD1501 1層 |
| 3 | 黒褐色(10Y3/1)シルト | | | 15 | 灰ホーリー色(7Y6/3)シルト | 13層をタマ状に含む | |
| 4 | 褐紅色(10Y3/1)砂質シルト | SD1501B層 3層 | | 16 | 灰褐色(5Y4/1)シルト | | SD1500 2層 |
| 5 | 灰褐色(7Y6/1)砂質シルト | 泥V・柱質を多く含む | | 17 | オーバーパーカル(7Y4/1)シルト | | |
| 6 | 灰褐色(2.5Y6/1)砂質シルト | 第V層を大きいブロックで含む | SD1501B層 4層 | 18 | オーバーパーカル(7Y4/1)シルト | | |
| 7 | 灰褐色(2.5Y6/1)砂質シルト | SD1501A層 1層 | | 19 | 灰褐色(5Y4/1)砂質シルト | | SD1500 3層 |
| 8 | 灰褐色(2.5Y6/1)砂質シルト | 第V層を大きいブロックで含む | | 20 | オーバーパーカル(7Y4/1)シルト | | |
| 9 | 灰褐色(2.5Y6/1)砂質シルト | 第V層ブロックを多く含む | SD1501A層 2層 | 21 | 黒褐色(2/4)砂質シルト | 炭化物を多く含む | |
| 10 | 灰褐色(2.5Y6/1)砂質シルト | 第V層ブロックを含む | SD1501A層 3層 | 22 | 灰褐色(5Y6/1)砂質シルト | | |
| 11 | 褐紅色(7Y3/1)砂質シルト | | | 23 | 灰褐色(5Y6/1)砂質シルト | | SD1500 4層 |
| 12 | 褐紅色(7Y3/1)砂質シルト | SD1501A層 4層 | | | | | |



断面 1 写真 (SD1500)

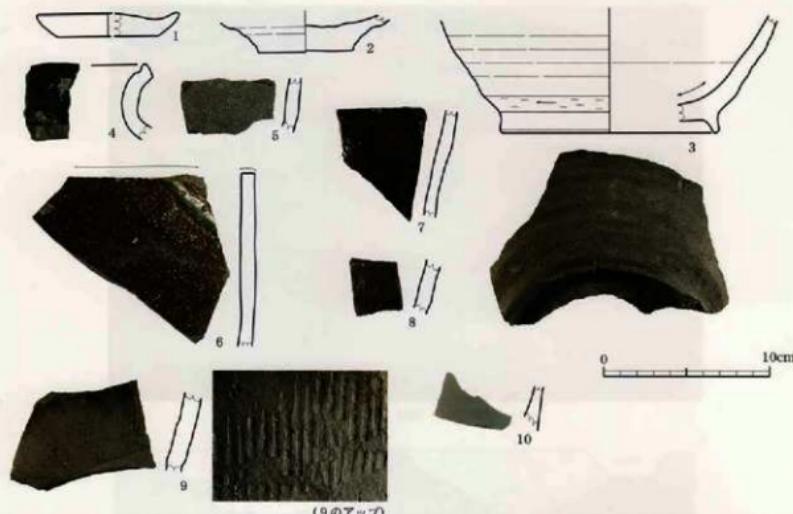


断面 1 写真 (SD1501)



| No. | 土色・土性 | 腐入物など | 標 |
|-----|-------------------|-----------------|-------------|
| 1 | 黒褐色(10Y6/2)シルト | | |
| 2 | 青褐色(2.5Y6/4)砂質シルト | | |
| 3 | 黒褐色(10Y6/2)シルト | | |
| 4 | 黒褐色(10Y6/3)シルト | | |
| 5 | 黒褐色(10Y6/3)シルト | 黄褐色細粒をタマ状に含む | SD1501B層堆積土 |
| 6 | 黒褐色(10Y6/3)シルト | 6層を9・10層に跨る手配 | |
| 7 | 黒褐色(10Y6/2)粘土 | 泥炭地の下部ではブロックを含む | |
| 8 | 黒褐色(10Y6/1)粘土 | 泥V・柱質のブロックを多く含む | SX1600A層堆積土 |
| 9 | こじ成岩(10Y5/3)シルト | 泥炭層のブロックを含む | SD1501A層堆積土 |

図版 16 SD1500・1501区画溝跡



(9のアップ)

| No. | 出土地點 | 種別 | 器種 | 產地 | 特 | 記 |
|--------|------|-----|----|-----------------------------|-----------------|------------------|
| 1. 2層 | かわらけ | 小鉢 | | 口徑(8.6)、底径(6.0)、高さ1.4、残存1/4 | ロクロナゲ | 断部：円転削切 02044 |
| 2. 2層 | かわらけ | 小鉢 | | 底径(6.7)、残存1/4 | ロクロナゲ | 底部：円転削切 02045 |
| 3. 3層 | 陶器 | 片口鉢 | 常滑 | 高さ(13.2) | 【常滑焼～5型式類】 | 02052 |
| 4. 3層 | 陶器 | 甕 | 常滑 | | 【常滑4型式類】 | 02051 |
| 5. 1層 | 陶器 | 甕 | 常滑 | | 【押出模様】、へき起弓口 | 02049 |
| 6. 2層 | 陶器 | 甕 | 常滑 | | 【押出模様】、瓶口を砥石に転用 | 02047 |
| 7. 2層 | 陶器 | 甕 | 常滑 | | 【押出模様+斜縫】 | 02046 |
| 8. 1層 | 陶器 | 甕 | 常滑 | | 【押出模様+斜縫】 | 02050 |
| 9. 1層 | 陶器 | 甕 | 常滑 | | 【押出模様】 | 02048 |
| 10. 2層 | 白磁 | 碗 | | | | 02043 |

図版17 SD1500区画溝跡出土遺物

期の甕（4）、2層からロクロかわらけ（1・2）、常滑産甕（6・7）、白磁碗（10）、1層から渥美産甕（9）や常滑産甕（5・8）、堆積土から刀子が出土している。6は甕胴部破片を砥石に転用されている。

【SD 1501 A・B 区画溝跡】（図版12・16）

B区北部で検出した東西溝跡で、2時期の変遷（A→B）がある。西はSX1600 B道路跡東側溝やSD1565溝跡に接続し、東はSX1397湿地跡に接続するとみられる。東西53m分を検出した。SD1500区画溝跡、SE1526・1571戸跡より新しく、SK1502・1506土壤より古い。

B期は上幅1.5～2.5m、下幅0.8～1.2m、深さは0.6～0.8mある。断面は底面北側が1段低くなるが、全体としては上部が大きく開く逆台形である。堆積土は大別4層に分けられるが、いずれも自然堆積である。A期は上幅1.8m以上、下幅1.0m前後、深さは0.6～0.8mある。断面は上部が大きく開くU字形である。堆積土は大別5層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

遺物はB期堆積土と確認面から出土している（図版18）。3層からロクロかわらけ、須恵器系甕（15）、常滑産甕（11・13）、1・2層からロクロかわらけ、在地産片口鉢（10）、常滑産三筋甕（9）、須恵器系甕（14）、砥石（18）、鐵鍋？（16）、鐵釘、堆積土から常滑産甕（6）、渥美産甕（12）、白



| No. | 出土地点 | 種別 | 器種 | 产地 | 特 | 微 | 登録 |
|-----|--------|-----|-----|------|--------------------------------------|---|-------|
| 1 | B周地積土 | 白磁 | 碗 | | | | 02053 |
| 2 | 確認面 | 白磁 | 碗 | | | | 02064 |
| 3 | B周地積土 | 白磁 | 四耳壺 | | 肩部に沈線 | | 02065 |
| 4 | 確認面 | 陶器 | 未 | 陶美 | 口径8.2cm 耳付 | | 02118 |
| 5 | 確認面 | 陶器 | 未 | 常滑 | 押印(重ね状) | | 02056 |
| 6 | B周地積土 | 陶器 | 未 | 常滑 | 破片を砾石に転用 | | 02059 |
| 7 | 確認面 | 陶器 | 未 | 陶美 | 破片を砾石に転用 | | 02057 |
| 8 | B周地積土 | 陶器 | 未 | 陶美 | | | 02059 |
| 9 | B周1・2層 | 陶器 | 三透造 | 常滑 | 側部に平行沈線 | | 02060 |
| 10 | B周1・2層 | 陶器 | 片口杯 | 住地 | 内面に施し目 | | 02066 |
| 11 | B周1層 | 陶器 | 未 | 常滑 | 押印 破片を砾石に転用 | | 02054 |
| 12 | B周地積土 | 陶器 | 未 | 陶美 | 押印(丸文?) | | 02062 |
| 13 | B周1層 | 陶器 | 未 | 常滑 | 押印(重ね状) | | 02053 |
| 14 | B周1・2層 | 陶器 | 未 | 須磨郡系 | 肩部に捺擦き波状文 | | 02061 |
| 15 | B周3層 | 陶器 | 未 | 須磨郡系 | 肩部に捺擦き波状文 14と同一模様 | | 02055 |
| 16 | B周1・2層 | 鉄製品 | 鍔々 | | 厚0.2~0.4 | | 02205 |
| 17 | B周地積土 | 鉄製品 | 打 | | 残存長5.5cm 厚0.9~1.6 | | 02200 |
| 18 | B周1・2層 | 石製品 | 砾石 | | 長5.5cm 幅3.5~6.0cm 厚0.9~2.2cm 【細粒凝灰岩】 | | 02257 |

図版18 SD1501区面溝跡出土遺物

磁四耳壺（3）、白磁碗（1）、不明木製品、鐵釘（17）、確認面から渥美産壺（4）、常滑産壺（5・7）、白磁碗（2）などが出土している。6・7・11は、陶器破片を砾石に転用されている。

(3) 濡地跡

S X 1752はA区北東部と南端、S X 1397はB区中央部の東端、S X 1607はC区中央部、S X 1608はC区北端で検出した。住宅地区で検出したS X 1200湿地跡と一連と考えられる。その下には、基本層序第IV層を介して平安時代のS D 1100河川跡が位置することから、河川が氾濫で埋没したのち湿地化したとみられる。

【S X 1397・1752湿地跡】(図版12・19)

S X 1752はA区北東部と南端で調査を行っている。S D 1751・1755区画溝跡やS D 1634溝跡より古い。S X 1397はB区中央部で調査を行っている。4時期の変遷(A→B→C→D)があり、S D 1319溝跡より古く、C期はS K 1322土壌より新しい。S X 1752はA区北東部が区画溝跡や攪乱で大きく壊され、南端は湿地跡の一帯の調査にとどまることから、以下、S X 1397の調査成果を述べる。湿地の位置は、A期からC期が新しくなるにつれて東へ移動しており、D期はC期より少し西に形成されている。幅はA期が最も広いとみられ、B期からD期は新しくなるにつれて狭くなる。出土遺物はA・B期に多く、C期に減少し、D期は著しく少なくなる。

A期は上幅6.2m以上、下幅3.6m以上、深さは0.6mある。断面は東へ向けてゆるやかに傾斜する。堆積土は5層に分けられた。3層は炭化物・灰・焼土を多く含み、遺物が多く出土しており、これらは廃棄層と考えられる。遺物は堆積土から出土している(図版20~22)。ロクロかわらけ皿・小皿(1・2)、脚部とみられるかわらけ、涅美産壺、白磁碗、漆紙文書(4)、漆器椀(3)・小皿(5)、不明漆製品(6)、曲物底板(7)、横槌(10)、鞘(13)、連衝下駄(15)、刀形?(12)、棒状木製品(11)、手火、鉄製小刀(8)、不明鉄製品(9)、砥石(14)、壁土、古代の平瓦・赤焼土器などが出土している。13は幅が3.2cmであることから、腰刀の鞘と考えられる。鞘口(鰐口)の側面は半円状に削り抜かれ、把縁が食い込む呑み口式の鞘である。また、植物化石の種実分析の結果、2・3・4層はイネを主体とし、オオムギ、イヌビエーヒエがこれに次ぎ、他にモモ、コムギ、アサ、オニバス、マメ科、ヒシ属、シソ属、ナスなどが認められた⁽¹¹⁾。

3層と5層は花粉分析を行っている。その結果、ホタルイ属、サナエタデ近似種、オニバス、ヒシ属が出土した。分析を行った三村昌史氏らは、湿地の岸辺にはタデ科植物が生育し、そこから離れた幾分水深のあるところはオニバスやヒシといった水生植物が生育していたと指摘している。

B期は上幅が南へ向けて広がり、北端は3.0m、南端は6.2m以上ある。下幅は1.0~1.5m、深さは0.5mある。断面は湿地中央へ向けてゆるやかに傾斜する。堆積土は7層に分けられ、自然堆積の過程で炭化物や焼土などの廃棄層が認められる。遺物は堆積土から出土している(図版23・24)。かわらけはロクロと手づくねがあり、前者は法量に大(=皿、1)・小(=小皿、2~5)がある。手づくねかわらけは小片であるが3点とも1段ナデである(6~8)。ほかに常滑産三筋壺(10)、常滑産甕、古瀬戸前期の瓶子I類(11)、漆器椀(9)、戸車(12)、包丁(13)、手火、砥石(14~17)、古代の須恵器、赤焼土器などが出土している。このうち、11は破片を砥石に転用されている。また、大型植物化石はモモ、オニグレミ、ヒョウタン仲間が出土した。

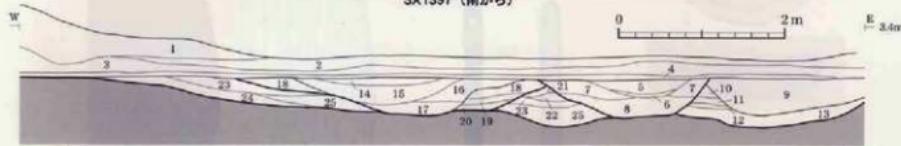
C期は上幅2.5m前後、下幅は1.2m前後、深さは0.5mある。断面は上が大きく開くU字形である。



SX1397 (南から)

0 1 2 m

E 3.4m

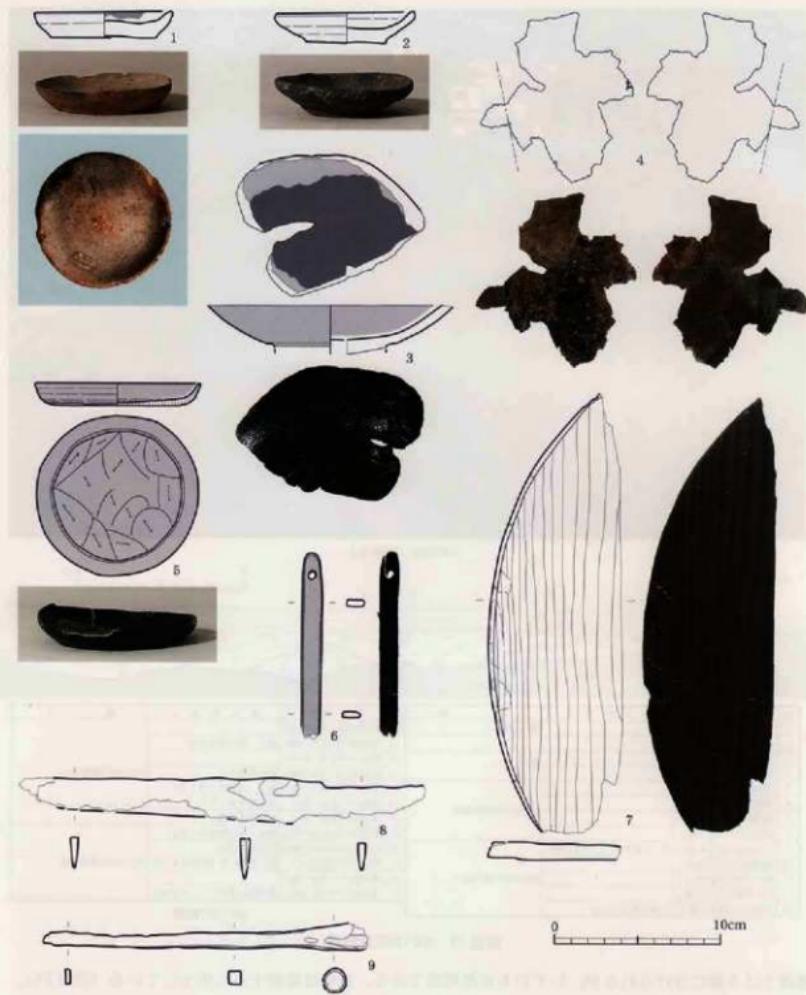


| No. | 土色・土性 | 盛入物など | 備考 | No. | 土色・土性 | 盛入物など | 備考 |
|-----|-----------------|-----------------|------|-----|-----------------|----------------|------------|
| 1 | 褐色10YR4/3粘土 | | 第1a層 | 14 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | | |
| 2 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | | | 15 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂土・炭化物を含む | |
| 3 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | | | 16 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | | |
| 4 | 黒褐色10YR4/3粘土 | | 第1c層 | 17 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂化物を含む | |
| 5 | 黒褐色10YR4/2粘土 | | | 18 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂土・炭化物を多く含む | SX1397D堆積土 |
| 6 | 黒褐色10YR4/2粘土 | | | 19 | 黒褐色10YR4/2粘土 | 砂化物を多く含む | |
| 7 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | | | 20 | 黒褐色10YR4/2粘土 | 砂化物を多量に含む | |
| 8 | 黒褐色10YR4/2粘土 | | | 21 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂土・炭化物を多く含む | |
| 9 | 黒褐色10YR4/2粘土 | 10・11層を薄くナメ状に含む | | 22 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂化物を含む | |
| 10 | 黒褐色10YR4/2粘土 | | | 23 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂土・粘土・炭化物を多く含む | SX1397A堆積土 |
| 11 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | | | 24 | 黒褐色10YR4/2粘土 | | |
| 12 | 黒褐色10YR4/2粘土 | | | 25 | 黒褐色10YR4/2粘土(重) | 砂化物を含む | |
| | 黒褐色10YR4/2粘土 | 12層を多量に含む | | | | | |

図版19 SX1397湿地跡

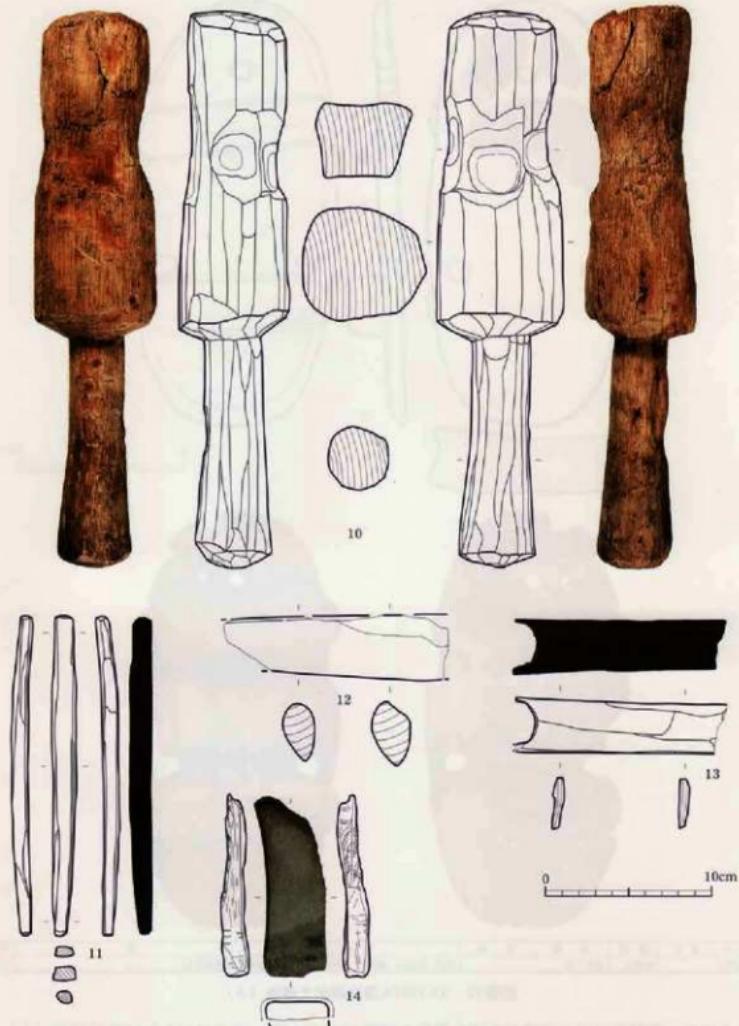
堆積土は5層に分けられるが、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土から出土している（図版25）。ロクロからわけ皿・小皿（1）、脚部とみられるかわらけ、常滑産片口鉢（2）、常滑5型式期の甕（3）、常滑産甕（6・7）・三筋壺（4）、在地産片口鉢、白磁碗、連歛下駄（10）、砥石（9）などが出土している。このうち、6・7は破片を砥石に転用されている。

D期は上幅1.5～2.5m、下幅は0.5～1.0m、深さは0.5mある。断面は上が大きく開くU字形である。堆積土は4層に分けられるが、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土からロクロからわけ、常滑産甕、在地産甕、棒状木製品（図版25～8）、漆器丸盆（図版26）などが少量出土している。



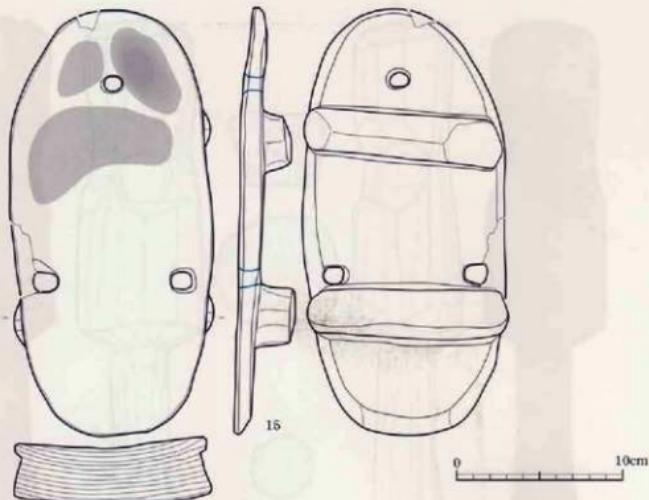
| No. | 出 土 時 位 | 種 别 | 器 物 | 原 地 | 特 徴 | 圖 | 登 記 |
|-----|---------|------|-------|-----|---|---|-------|
| 1 | 堆積土 | かわらけ | 小皿 | | 口径9.3 高径0.2 厚さ1.6 完形 ロクロナデ 通面:回転条羽、口縁部に施擦状付着 | 1 | 01094 |
| 2 | 堆積土 | かわらけ | 小皿 | | 口径8.4 高径0.2 厚さ1.81 現存:3/5 ロクロナデ 腹部:回転条羽 | 2 | 01093 |
| 3 | 堆積土 | 漆器 | 椀 | | 内外面:黒漆塗り 漆アレットに施用 | 3 | 01213 |
| 4 | 堆積土 | 漆紙文書 | | | ウルシ面に墨書き 91102×3952 | | 01570 |
| 5 | 堆積土 | 漆器 | 小皿 | | 口径9.8 高径7.4 厚さ1.5 内外面:黒漆塗り | 5 | 01262 |
| 6 | 堆積土 | 漆器 | 不明漆製品 | | 黒漆塗り 漆アレットに施用 | 6 | 01289 |
| 7 | 堆積土 | 大鉈頭 | 鉈頭 | | 底板厚0.9 【そと版】 | 7 | 01216 |
| 8 | 堆積土 | 鉈製品 | 小刀 | | 現存長24.3 刀頭長19.3 刀先幅2.7 黄銅色6.0 柄厚0.4~0.5 | 8 | 01396 |
| 9 | 堆積土 | 鉈製品 | 不明 | | 現存長19.6 柄厚(先:長方形)0.9×0.3 中:正方形-0.8 基部:円筒形-1.4 | 9 | 01267 |

図版20 SX1397A湿地跡出土遺物（1）



| No. | 出土層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 特 徴 | 記 | 登録 |
|-----|------|-----|-------|----|---------------------------------------|---|-------|
| 10 | 堆積土 | 木製品 | 棒槌 | | 長33.3 身幅0.6~7.5 柄幅3.6~4.5【コナラ属】 | | 01201 |
| 11 | 堆積土 | 木製品 | 棒状木製品 | | 長19.2 幅1.4 厚0.8【コナラ属】 | | 01244 |
| 12 | 堆積土 | 木製品 | 刀形? | | 現存長13.5 幅3.9 厚2.4【ナニグル属】 | | 02214 |
| 13 | 堆積土 | 木製品 | 翫 | | 現存長12.7 幅3.2 厚0.6【ナニグル属】 | | 01212 |
| 14 | 堆積土 | 石製品 | 破石 | | 長10.8 幅3.8 現存厚1.5 [破片] | | 01404 |

図版21 SX1397A湿地跡出土遺物（2）



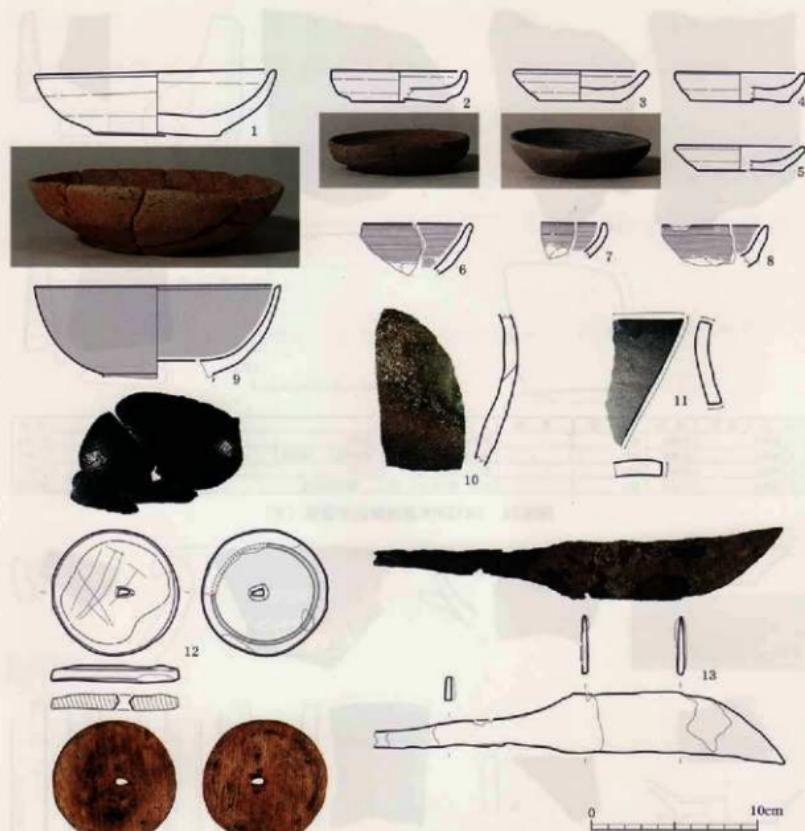
| No. | 出 土 確 定 | 種 别 | 部 位 | 発 地 | 特 | 備 | 登 記 |
|-----|---------|-----|------|-----|-------------------------------------|---|-------|
| 15 | 確 | 木製品 | 遺物下敷 | 左用 | 長25.4 幅12.1 高3.7 厚1.4 前後幅1.2 後後幅1.5 | | 01254 |

図版22 SX1397A湿地跡出土遺物（3）

このほか、確認面や出土位置が不明な遺物を図版27に示した。ロクロかわらけ柱状高台（1）、在地産片口鉢（3）、常滑産甕（6～9）、同安窯系青磁碗（4）、青磁皿もしくは盤（5）などが出土した。また、2は古代の須恵器破片が磁石に転用されたものである。

【S X 1607・1608湿地跡】（図版10・28）

C区中央部で検出したのがS X 1607、C区北端で確認したのがS X 1608である。住宅地区で検出したS X 1200湿地跡、A・B区で検出したS X 1397湿地跡と一連と考えられる。したがって、S X



| No. | 出土層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 特徴 | 基 號 |
|-----|------|------|-----|----|---|-------|
| 1 | 海積土 | かわらけ | 皿 | | 口径(14.7) 汎径7.8 番高(3.9) 容量 ロクロナデ 底部:回転角切 | 01681 |
| 2 | 海積土 | かわらけ | 小皿 | | 口径(8.3) 汎径(5.8) 番高(1.8) 番存2/5 ロクロナデ 底部:回転角切 | 01682 |
| 3 | 海積土 | かわらけ | 小皿 | | 口径(8.2) 汎径(5.6) 番高(1.8) 番存2/5 ロクロナデ 底部:回転角切 | 01684 |
| 4 | 海積土 | かわらけ | 小皿 | | 口径(8.0) 汎径(6.0) 番高(1.7) 番存1/4 ロクロナデ 底部:回転角切 | 01685 |
| 5 | 海積土 | かわらけ | 小皿 | | 口径(8.0) 汎径(5.2) 番高(1.5) ロクロナデ 底部:回転角切 | 01686 |
| 6 | 海積土 | かわらけ | 皿 | | 現存:一部 口縁部:一回子ザ 体部:オサエ | 01678 |
| 7 | 海積土 | かわらけ | 皿 | | 現存:一部 口縁部:二回子ザ 体部:オサエ | 01679 |
| 8 | 海積土 | かわらけ | 皿 | | 現存:一部 口縁部:一回子ザ 体部:オサエ | 01680 |
| 9 | 海積土 | 漆器 | 碗 | | 口径(14.8) 内外墨塗剥り 内面に漆付箋+漆容器に粘付【ケヤキ】 | 01217 |
| 10 | 海積土 | 陶器 | 三筋曲 | 常滑 | 注溝:複数 | 01689 |
| 11 | 海積土 | 陶器 | 盤子 | 瀬戸 | 吉野川底子1層 遺片を砾石に転用【古墳時代】 | 01690 |
| 12 | 海積土 | 木製品 | 戸車 | | 幅7.6 厚0.7×L 中央に通孔【ケヤキ】 | 01226 |
| 13 | 海積土 | 竹製品 | 包丁 | | 現存長24.0 刀形長13.2 番幅長11.4 番幅0.3 | 01238 |

図版23 SX1397B湿地跡出土遺物（1）

1200・1397湿地跡はC区北東部で南（SX1607）と西（SX1608）へ分岐するとみられる。両者とも大別2時期に分けられる（A→B）。

SX1607はA期が上幅10.0m前後、下幅7.0mとみられ、深さは1.2mである。断面は皿状である。堆積土は13層に分けられたが、いずれも自然堆積である。遺物はA期堆積土から少量出土している（図版29）。手づくねかわらけ小皿（1）、ロクロかわらけ小皿（2）、漆器椀（4）などがある。B期



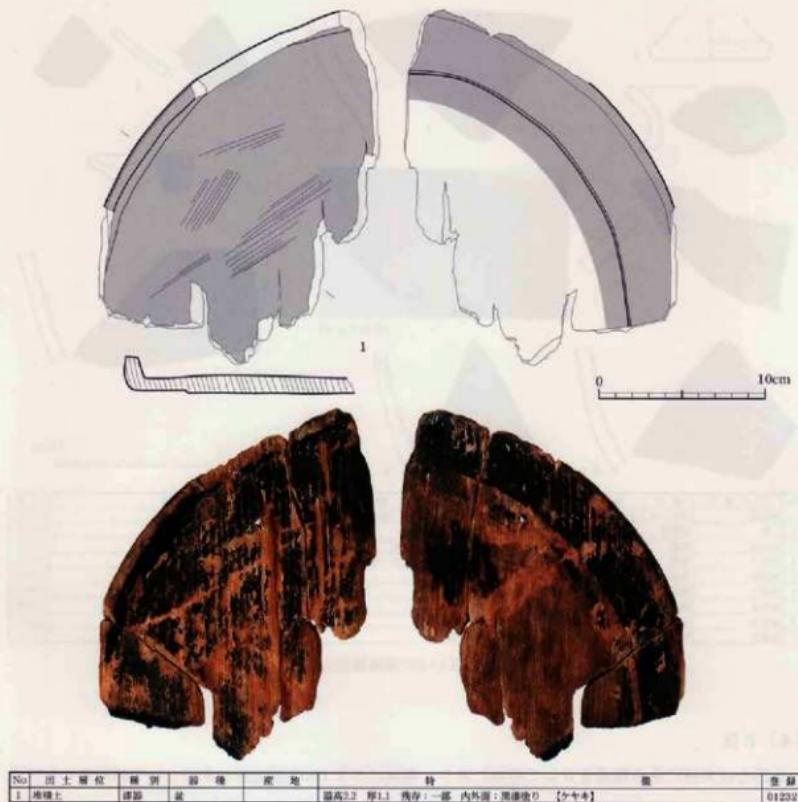
| No. | 出 土 順 位 | 種 別 | 器 物 | 特 徴 | 圖 | 號 |
|-----|---------|-----|-----|-----------------------------|---|-------|
| 14 | 溝緩土 | 石製品 | 敲石 | 残存長6.6 幅5.5~9.1 【砂利】 | | 01384 |
| 15 | 溝緩土 | 石製品 | 敲石 | 残存長11.0 残存幅10.3 残存厚6.0 【砂利】 | | 01400 |
| 16 | 溝緩土 | 石製品 | 敲石 | 長5.2 幅2.8 厚1.3 【愛山型】 | | 01397 |
| 17 | 溝緩土 | 石製品 | 敲石 | 長2.0 幅5.1~6.0 厚1.1 【細粒斜狀】 | | 01399 |

図版24 SX1397B 濡地跡出土遺物（2）



| No. | 出 土 順 位 | 種 別 | 器 物 | 地 | 特 徴 | 圖 | 號 |
|-----|---------|-----|---------|---|--|---|-------|
| 1 | C期堆積土 | 陶器 | かわらけ 小瓶 | 白胎(8.2) 底径4.3 高さ2.2 残存1/2 ロクロチズ 底部:回転舟型 | | | 01075 |
| 2 | C期堆積土 | 陶器 | 片口器 | 常滑 | | | 01069 |
| 3 | C期堆積土 | 陶器 | 甕 | 常滑 | 【深淵5型式甕】 | | 01068 |
| 4 | C期堆積土 | 陶器 | 三筋甕 | 常滑 | 側面に平行な縦3本の筋 | | 01074 |
| 5 | C期堆積土 | 陶器 | 白瓶 | 常滑 | 高台部(6.2) 内面正中より部分に花織 | | 01067 |
| 6 | C期堆積土 | 陶器 | 常滑 | 押切(頭子+斜削) | 瓶片を砾石に転用 | | 01071 |
| 7 | C期堆積土 | 陶器 | 甕 | 常滑 | 押切(頭子) 瓶片を砾石に転用 | | 01070 |
| 8 | D期堆積土 | 木製品 | 棒状木製品 | 常滑 | 残存長22.5 幅2.1 厚1.9 端部付近が焼け縮んでいる 【カラマツ属】 | | 01242 |
| 9 | C期堆積土 | 石製品 | 敲石 | 常滑 | 長2.5 幅4.3 厚2.8 【砂利】 | | 01401 |
| 10 | C期堆積土 | 木製品 | 通函下盤 | 常滑 | 残存長12.8 残存幅6.1 厚1.5 | | 01346 |

図版25 SX1397C・D 濡地跡出土遺物

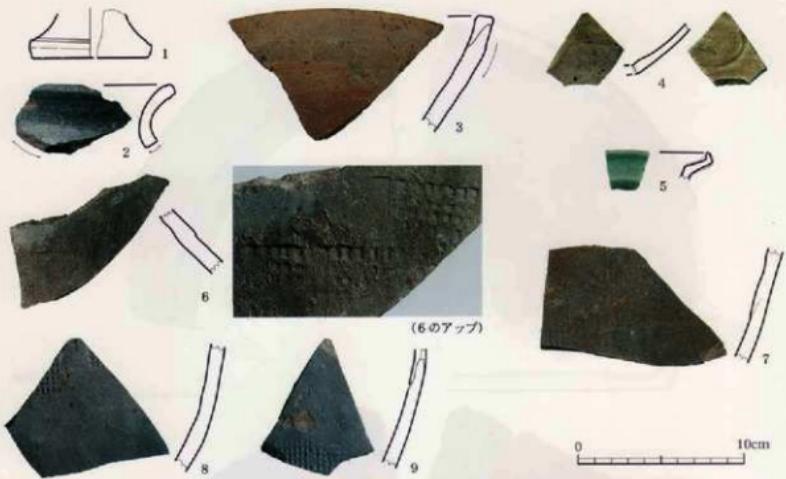


図版26 SX1397D湿地跡出土遺物

は上幅7.5m前後、下幅5.6m前後、深さは0.9mである。断面は皿状である。堆積土は13層に分けられたが、いずれも自然堆積である。

S X 1608はA期は上幅9.5m前後、下幅7.0m前後、深さは0.4～0.5mである。断面は浅い皿状である。堆積土は5層に分けられたが、いずれも自然堆積である。B期は上幅9.0m前後、下幅7.0m前後、深さは1.2mである。断面は皿状である。堆積土は11層に分けられたが、いずれも自然堆積である。2～5層は、炭化物・灰・焼土を含むが、とくに2層は多量に含んでいる。遺物はB期堆積土から少量出土している（図版29）。底部の厚いロクロかわらけ皿（3）、砥石（5・6）、曲物底板、馬歯などある。

（注1）平成13・14年度の発掘調査の際、S X 1200・1397湿地跡の花粉分析や遺構出土の大型植物化石の種実分析、木製品の樹種同定を行っており、それらの結果を踏まえてパレオ・ラボの三村昌史・新山雅弘・植田秀生の各氏が中野高柳遺跡の古環境や植物利用の分析を行っている。その成果は、「中野高柳遺跡Ⅲ」以降に掲載する予定である。



| No. | 出土 領域 | 種別 | 面 | 縁 | 底 | 特 | 備 | 登録番 |
|-----|-------|------|------|----|------|-------------------|---------------|-------|
| 1 | 確認面 | かわらけ | 斜板高台 | | | 縁部陥(?)。残存:一部 | ロクロナデ 縁部:回転系切 | 01103 |
| 2 | 上層 | 雨原層 | 裏 | | | 破片含砾石に転用 | | 03022 |
| 3 | 確認面 | 陶器 | 口口跡 | 左側 | | 外縁(?)底部に使用痕 | | 01104 |
| 4 | 地塙土 | 磁器 | 青磁施 | | 切支巻系 | 内面:刻花文と模様文 外面:模様文 | | 94021 |
| 5 | 確認面 | 陶器 | 口口跡 | 左側 | | | | 01099 |
| 6 | 地塙土 | 陶器 | 裏 | 常備 | | 津摩 | | 94059 |
| 7 | 確認面 | 陶器 | 裏 | 常備 | | (津摩網格子) | | 01100 |
| 8 | 確認面 | 陶器 | 裏 | 常備 | | (津摩網格子) | | 01101 |
| 9 | 確認面 | 陶器 | 裏 | 常備 | | (津摩網格子) | | 01102 |

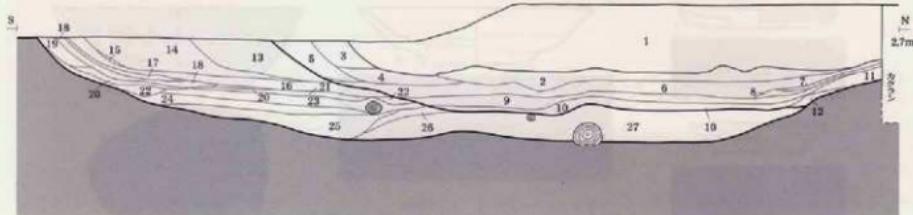
図版27 SX1397湿地跡出土遺物

(4) B区

A区とは東西に走る現道を介して南側にあり、南端はSX1608湿地跡が水田として利用された凹地までをB区とした。西側をSX1600道路跡が南北に継続する。内部は規模の大きな東西溝跡によって3区に大別できる。B1区はSD1500・1501区画溝跡北側で、SX1600の東で掘立柱建物跡・井戸跡・土壤・溝跡を確認した(図版30)。掘立柱建物跡はB2区に較べてまばらに分布し、建物の方向も異なる。井戸跡は中央部にかたよっており、とくにSE1643周辺は5基重複していた。

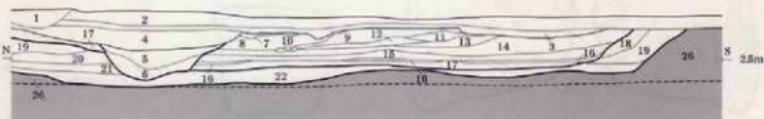
B2区は1区の南でSD1040東西溝跡の北側である。SX1600の東で掘立柱建物跡・井戸跡・土壤・溝跡を確認した(図版31・32)。掘立柱建物跡は北部中央と南東部に認められ、とくに前者は多くの建物が集中する。建物群の南は井戸跡や土壤・溝跡がまばらに分布する。北東は井戸跡や大型の土壤が認められる。西は井戸跡・土壤・溝跡が認められるが、数は少ない。これらの年代は、出土遺物から第IV期、第VII期とみられ、とくに前者が主体を占める。

B2区は、第IV期に位置付けられた区画Gが存在する^(注1)。区画Gは北・西・南・東の四方をそれぞれSD1500・1501、SX1600、SD1040、SX1397湿地跡で囲まれており、規模は東西70m前後、南北50~53mほどである。B2区の遺構のあり方からみて、建物集中域は北部中央が主屋と



| No. | 土色・土性 | 腐入物など | 備考 | No. | 土色・土性 | 腐入物など | 備考 |
|-----|-------------------|---------------|-------|-----|-------------------|------------------|-------|
| 1 | 黒褐色(10YR2/3)粘土 | | 第1a解 | 15 | 黒褐色(10YR2/3)粘土 | 炭化物を含む | |
| 2 | 炭化物層 | 塊状・炭を含む | | 16 | 黒褐色(10YR4/2)粘土 | 炭化物を含む | |
| 3 | 褐色(10YR5/1)粘土 | 炭化物を含む | | 17 | 炭化物層 | 塊状・炭を含む | |
| 4 | 褐色(10YR4/1)粘土 | 炭化物を含む | | 18 | 黒褐色(10YR4/2)粘土 | | |
| 5 | シルト(10YR4/1)砂質(1) | 炭化物を含む | | 19 | 黒褐色(10YR4/2)砂質(1) | | |
| 6 | 褐色(10YR5/1)粘土 | 炭化物を含む | | 20 | 炭化物層 | 塊土を含む | A南堆積土 |
| 7 | 炭化物層 | 塊状・炭を含む | B南堆積土 | 21 | 黒褐色(10YR4/2)粘土 | | |
| 8 | 炭化物層(10YR4/2)粘土 | 炭化物をシラス状に含む | | 22 | 褐色(10YR5/1)粘土 | 炭化物をシラス状に含む | |
| 9 | 炭化物層(10YR5/1)粘土 | 炭化物を含む | | 23 | 褐色(10YR4/1)粘土 | 第Ⅳ層ブロックを含む | |
| 10 | 褐色(10YR5/1)粘土 | 木炭・木葉を含む | | 24 | 褐色(10YR4/1)粘土 | 木炭・木葉・第Ⅳ層ブロックを含む | |
| 11 | 炭化物層(10YR5/1)粘土 | | | 25 | 褐色(10YR4/1)粘土 | 第Ⅳ層ブロックを含む | |
| 12 | シルト(10YR5/1)砂質 | | | 26 | 褐色(10YR4/1)粘土 | 第Ⅳ層ブロックを含む | |
| 13 | シルト(10YR4/1)砂質(1) | 第Ⅳ層ブロックを含む | | 27 | 褐色(10YR4/1)粘土 | シルトを含む | |
| 14 | 褐色(10YR4/1)砂質(1) | 第Ⅳ層ブロックを多量に含む | A北堆積土 | | | | |

SX1607断面



| No. | 土色・土性 | 腐入物など | 備考 |
|-----|-------------------|--------------|-------------|
| 1 | 褐色(10YR4/1)砂質(1) | | 第1a解 |
| 2 | 褐色(10YR4/1)粘土 | | |
| 3 | 褐色(10YR5/1)粘土 | | 第1c解 |
| 4 | 炭化物層(10YR4/1)砂質 | | |
| 5 | 褐色(10YR4/1)粘土 | | |
| 6 | 褐色(10YR4/2)粘土 | 炭化物ブロックを含む | 溝堆積土 |
| 7 | 褐色(10YR4/2)粘土 | 炭化物を多量に含む | |
| 8 | 炭化物層 | 塊状・炭を多量に含む | |
| 9 | 褐色(10YR4/2)粘土 | 第Ⅳ層を含む | |
| 10 | シルト(10YR4/1)砂質(1) | 塊状・炭を含む | |
| 11 | 黒褐色(10YR4/2)粘土 | 炭化物・灰・第Ⅲ層を含む | |
| 12 | 褐色(10YR4/2)粘土 | 炭化物を多量に含む | |
| 13 | 褐色(10YR4/1)砂質(1) | | SX1608A南堆積土 |
| 14 | 褐色(10YR4/1)粘土 | | |
| 15 | 褐色(10YR2/2)粘土 | | |
| 16 | 炭化物層 | | |
| 17 | 黒褐色(10YR4/2)粘土 | 炭化物を含む | |
| 18 | 黒褐色(10YR5/1)粘土 | | |
| 19 | シルト(10YR4/1)砂質 | | |
| 20 | シルト(10YR4/1)砂質 | | |
| 21 | 黒褐色(10YR5/1)粘土 | | |
| 22 | 褐色(10YR4/1)粘土 | | |

SX1608断面

0 2m



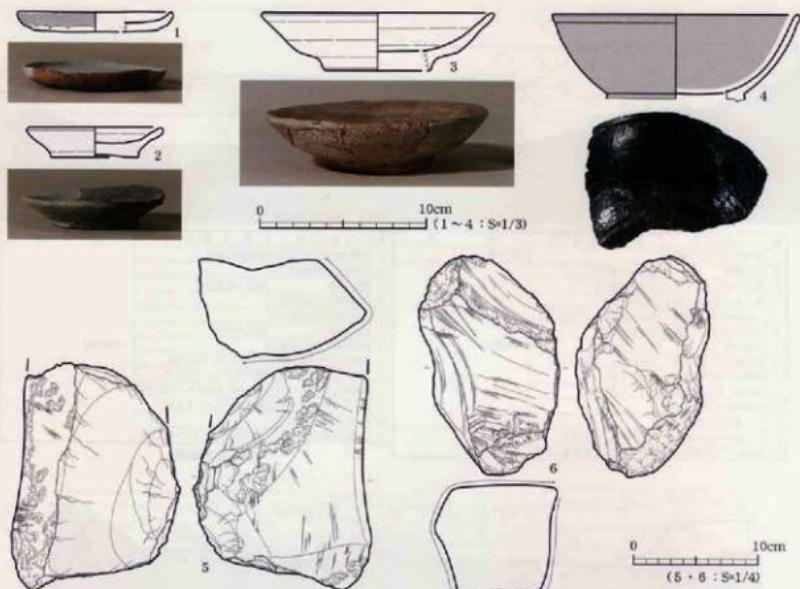
SX1608断面写真

図版28 SX1607・1608湿地跡

付属建物群、後者が副屋とみられる。主屋の南は遺構の数が少ないとから広場的空間とみられ、区画周縁の北東隅から東側は井戸跡や大型土壙の分布域であり、区画内部の場の使われ方が固定的かつ継続的だったと考えられる。B 3 区は SD 1040 東西溝跡の南側である。遺構密度は低く、S X 1600 の東で掘立柱建物跡 5 棟と数基の土壙を検出したにとどまる（図版31）。

遺物は掘立柱建物跡や井戸跡、土壙、溝跡から、土器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品などが出土している。とくに SK 1008・1310・1311 土壙からの出土が多い。

(注1) 遺構の理解は、「中野高柳遺跡」にもとづいた。また、区画の呼称は、同書で区画まで使用したことから、それに統けている。



| No. | 出土遺物・層位 | 種別 | 基盤 | 産地 | 特徴 | 登録 |
|-----|------------|---------|----|----|---|-------|
| 1 | SX1607A 下層 | かわらけ 小瓶 | | | 口径9.4 残高1.2 残存1/4. 口縁部:一段ナデ. 底面内面:一方面ナデ | 92008 |
| 2 | SX1607A 下層 | かわらけ 小瓶 | | | 口径9.2 残高5.3 残存1/2. 口縁部:クロナデ. 底面:凹面ナデ | 92009 |
| 3 | SX1608 混積土 | かわらけ 瓶 | | | 口径14.0 残高6.4 残存3/4. 口クロナデ | 94035 |
| 4 | SX1607A 下層 | 摩擦 磨 | | | (1段)15.3 残存高5.2. 肥厚:一部. 口縁部:玉締状. 内外面:黒漆塗り | 92241 |
| 5 | SX1608 混積土 | 石製品 磨石 | | | 残存高19.8 残存幅14.7 残存厚10.5 [砂岩] | 94062 |
| 6 | SX1608 混積土 | 石製品 磨石 | | | 残存高15.9 残存幅10.2 残存厚8.7 [砂岩] | 94061 |

図版29 SX1607・1608湿地跡出土遺物

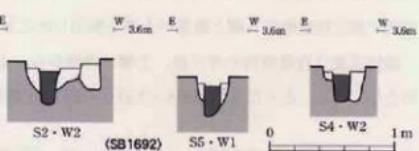
A. 堀立柱建物跡

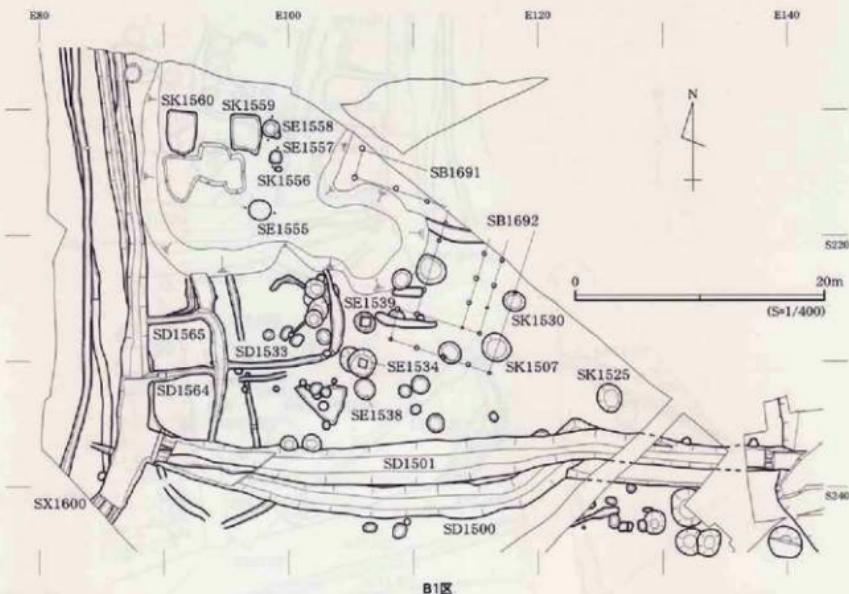
B 1 区で 2 棟、B 2 区で 32 棟、B 3 区で 5 棟、計 39 棟を確認した。このうち、B 2 区の建物跡は一定の場所に集中する傾向が認められ、1) 北部中央 (24 棟)、2) 南東部 (8 棟) の 2 群に分けられる。双方を比較すると、1 群は数が多いだけでなく 2 群と較べて規模が大きいものが目立ち、区画 G の中央に位置する。建物の方向は 2 棟 (S B 1052・1061) を除いて北で東に傾く。以下、主な建物跡についてのみ概要を記すこととし、すべての建物跡の属性は第 2 表にまとめた。

(a) B 1 区

【S B 1692建物跡】(図版36)

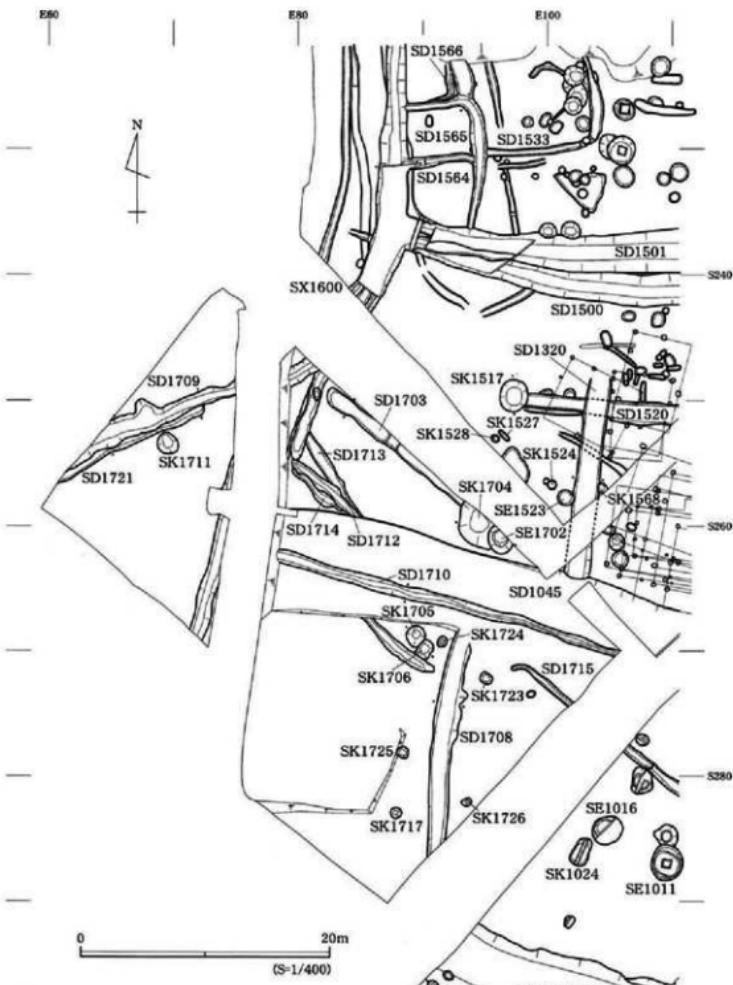
東側柱列で 4 間以上、南側柱列で 4 間の建物跡である。S K 1507・1530～1532・1547 土壙より古い。柱穴は 18 個検出しており、9 個で径 10cm の柱痕跡、2 個で柱抜取穴を確認した。建物の平面形は、南端の 1 間





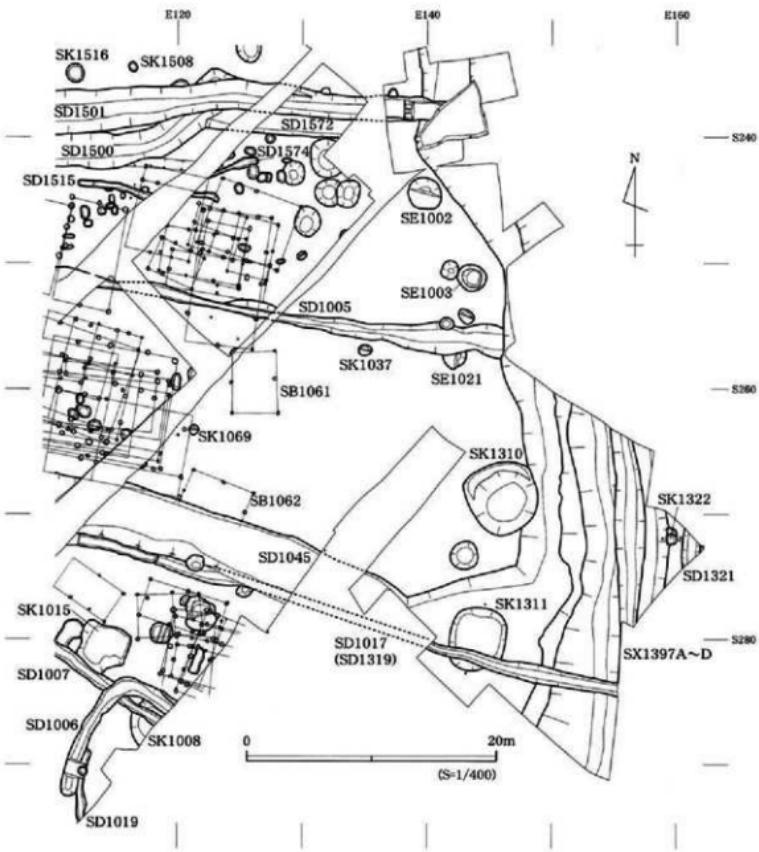
B1区写真（南東から）

図版30 B1区の検出遺構



図版31 B2区西側、B3区の検出遺構



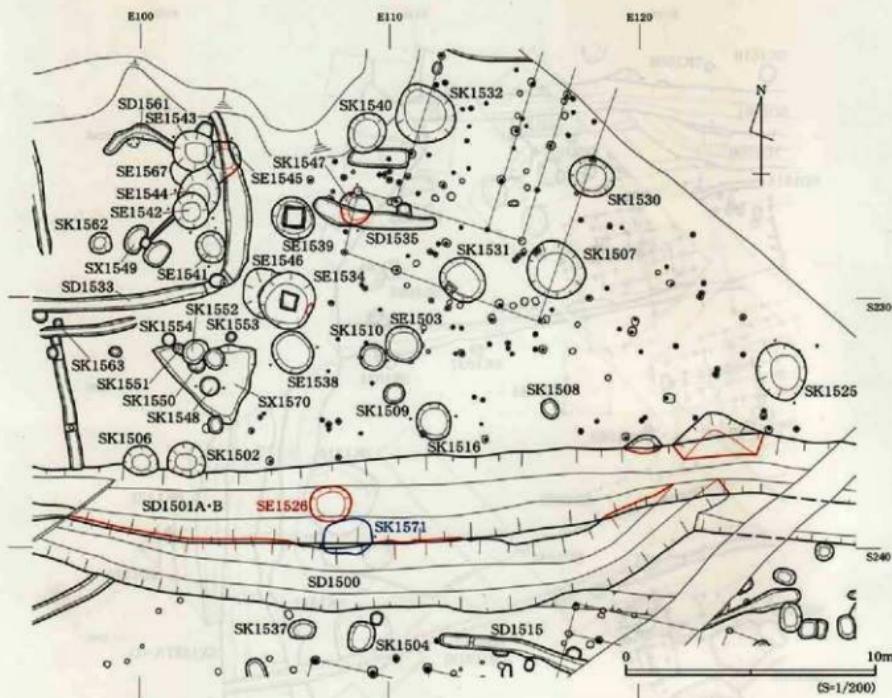


図版32 B2区東側の検出遺構

が西へ1.5m張出す矩形で上屋柱と下屋柱が認められ、東は縁が付くか土間にになるとみられる。平面規模は南側柱列が総長8.6m、柱間寸法は西から2.2m・2.2m・2.2m・2.0m、東入側柱列が総長8.9m以上、柱間寸法は南から2.6m・2.1m・2.0m・2.0mとみられる。方向は東入側柱列で測るとN-18°-Eである。柱穴は径20~40cmの円形もしくは梢円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色シルトである。

(b) B2区北部中央

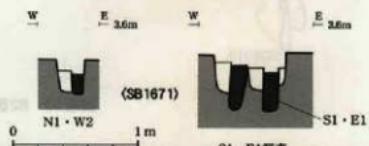
24棟確認した。建物の方向は、SB1061のみ北で西に傾き(N-4°-W)、他はN-9°~20°-Eである。柱穴は20~30cmの円形もしくは梢円形のものが多い。

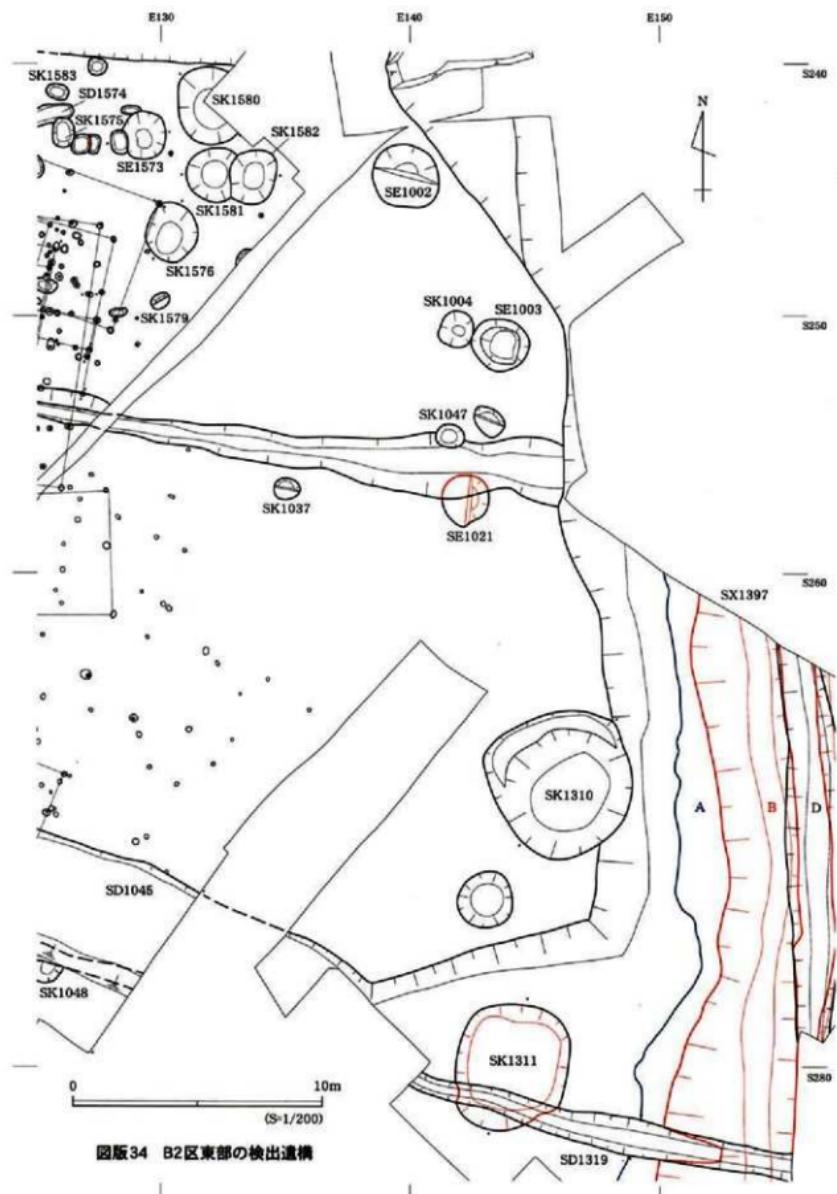


図版33 B1区南部の検出遺構

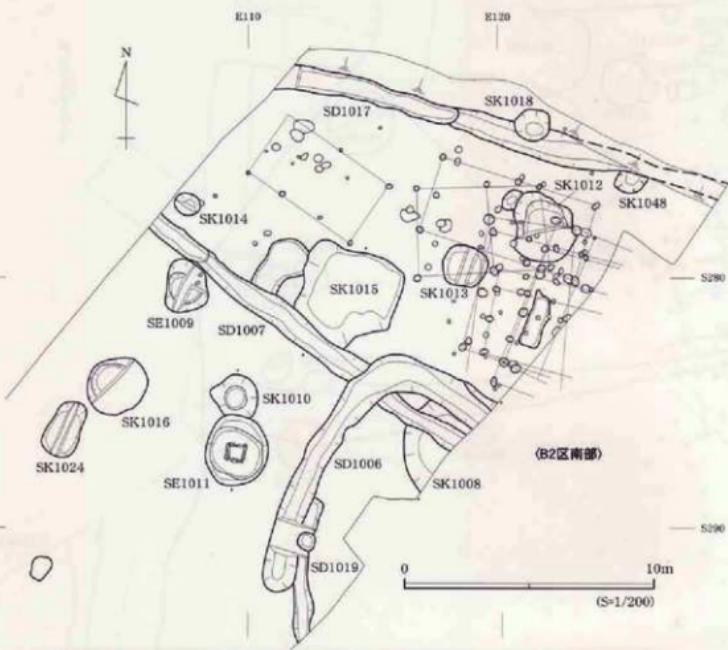
【S B 1671建物跡】(図版37)

東西は北側柱列で3間、南側柱列で2間、南北は西妻で2間、東妻で3間の東西棟建物跡である。SD1518溝跡より古い。柱穴は11個検出しており、9個で径10~15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長6.3m、柱間寸法は西から2.0m・1.7m・2.6m、梁行きは東妻で総長5.5m、柱間寸法は北から1.4m・1.6m・1.3m・1.2mとみられる。方向は東妻で測るとN-26°-Eである。柱穴は径30cmの梢円形が多く、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



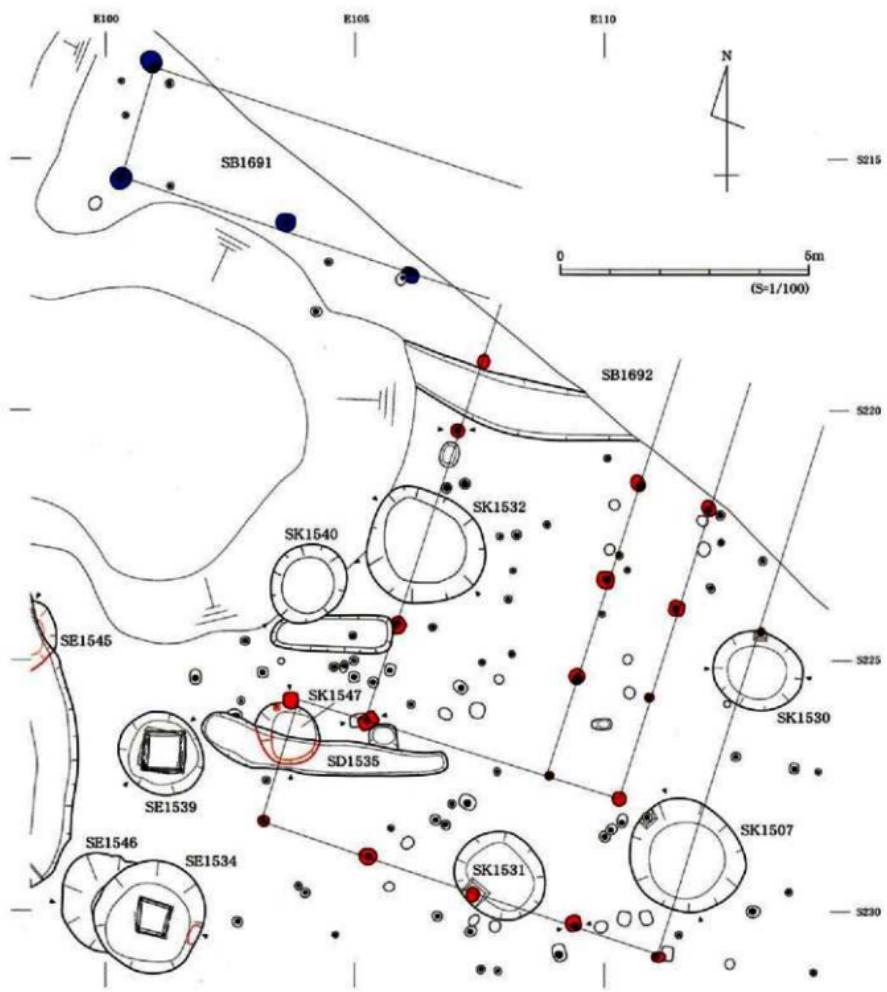


図版34 B2区東部の検出遺構

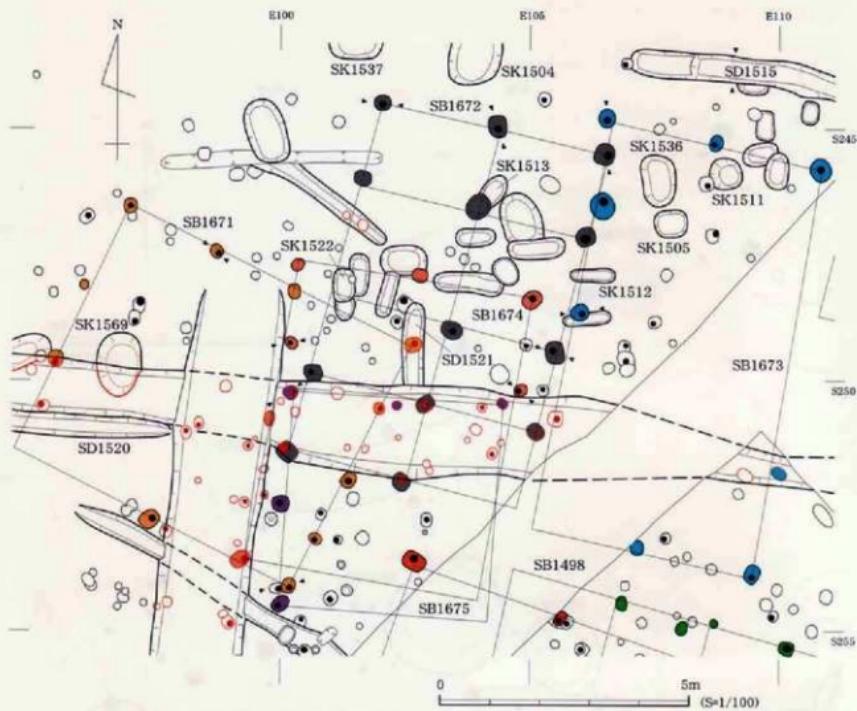


B2区南部（北東から）

図版35 B2区南部の検出遺構



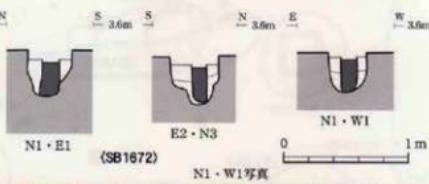
図版36 SB1691・1692建物跡



図版37 SB1671～1675建物跡

【SB 1672建物跡】(図版37)

東西2間、南北4間の南北棟総柱建物跡である。SD 1518溝跡より古い。柱穴は13個検出しており、11個で径15～20cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱列で長7.1m、柱間寸法は北から1.6m・3.9m(2間分)・1.6m、梁行きは北妻で総長4.6m、柱間寸法は西から2.3m等間とみられる。方向は西側柱列で測るとN-15°-Eである。柱穴は径30～50cmの梢円形で、深さは30～40cm、埋土は黒褐色シルトを含む地山ブロック主体土もしくは地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

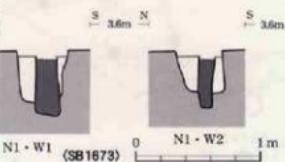


【S B 1673建物跡】(図版37)

東西2間、南北4間の南北棟建物跡である。SD 1518溝跡より古い。柱穴は9個検出しており、7個で径10~15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱列で総長8.2m、柱間寸法は北から1.6m・2.3m・2.1m・2.2m、梁行きは北妻で総長4.4m、柱間寸法は西から2.2m等間とみられる。方向は西側柱列で測るとN-9°-Eである。柱穴は径30cmの楕円形が多く、深さは20~40cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。西側柱列の北から3個目の柱穴で、柱痕跡底面から口縁部を上にしたロクロかわらけ小皿(図版42-3)が出土した。

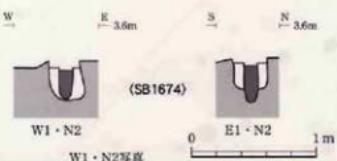


W1・N3写真



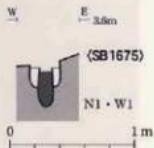
【S B 1674建物跡】(図版37)

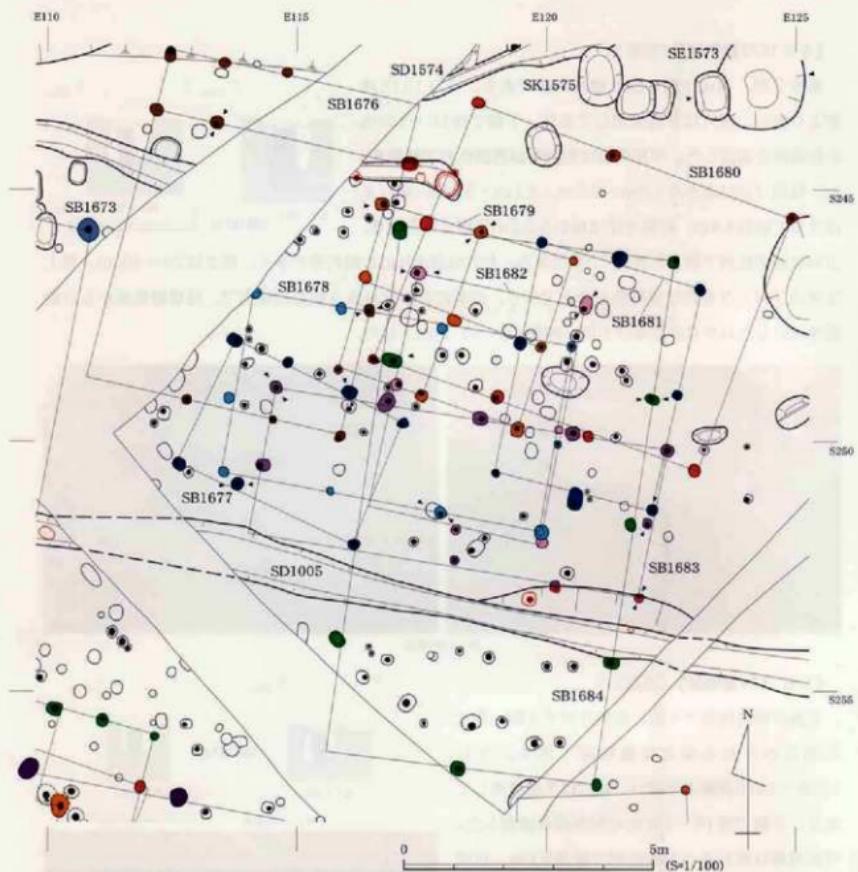
東西が西側柱列で4間、東側柱列で3間、南北2間とみられる南北棟建物跡である。SD 1320・1518溝跡より古い。柱穴は8個検出しており、5個で径10~15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱列で総長6.1m、柱間寸法は北から1.6m・1.5m・1.6m・1.4m、梁行きは北妻で総長4.7m、柱間寸法は西から2.4m・2.3mとみられる。方向は西側柱列で測るとN-16°-Eである。柱穴は径20~40cmの楕円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



【S B 1675建物跡】(図版37)

東西2間、南北2間の建物跡である。SD 1518溝跡より古い。柱穴は5個検出しており、3個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は東西、南北とも総長4.2m、柱間寸法は2.1m等間とみられる。方向は西側柱列で測るとN-4°-Eである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20cm、埋土は地





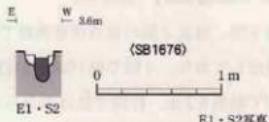
SB1676～1684（西から）

図版38 SB1676～1684建物跡

山プロックを含む黒褐色シルトである。

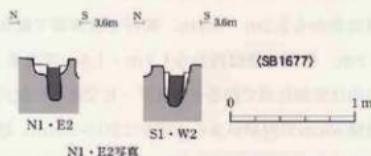
【SB 1676建物跡】(図版38)

東西は南側柱列で3間、北側柱列で4間、南北2間の南北棟で北に縁または庇が付く建物跡である。SD 1515溝跡より古い。柱穴は身舎で7個、縁または庇で3個検出しており、7個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが身舎東側柱列で総長5.5m、柱間寸法は北から3.0m・2.5m、梁行きは身舎南妻で総長5.1m、柱間寸法は西から2.0m・1.7m・1.4m、縁または庇の出は1.3mとみられる。方向は東妻で測るとN-15°-Eである。柱穴は径20cmの円形が多く、深さは10~20cm、埋土は地山プロックを含む黒褐色シルトである。



【SB 1677建物跡】(図版38)

東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。SB 1683建物跡より新しい。柱穴は7個検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長3.7m、柱間寸法は西から1.1m・1.3m・1.3m、梁行きは東妻で2.6mである。方向は北側柱列で測るとE-33°-Sである。柱穴は径20cmの円形が多く、深さは20~30cm、埋土は地山プロックを含む黒褐色シルトである。

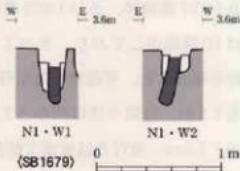


【SB 1678建物跡】(図版38)

東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。柱穴は10個検出しており、2個で径10cmの柱痕跡、1個で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長6.5m、柱間寸法は西から2.2m・2.2m・2.1m、梁行きは東妻で総長3.8m、柱間寸法は北から2.0m・1.8mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-11°-Sである。柱穴は径20cmの円形で、深さは20cm、埋土は地山プロックを多く含む黒褐色シルトである。

【SB 1679建物跡】(図版38)

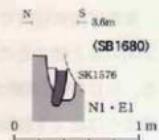
東西2間、南北2間の東西棟総柱建物跡である。柱穴は9個検出しており、6個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長3.9m、柱間寸法は西から1.9m・2.0m、梁行きは西



妻で総長3.4m、柱間寸法は北から1.5m・1.9mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-18°-Sである。柱穴は径20cmの円形で、深さは20cm、埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトである。

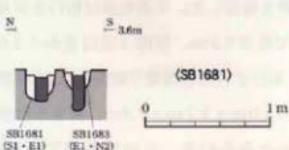
【SB 1680建物跡】(図版38)

東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。SK 1576土壤より古い。柱穴は8個検出しており、4個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長6.7m、柱間寸法は西から2.5m・2.0m・2.2m、梁行きは西妻で総長5.4m、柱間寸法は北から2.6m・2.8mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-19°-Sである。柱穴は径20cmの円形で、深さは30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



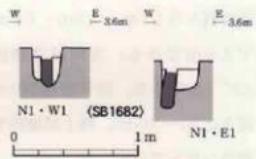
【SB 1681建物跡】(図版38)

東西2間、南北2間の南北棟建物跡である。SB 1684建物跡より新しい。柱穴は7個検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長4.6m、柱間寸法は北から2.2m・2.4m、梁行きは南妻で総長3.2m、柱間寸法は西から1.7m・1.5mである。方向は東側柱列で測るとN-13°-Eである。柱穴は径20cmの円形が多く、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。



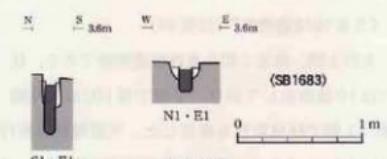
【SB 1682建物跡】(図版38)

東西2間、南北2間の南北棟建物跡である。柱穴は6個検出しており、4個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長4.8m、柱間寸法は2.4m等間、梁行きは南妻で総長3.4m、柱間寸法は1.7m等間とみられる。方向は東側柱列で測るとN-10°-Eである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



【SB 1683建物跡】(図版38)

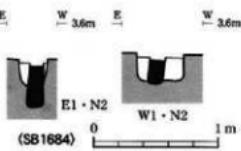
東西4間、南北2間の東西棟建物跡である。SB 1677建物跡、SD 1005溝跡より古い。柱穴は10個検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長7.9m、柱間寸法は西から2.3m・1.9m・1.8m・1.9m、梁行きは東妻で総長2.9m、柱間寸法は北から1.5m・1.4mである。方向は北側柱列で



測るとE-9°-Sである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20cm、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。

【SB 1684建物跡】(図版38)

東西2間、南北4間の南北棟建物跡である。SB 1681建物跡、SD 1005溝跡より古い。柱穴は10個検出しており、5個で径10~15cmの柱痕跡、1個で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長10.6m、柱間寸法は北から2.8m・2.5m・2.8m・2.5m、梁行きは北妻で総長5.5m、柱間寸法は西から2.8m・2.7mとみられる。方向は東側柱列で測るとN-9°-Eである。柱穴は径20cmの円形もしくは径40cmの楕円形で、深さは20cm、埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色シルトである。

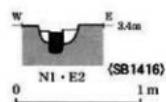


【SB 1415建物跡】(図版39)

東西6間、南北2間の東西棟で、北側柱列の西4間分に縁または庇が付き、内部は東妻から2間目に間仕切りをもつ建物跡である。柱穴は身舎で13個、縁または庇で4個検出しており、前者は7個で径15~20cm、後者は径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長14.0m、柱間寸法は西から3.0m・1.9m・2.5m・2.0m・4.6m(2間分)、梁行きは間仕切り部で総長5.6m、柱間寸法は2.8m等間、縁または庇の出は1.5mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-11°-Sである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは径40cmの楕円形で、深さは30cm、埋土は地山ブロックや炭化物を含む暗褐色や黒褐色シルトである。南側柱列の西から2番目の柱穴埋土から口縁部を上にしたロクロかわらけ小皿が出土した(図版42-2)。

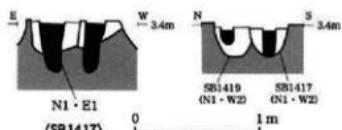
【SB 1416建物跡】(図版39)

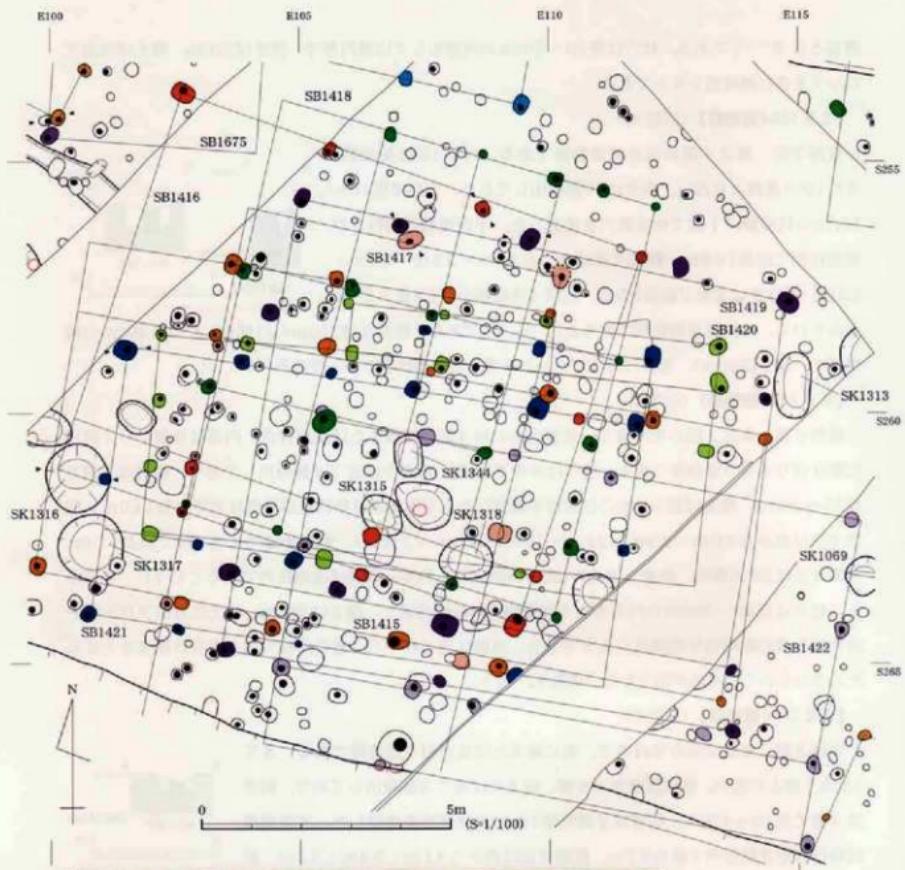
東西3間、南北2間の東西棟で、南に縁または庇が付く建物跡である。SK 1315土壤より古い。柱穴は身舎で8個、縁または庇で3個検出しており、前者は4個で径10~15cm、後者は2個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長9.7m、柱間寸法は西から3.1m・3.4m・3.2m、梁行きは東妻で総長6.7m、柱間寸法は北から3.4m・3.3m、縁または庇の出は0.9mとみられる。方向は北側柱列で測るとE-20°-Sである。柱穴は径20cmの円形もしくは径30~40cmの楕円形で、深さは身舎で30cm、縁または庇で10cm、埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。



【SB 1417建物跡】(図版39)

東西2間、南北4間以上の南北棟建物跡である。柱穴は8個検出しており、6個で径10~15cm、1個で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長9.5m以上、柱間寸法は北から2.7m・2.6m・2.6m、梁行きは北妻で総長6.2m、柱間寸法は西から3.2m・3.0mとみられる。方向は東側柱列で測るとN-14°-Eである。柱穴は径20cmの円形もしくは径30~50cmの楕円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。





SB1415～1422（南東から）

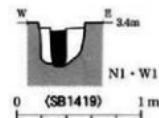
図版39 SB1415～1422建物跡

【S B 1418建物跡】(図版39)

東西3間、南北3間の南北棟で、東に2間の縁または庇が付く総柱建物跡である。S B 1422建物跡より新しい。柱穴は身舎で12個、縁または庇で6個検出しており、前者は7個で径10~15cm、後者は4個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが東入側柱列で総長8.4m、柱間寸法は北から3.2m・2.5m・2.7m、梁行きは南妻で総長5.5m、柱間寸法は西から1.8m・3.7m(2間分)、縁または庇の出は2.0m、柱間寸法は1.0m等間とみられる。方向は東入側柱列で測るとN-15°-Eである。柱穴は身舎が径30cmの円形もしくは梢円形が多く、深さは20~30cm、縁または庇は径20cmの円形で、深さは10cmである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【S B 1419建物跡】(図版39)

東西4間、南北3間の東西棟で、南に縁または庇が付く建物跡である。柱穴は身舎で12個、縁または庇で3個検出しており、前者は10個で径10~15cm、後者は2個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長10.0m、柱間寸法は西から2.0m・2.6m・3.0m・2.4m、梁行きは西妻で総長7.6m、柱間寸法は北から2.3m・2.4m・2.9m、縁または庇の出は1.3mとみられる。方向は西妻で測るとN-10°-Eである。柱穴は身舎が径20~30cmの円形もしくは梢円形が多く、深さは30~40cm、縁または庇は径20cmの円形で、深さは15cmである。埋土は地山ブロックや炭化物・焼土を含む暗褐色シルトである。

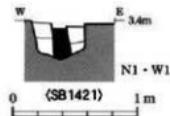


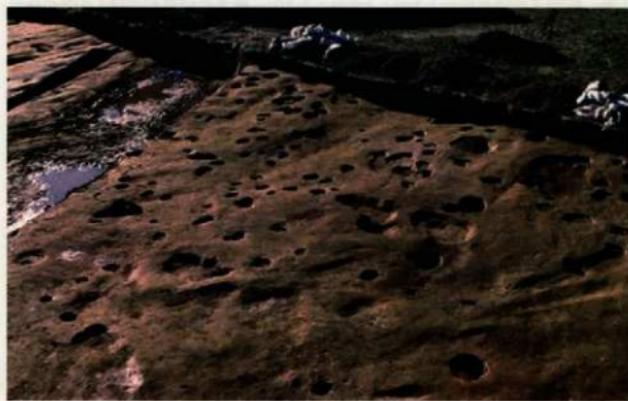
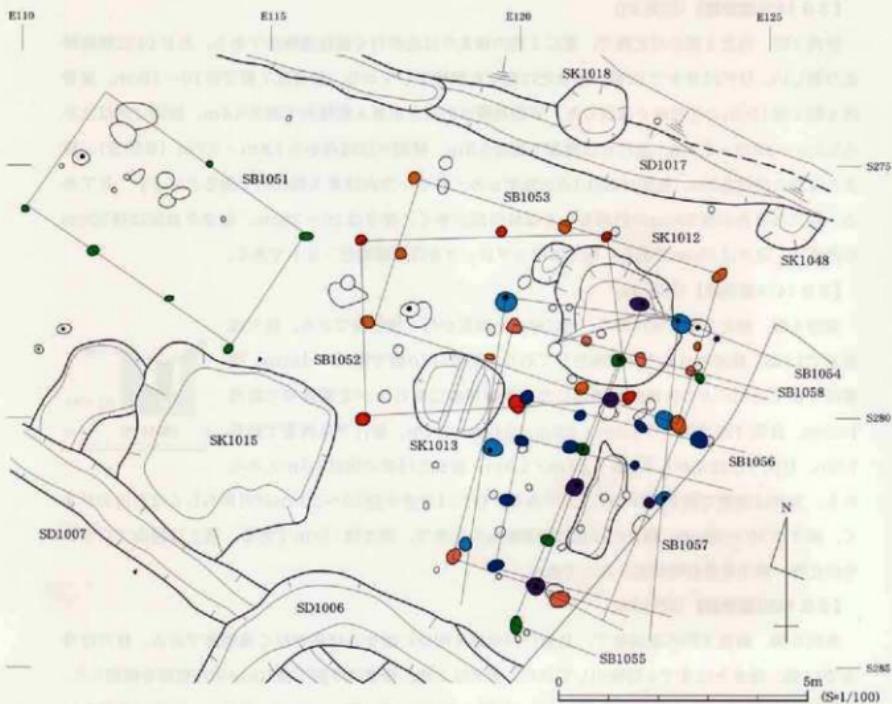
【S B 1420建物跡】(図版39)

東西6間、南北3間の東西棟で、北側柱列の東4間分に縁または庇が付く建物跡である。柱穴は身舎で11個、縁または庇で4個検出しており、前者は5個、後者は3個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長11.2m、柱間寸法は西から1.7m・2.1m・1.8m・5.6m(2間分)、梁行きは西妻で総長4.1m、柱間寸法は北から1.3m・1.4m・1.4m、縁または庇の出は1.3mとみられる。方向は西妻で測るとN-6°-Eである。柱穴は身舎が径20~30cmの円形もしくは梢円形が多く、深さは30~40cm、縁または庇は径20cmの円形で、深さは15cmである。埋土は地山ブロックや炭化物・焼土を含む暗褐色シルトである。

【S B 1421建物跡】(図版39)

東西5間、南北2間の東西棟で、北側柱列の東2間分に縁または庇が付く建物跡である。S K 1316・1317土壤より古い。柱穴は身舎で10個、縁または庇で3個検出しており、前者は6個で径15cm、後者は2個で径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長10.3m、柱間寸法は西から2.3m・1.8m・1.7m・4.5m(2間分)、梁行きは西妻で総長5.4m、柱間寸法は2.7m等間、縁または庇の出は1.2mとみられる。方向は北側柱列で測るとE-9°-Sである。柱穴は身舎が径30cmの円形もしくは梢円形が多く、深さは30cm、縁または庇は径20cmの円形で、深さは20cmである。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトである。





図版40 SB1051～1058建物跡

【S B 1422建物跡】(図版39)

東西5間、南北2間の東西棟で、南に縁または庇が付く建物跡とみられる。S B 1418建物跡、SK 1314土壤より古い。柱穴は身舎で11個、縁または庇で2個検出しており、前者は6個、後者は1個で径10~15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南入側柱列で総長10.8m、柱間寸法は西から3.9m(2間分)・4.6m(2間分)・2.3m、梁行きは西妻で総長4.9m、柱間寸法は北から2.3m・2.6m、縁または庇の出は1.6mとみられる。方向は南入側柱列で測るとE-10°-Sである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは梢円形、深さは身舎が30cm、縁または庇は20cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

(c) B 2区南東部

8棟確認した。建物の方向はS B 1052を除いて北で東に傾く(N-8°~34°-E)。このうち、東寄りの5棟(S B 1054~1058)は、N-8°~20°-Eの間に位置する。柱穴は20~30cmの円形もしくは梢円形が多い。

【S B 1051建物跡】(図版40)

東西は南側柱列で3間、北側柱列で2間、南北1間の東西棟建物跡である。柱穴は6個検出している。平面規模は桁行きが南側柱列で総長4.9m、柱間寸法は西から1.6m・1.8m・1.5m、梁行きは東妻で2.8mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-34°-Sである。柱穴は径10~20cmの円形もしくは梢円形である。

【S B 1052建物跡】(図版40)

東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。柱穴は6個検出している。平面規模は桁行きが南側柱列で総長5.3m、柱間寸法は西から3.1m・2.4m、梁行きは西妻で3.5m、東妻で3.2mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-5°-Nである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは梢円形である。

【S B 1053建物跡】(図版40)

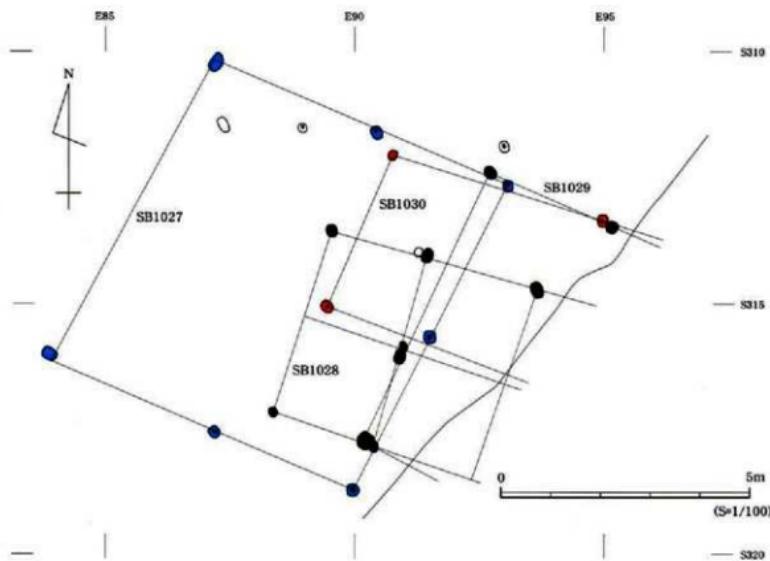
東西は南側柱列で3間、北側柱列で2間、南北2間の東西棟建物跡である。柱穴は9個検出している。平面規模は桁行きが南側柱列で総長6.4m、柱間寸法は西から2.5m・1.8m・2.1m、梁行きは西妻で総長3.0m、柱間寸法は1.5m等間とみられる。方向は南側柱列で測るとE-17°-Sである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは梢円形である。

【S B 1054建物跡】(図版40)

東西2間以上、南北3間の南北棟建物跡とみられる。SK 1012土壤より新しい。柱穴は5個検出しており、3個で径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行きが西側柱列で総長6.0m、柱間寸法は北から2.0m・1.8m・2.2m、梁行きは北妻で総長2.6m以上、柱間寸法は1.6mとみられる。方向は西側柱列で測るとN-20°-Eである。柱穴は径30cmほどの円形が多い。

【S B 1057建物跡】(図版40)

東西1間、南北3間以上の南北棟建物跡である。SK 1012土壤より新しい。柱穴は6個検出しており、4個で径15cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行きが西側柱列で総長4.9m以上、柱間寸



図版41 SB1027～1030建物跡

法は北から3.0m（2間分）・1.9m、梁行きは北妻で3.5mとみられる。方向は西側柱列で測るとN-8°-Eである。柱穴は径40cmほどの円形が多い。

(d) B 3 区

建物跡を4棟、柱列跡を1条確認した。建物の方向は、N-17°～27°-Eである。柱穴は20～30cmの円形もしくは梢円形のものが多い。

【S A 1026柱列跡】(図版31)

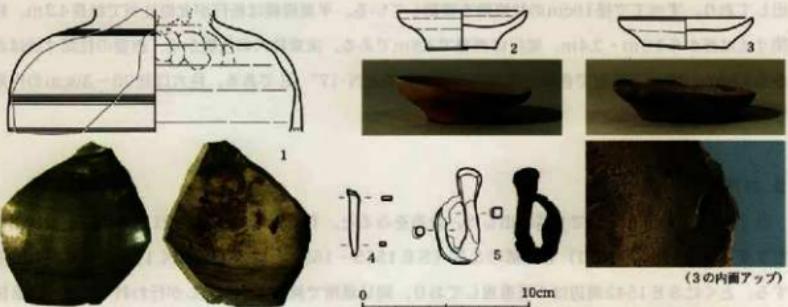
東西1間以上、南北1間以上の柱列跡である。柱穴は3箇所で検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。柱間寸法は南北が2.7m、東西が4.5mである。方向は南側柱列で測るとE-18°-Sである。身舎の柱穴は一辺20～30cmの隅丸方形もしくは梢円形である。北東柱穴の柱抜取穴から古瀬戸前Ⅲ～Ⅳ期の瓶子I類が出土している(図版42-1)。

【S B 1027建物跡】(図版41)

東西2間、南北2間の南北棟建物跡である。柱穴は7箇所で検出しており、うち3箇所で径10cmの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長6.8m、柱間寸法は3.4m等間、梁行は北妻で総長6.4m、柱間寸法は西から3.5m・2.9mとみられる。方向は東側柱列で測るとN-27°-Eである。柱穴は径20～40cmの円形もしくは梢円形である。

【S B 1028建物跡】(図版41)

東西2間、南北2間の南北棟建物跡とみられる。S B 1029建物跡より古い。柱穴は6箇所で検



| No. | 出土標識・層位 | 種別 | 測量 | 产地 | 特 | 考 | 登録No. |
|-----|----------------|------|----|----|---|-------------|-------|
| 1 | SA10260E1-N1 | 施釉器皿 | 瓶子 | 窓戸 | 胴径18.0 頭径7.1 古窓戸瓶子1号【古窓戸窓戸~W面】 | | 94066 |
| 2 | SB1025B2-S1-W2 | かわらけ | 小瓶 | | 口径7.8 底径4.2 高さ6.0 前3/5 ロクロナヂ 脊部: 刻印有り 瓶が柱状高台状 | 20-30 窓戸窓戸門 | 01107 |
| 3 | SB1672W1-N2 | かわらけ | 小瓶 | | 口径8.2 底径6.0 高さ6.9 瓶存底付完品 ロクロナヂ 瓶部: 刻印有り 内面に擦痕 | 20-30 窓戸窓戸門 | 02090 |
| 4 | 01* PH353 | 執物品 | 瓶 | | 残存高3.9 幅6.0 厚0.2 | | 01384 |
| 5 | SB1691G1-W1 | 執物品 | 平瓶 | | 残存高5.7 幅2.5 厚0.4-0.5 | | 02290 |

図版42 B区建物跡出土遺物

| 番 | 標記 | 位置 | 間数 | 様向 | 平面規格 (m) | | 方向 | 柱穴 直径(cm) 座標(cm) 平面図 | 備考 | 登録No. | | |
|-------------|-------------|----|-------------------------------|----------------------------|------------------------|----------------|---------------------|-------------------------------|---------------------------|-------|----|--|
| | | | | | 横行範囲・斜行寸法・測定条件 | 縦行範囲・斜行寸法・測定条件 | | | | | | |
| SA1025B2-S1 | SB1025B2-S1 | 南北 | 4.5 | 東西 | 2.7 | 南北 | E15° S 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 31 | | | |
| SB1027B2-S2 | 2×2 | 南北 | 6.8 | 3.4-3.4 | 東 (0.4) 3.5-2.9 | 北 N27° E 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 41 | | | | |
| SB1028B2-S2 | 2×2(裏) | 東西 | 4.3 | 1.9-2.4 | 北 (3.8) 1.8-2.0 | 西 N17° E 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 41 | | | | |
| SB1029B2-S2 | 2段上×2 | 7 | 5.9 | 4.1(2間)-1.9 | 西 38E 2.6 | 北 N24° E 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 41 | | | | |
| SB1030B2-S1 | 1段上×1 | 東西 | 54.0 | (4.4) | 東 (2.8) | 西 E15° S 10 | 20 窓戸門 | 41 | | | | |
| SB1051B2-S2 | 3×1 | 東西 | 44.9 | (1.6-1.8-1.6) | 南 (2.8) | 東 E34° S 10 | 10-20 窓戸窓戸 北側柱跡は2間 | 40 | | | | |
| SB1052B2-S2 | 2×1 | 東西 | (5.3) | (3.1-2.4) | 南 3.6 | 西 E5° N | 20-30 窓戸窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1053B2-S2 | 3×2(裏) | 東西 | (5.3) | 3.1-3.4 | 南 3.6 | 西 E17° S 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1054B2-S2 | 3×2(裏) | 南北 | 6.0 | (2.0-1.8)-2.2 | 西 28E 1.8 | 北 N29° E 10 | 20 窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1055B2-S2 | 3×1上 | 南北 | (5.7) | (1.9-1.8-1.9) | 西 28E 1.8 | 北 N18° E 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1056B2-S2 | 3段上×3 | 南北 | 28E 1.8 | (1.9-1.2-1.3) | 北 (3.8) (0.9-1.2-1.4) | 西 N8° E | 20-30 窓戸窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1057B2-S2 | 3段上×1 | 南北 | 48E 1.8 | (3.0-2.6-1.9) | 西 3.5 | 北 N8° E 15 | 40 窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1058B2-S2 | 3段上×2 | 南北 | (4.9) | (2.0-2.0) | 西 38E 1.8 | 北 N12° E 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 40 | | | | |
| SB1061B2-S2 | 2×2 | 南北 | (4.9) | (2.2-2.2-2.7) | 東 (3.6) | 南 N4° W | 20-30 窓戸窓戸門 | 32 | | | | |
| SB1062B2-S2 | 2×2 | 南北 | (5.1) | (2.6-2.5) | 東 24E 1.6 | 東 E21° S 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | 32 | | | | |
| SB1415B2-S2 | 6×2+1 | 東西 | (14.0) (10-19-28-38-40) (4.0) | 南北 | 5.6 (2.8-2.8) | 西 11° S | 15-20(2年) 20-30 窓戸門 | 東から2間目に開口切り 北4間に縫合跡(幅1.5m) | 39 | | | |
| SB1416B2-S2 | 3+1×2 | 東西 | (9.7) | 3.1-3.4-(3.2) | 北 (6.7) (3.4-3.3) | 東 E29° S | 15-20(2年) 10(6ヶ月) | 40 窓戸門 | 39 | | | |
| SB1417B2-S2 | 4段上×2 | 南北 | 9.0 | 2.7-(2.6-2.6) | 東 (6.2) (3.2-3.0) | 北 N14° E | 10-15 (6ヶ月) | 10(6ヶ月) | 39 | | | |
| SB1418B2-S2 | 1+2+3(裏) | 南北 | 8.4 | (3.2-2.5-2.7) | 東入 5.5 (1.8-3.7-2間) | 南 N15° E | 10(6ヶ月) | 20-30 窓戸窓戸門 東間に2段の縫合部(幅1.0m) | 39 | | | |
| SB1419B2-S2 | 4+1×2 | 東西 | 10.0 | 2.0-2.6 (3.0-2.4) | 北 7.6 | 2.3-2.4-2.9 | 西 N10° E | 10(6ヶ月) | 20-30 窓戸窓戸門 南側に縫合部(幅1.3m) | 39 | | |
| SB1420B2-S2 | 6+1×3 | 東西 | 11.2 | 1.7-2.1-1.8(6.0) (4.0) | 北 (4.1) 1.3-1.4-1.4 | 西 N8° E | 10 | 20-30 窓戸窓戸門 北4間に縫合部(幅1.3m) | 39 | | | |
| SB1421B2-S2 | 5+1×2 | 東西 | 10.3 | 2.3-1.7-1.7(4.0) (2.0) | 北 5.4 (2.7-2.7) | 西 E9° S | 15(2年) 10(6ヶ月) | 20-30 窓戸窓戸門 北2間に縫合部(幅1.2m) | 39 | | | |
| SB1422B2-S2 | 5+1×2 | 東西 | 10.8 | 2.9-2.6-2.6(4.0-4.0) (2.0) | 南 入 (4.9) (2.0-2.6) | 西 E10° S | 10-15 | 20-30 窓戸窓戸門 南間に縫合部 | 39 | | | |
| SB1423B2-S2 | 3×3 | 東西 | 6.3 | 2.0-(1.7-1.6) | 北 5.5 14-16-13-12 | 東 N25° E | 10-15 | 39 窓戸門 | 南側柱跡と西壁は2間 | 37 | | |
| SB1427B2-S2 | 4×2(裏) | 南北 | 7.1 | (1.6-2.0-2.0-1.6) | 西 4.6 | 2.3-2.3 | 北 N15° E | 15-20 | 39-59 窓戸門 | | 37 | |
| SB1473B2-S2 | 4×2 | 南北 | (8.2) | 1.6-2.0-2.1-2.1 | 西 4.4 | 2.2-2.2 | 北 N8° E | 10 | 37 窓戸門 | | 37 | |
| SB1474B2-S2 | 4×2 | 南北 | 6.1 | (1.6-1.5-1.6-1.4) | 西 (4.7) (2.4-2.3) | 北 N16° E | 10-15 | 20-40 窓戸窓戸 東側柱跡は3間 | | 37 | | |
| SB1475B2-S2 | 2×2 | 東西 | 4.2 | 2.1-2.1 | 西 (4.0) (2.1-2.1) | 東 N4° E | 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | | 37 | | |
| SB1476B2-S2 | 3+1×2 | 南北 | 5.5 | 3.0-2.5 | 東 (5.1) (2.0)-1.7-1.4 | 西 N15° E | 10 | 20 窓戸門 | 北に縫合部(幅1.3m) | 38 | | |
| SB1477B2-S2 | 3×1 | 東西 | 3.7 | 1.1-1.3-1.3 | 北 2.6 | 東 E33° S | 10 | 20 窓戸門 | | 38 | | |
| SB1478B2-S2 | 3×2 | 東西 | (6.5) | (2.2-2.2-2.1) | 南 (3.8) 2.0-1.8 | 東 E11° S | 10 | 20 窓戸門 | | 38 | | |
| SB1479B2-S2 | 2×2(裏) | 南北 | 3.9 | 1.9-2.0 | 南 3.4 (1.5-1.5) | 西 E18° S | 10 | 20 窓戸門 | | 38 | | |
| SB1480B2-S2 | 3×2 | 南北 | (6.7) | 2.5-(2.0-2.2) | 南 (5.0) (2.6-2.8) | 西 E19° S | 10 | 20 窓戸門 | | 38 | | |
| SB1481B2-S2 | 2×2 | 南北 | 4.6 | 2.2-2.4 | 東 3.2 1.7-1.5 | 南 N13° E | 10 | 20 窓戸門 | | 38 | | |
| SB1482B2-S2 | 2×2 | 南北 | (4.9) | 2.4-2.4 | 南 N10° E | 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | | 38 | | | |
| SB1483B2-S2 | 4×2 | 東西 | 7.9 | 2.3-1.9-1.8-1.9 | 北 2.9 1.5-1.4 | 東 E9° S | 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | | 38 | | |
| SB1484B2-S2 | 4×2 | 南北 | (3.6) | 2.8-(2.5-2.8-2.0) | 南 (5.0) (2.8-2.7) | 西 E18° S | 10 | 20-30 窓戸窓戸門 | | 38 | | |
| SB1485B2-S2 | 2段上×1 | 東西 | 8.9 | 2.0-2.0-2.1-2.1 | 東入 5.6 2.2-2.2-2.2-2.0 | 南 N18° E | 10 | 20-40 窓戸窓戸門 窓戸、遺物以降 | | 36 | | |
| SB1486B2-S2 | 4段上×1 | 南北 | 8.9 | 2.0-2.0-2.1-2.1 | 東入 5.6 2.2-2.2-2.2-2.0 | 南 N18° E | 10 | 20-40 窓戸窓戸門 窓戸、遺物以降 | | 36 | | |

※ 開口の幅は、(5+1)×2は、身寄が5間、2間で進行行き1間の最ももつて広がる部分を示す。

※ 柱寸法は、東西方向の柱寸は西から、南北方向の柱寸は東から順に示す。

※ 社間寸法の(2間)もしくは=2間は、2間分の寸法であることを示す。

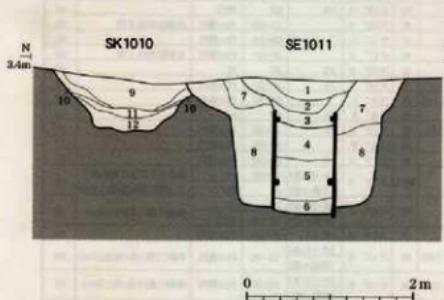
第2表 B区建物跡属性表

出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.3m、柱間寸法は西から1.9m・2.4m、梁行は西妻で3.8mである。床束柱穴の位置から、西妻の柱間寸法は北から1.8m・2.0mと推定できる。方向は西妻で測るとN-17°-Eである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは梢円形である。

B. 井戸跡

B 1 区で16基、B 2 区で9基検出した。分布をみると、B 1 区ではSD 1501区画溝跡下で検出した2基(SE 1526・1571)と北部の3基(SE 1555・1557・1558)を除く11基が中央部に集中する。とくにSE 1542周辺は5基重複しており、同じ場所で何度も掘り返しが行われていた。B 2 区は西側で2基(SE 1523・1702)、北東隅付近で4基(SE 1002・1003・1021・1573)、建物群南側の広場的空間で3基(SE 1009・1011・1016)認められ、中央部北よりの建物群を避けるよう分布する。

このうち枠を有するのはB 1 区の2基(SE 1534・1539)、B 2 区の1基(SE 1011)のみで、他は素掘りである。以下、井戸跡の概要を述べるが、井戸側を有するものは個別に取上げ、素掘りは一括して記述することとし、個別データは、第3表にまとめた。



| No. | 土色・土性 | 盛入物など | 備考 |
|-----|-----------------|-------------|---------------|
| 1 | 暗褐色(10YR3/3)シルト | 炭化物を含む | |
| 2 | 暗褐色(10YR3/3)シルト | | SE1011側板取穴 |
| 3 | 有機質(10G2/1シルト) | 炭化物を含む | |
| 4 | 青褐色(5B2/2)粘土 | 砂をミナナに含む | |
| 5 | 青褐色(5B2/2)粘土 | 砂ブロックを含む | SE1011側板時の堆積土 |
| 6 | 暗褐色(10G4/1)粘土 | 粘土ブロックを含む | |
| 7 | 暗褐色(10Y2/2)粘土 | | |
| 8 | 暗褐色(10Y2/2)粘土 | | SE1011側方堆土 |
| 9 | 暗褐色(10Y3/1)粘土 | 炭化物・粘土灰との互層 | |
| 10 | 暗褐色(10Y4/1)粘土 | | |
| 11 | 暗褐色(10Y4/1)粘土 | 炭化物を多く含む | SK1010堆積土 |
| 12 | 褐色(10Y4/1)粘土 | | |

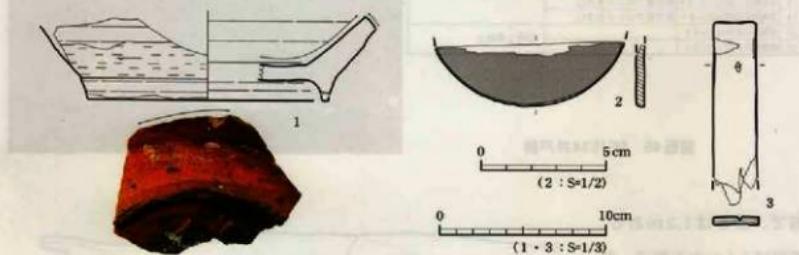
図版43 SE1011井戸跡

(a) 井戸側を有するもの

【SE 1011井戸跡】(図版35・43)

B2区南部で確認した木組みの枠をもつ井戸跡である。SK1010土壤より新しい。掘方の平面形は $2.8 \times 2.5\text{m}$ の楕円形で、深さは 1.6m ある。底面は径 1.8m ほどの不整な円形である。断面形は下部が円筒形で、上部は北壁と南壁に段があり、井戸構築時の足場と考えられる。枠は上部が抜かれており、下部が残る。内法は 55cm ほどで、4辺に縦板を立て、内側は横棟を渡して保持している。横棟は2段確認でき、角材を目違いひぞで組んでいる。また、枠の外側は板材を縦板に密着させるように敷き詰めながら埋め戻している。

堆積土は8層に分けられる。4~6層は機能時の堆積土、1~3層は枠抜取穴の人为堆積土、7~8層が掘方埋土である。遺物は抜取穴や掘方埋土から出土している(図版44)。1~3層から手づくねかわらけ皿、常滑産片口鉢(1)、馬歯などが、7~8層からロクロカわらけ皿、常滑産甕、曲物底板(2)、板状木製品(3)などが出土した。1は破片を砥石に転用されている。



| No | 出土層位 | 種別 | 器種 | 产地 | 特徴 | 番号 |
|----|------|-----|------|----|------------------------|-------|
| 1 | 1~3層 | 陶器 | 片口鉢 | 東海 | 高台型(14.5) 砥石を砥石に転用 | 94011 |
| 2 | 7~8層 | 木製品 | 曲物底板 | | 径6.4 打孔なし 両面: 漆塗装り 鋼? | 94024 |
| 3 | 7~8層 | 木製品 | 不明 | | 残存長(11.0) 幅2.6 厚0.5 打穴 | 94070 |

図版44 SE1011井戸跡出土遺物

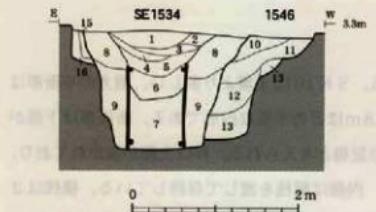
【SE 1534井戸跡】(図版33・45)

B1区中央部で確認した葦を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。SE1546井戸跡より新しい。掘方の平面形は $2.2 \times 2.0\text{m}$ の円形で、深さは 1.4m ある。底面は $1.3 \times 1.1\text{m}$ の方形で、断面形は開きの小さい逆台形である。枠の内法は 65cm ほどで、葦を縦方向に簾状にして、内側は横棟を渡して保持している。横棟は2段確認でき、径 $5 \sim 6\text{cm}$ の芯持材を使用しており、目違いひぞで組んでいる(図版46)。なお、横棟は樹種同定の結果、カエデ属やエゴノキ属であることがわかった。

堆積土は9層に分けられる。6~7層は機能時の堆積土、1~5層は廃絶後の堆積土、8~9層は掘方埋土である。遺物は6~7層からロクロカわらけ皿や盤根式の鉄錆(図版53-4)、1~5層からロクロカわらけ、8~9層からロクロカわらけ皿、常滑産甕などが少量出土している。

【SE 1539井戸跡】(図版33・47)

B1区中央部で確認した葦を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。掘方の平面形は $1.7 \times 1.6\text{m}$ の円



| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|--------------------|--------------------|------------|
| 1 | 褐色(15YR2/2シルト) | | |
| 2 | 褐色(15YR3/2シルト) | 第V層小ブロックを含む | |
| 3 | 褐色(10YR3/1シルト) | | |
| 4 | 黒褐色(10YR3/1シルト) | | |
| 5 | オリーブ褐色(10YR3/2シルト) | 第V層ブロックを含む | |
| 6 | オリーブ褐色(10YR3/2シルト) | 第VI層と砂を含む | |
| 7 | オリーブ褐色(10YR3/2シルト) | | |
| 8 | 黒褐色(10YR3/2シルト) | 第VI・ VII層ブロックを多く含む | SE1534箇方理土 |
| 9 | オリーブ褐色(10YR3/2シルト) | 第VI層ブロックを含む | |
| 10 | オリーブ褐色(10YR3/2シルト) | 第VI層ブロックを含む | |
| 11 | 黒褐色(10YR3/2シルト) | 第V層と黒褐色ブロックを多く含む | |
| 12 | 黒褐色(10YR3/2シルト) | | SE1546堆積土 |
| 13 | 黒褐色(10YR3/2シルト) | 第VI層ブロックを含む | |
| 14 | 黒褐色(10YR3/2シルト) | 第VI層ブロックを含む | |
| 15 | 黒褐色(10YR3/2シルト) | | |
| 16 | 褐色(15YR3/2シルト) | | PB理土地盤土 |

図版45 SE1534井戸跡



井戸側検出状況（北から）

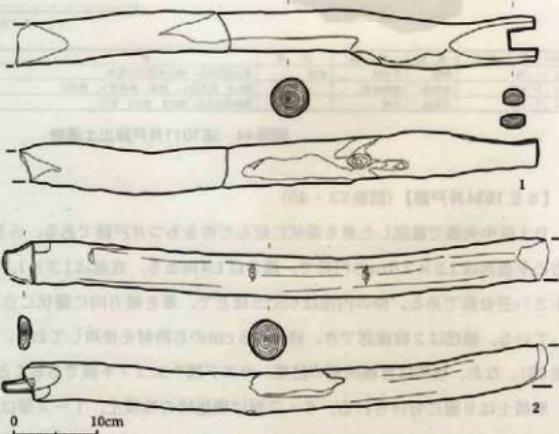


側の茎材アップ

形で、深さは1.2mある。

底面は1.1mの方形で、断面形は円筒形である。枠の内法は90cmほどで、革を縦方向に簾状に立て、内側は横桟を渡して保持している。横桟は2段確認でき、径5cmほどの芯持材や径8cmほどの丸材を1/2や1/3に分割した割材を使用しており、目違いほどで組んでいる（図版48）。なお、横桟は樹種同定の結果、クリであることがわかった。

堆積土は12層に分けられる。9・10層は機能時の堆積土、1～8層は廃絶後の堆積土、11・12層は掘方埋土である。遺物は1～8層よりかわらけが少量出土している。

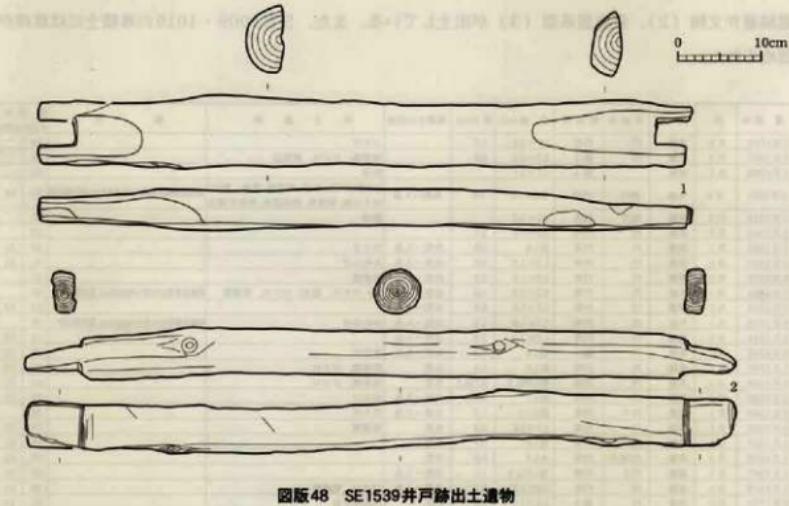


図版46 SE1534井戸跡出土遺物



| No. | 土色・土性 | 混入物など | 備考 | No. | 土色・土性 | 混入物など | 備考 |
|-----|-------------------|------------|-------|-----|-----------------|--------------|-------|
| 1 | 褐色(7.5YR4/6)シルト | 第四紀ブロックを含む | | 7 | オリーブ褐色5Y2/2シルト | | |
| 2 | 褐色褐色(7.5YR2/3)シルト | | 柱内堆積土 | 8 | 暗灰褐色2.5Y3/2シルト | 全体に砂を含む | 柱内堆積土 |
| 3 | 褐色褐色(7.5YR2/3)シルト | | | 9 | 黒褐色(2.5Y3/3)シルト | | |
| 4 | 黒褐色(7.5YR2/3)シルト | 第四紀ブロックを含む | | 10 | オリーブ褐色5Y2/2シルト | | |
| 5 | オリーブ褐色5Y3/3シルト | | | 11 | 暗オリーブ褐色5Y3/3シルト | 第四紀ブロックが多く含む | 園方埋土 |
| 6 | オリーブ褐色5Y3/3シルト | | | 12 | 暗オリーブ褐色5Y3/3シルト | | |

図版47 SE1539井戸跡



図版48 SE1539井戸跡出土遺物

(b) 素振りのもの (図版50~52)

B 1 区で14基 (SE 1503・1526・1538・1541~1546・1555・1557・1558・1567・1573)、B 2 区で7基 (SE 1002・1003・1009・1016・1021・1523・1702) 検出した。平面形は梢円形の1基 (SE 1009) を除くと、他は円形もしくは円形基調と考えられる。断面形は、円筒形が18基と主体を占め、他に漏斗形が認められる。規模は、径が1.0~2.7m、深さは0.7~1.4mあるが、14基は径1.3~2.0m、深さ0.7~1.4mの範囲に入る。堆積土は下部に壁の崩落土を含む機能時の自然堆積層、上部には廃絶後埋め戻された人為堆積土や廃絶後放置されたことを示す自然堆積土が認められ

る。なかには最上層に第Ⅱ層が認められるものもある。

堆積土からかわらけや常滑産甕・片口鉢が出土する井戸もあるが、小片のため図示できない。図示可能なものとしては、3点あげられる（図版53）。SE 1003からロクロかわらけ皿（1）、SE 1702から龍泉窯系青



図版49 SE1542付近の井戸跡重複状況

磁鐵蓮弁文椀（2）、須恵器系盃（3）が出土している。また、SE 1009・1016の堆積土には鉄滓が認められた。

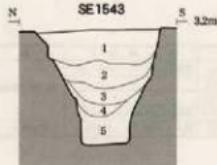
| 遺構名 | 区 | 構造 | 平面形 | 断面形 | 規 模 (m) | 深さ(m) | 堆積土の状況 | 出 土 遺 物 | 備 考 | 図 番 号 |
|--------|-----|----|-------|-----|---------|-------|-------------|----------------------|---------------------|--------|
| SE1002 | B.2 | 直筒 | 円 | 円筒 | 2.7×2.5 | 1.0 | ロクロ | | | 34 |
| SE1003 | B.2 | 直筒 | 円 | 圓筒 | 2.3×2.1 | 0.9 | 常滑甕、ロクロ、熟成品 | | | 34 |
| SE1009 | B.2 | 直筒 | 円 | 圓筒 | 2.1×1.7 | | 軽浮 | | | 35 |
| SE1011 | B.2 | 木組 | 横円 | 円筒 | 2.8×2.5 | 1.6 | 自然→人為 | 1~2層手づくね皿、常滑甕、萬古甕、羅方 | 掘削直隣柱止めの内径55cm、裏石見出 | 35, 44 |
| SE1016 | B.2 | 直筒 | 横円 | 円筒 | 2.5×2.2 | | 軽浮 | | | 35 |
| SE1021 | B.2 | 直筒 | 円 | 円筒 | 2.0×1.9 | 1.1 | | | | 34 |
| SE1053 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.4×1.4 | 0.8 | 自然→人為 | ロクロ | | 33, 51 |
| SE1053 | B.2 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.3×1.2 | 0.8 | 自然→人為 | ロクロ | | 31, 51 |
| SE1056 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.6×1.5 | 0.8 | 自然 | 常滑甕 | | 33 |
| SE1054 | B.1 | 木組 | 円 | 円筒 | 2.2×2.0 | 1.4 | 自然 | 地) ロクロ、羅方 | 掘削直隣柱止めの内径55cm、裏石見出 | 36 |
| SE1058 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.7×1.5 | 0.8 | 自然→人為 | | | 33, 58 |
| SE1059 | B.1 | 木組 | 円 | 円筒 | 1.7×1.6 | 1.2 | 自然→人為 | 手づくね皿 | 掘削直隣柱止めの内径55cm、裏石見出 | 36 |
| SE1051 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.3×1.1 | 1.0 | 自然→人為 | | | 33, 50 |
| SE1054 | B.1 | 直筒 | 円 | 圓筒 | 1.4×1.4 | 1.3 | 自然→人為 | | | 33, 50 |
| SE1054 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.6 | 1.4 | 自然 | 常滑甕 | | 33, 50 |
| SE1054 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.6以上 | 0.7以上 | 自然 | 常滑甕、ロクロ | | 33, 50 |
| SE1055 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.7 | 0.7 | 自然→人為 | ロクロ | | 33, 51 |
| SE1056 | B.1 | 直筒 | 円? | 円筒 | 2.0 | 1.3 | 自然→人為 | ロクロ | | 36 |
| SE1055 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.7×1.6 | 0.9 | 自然 | 常滑甕 | | 39, 55 |
| SE1057 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 1.6 | 0.7 | 自然 | | | 39, 51 |
| SE1058 | B.1 | 直筒 | (円筒化) | 円筒 | 1.3 | 0.8 | 自然 | | | 39, 52 |
| SE1057 | B.1 | 直筒 | 円? | 円筒 | 1.6以上 | 1.1 | 自然→人為 | | | 33, 51 |
| SE1057 | B.1 | 直筒 | 円 | 円筒 | 2.0×1.7 | 0.7 | 自然→人為 | ロクロ、常滑甕 | | 38, 52 |
| SE1092 | B.2 | 直筒 | 円 | 圓筒 | 1.8×1.7 | 1.2 | 自然 | 白堺の耳皿 | | 31, 50 |

*出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、神は十口神、輪輪は輪輪文陶を指す

第3表 B区井戸跡属性表

C. 土 壤

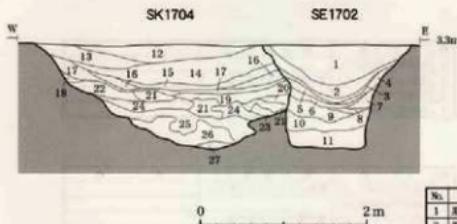
86基確認した。これらは規模や平面形・断面形から4類に分けられる。SK 1008・1310・1311は1類の特徴をよく示す土壤であり、出土遺物も多いことから個別に取上げるが、他の土壤の概要は分類にしたがって述べることとし、個別データは第4表にまとめた。



| No. | 土色・土性 | 混入物など | 備考 |
|-----|-------------------|--------------|----|
| 1 | 黒褐色(2.5Y1/1)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(2.5Y2/1)砂質シルト | 第V層ブロックを多く含む | |
| 3 | 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト | | |
| 4 | 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト | 第V層ブロックを多く含む | |
| 5 | 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト | | |



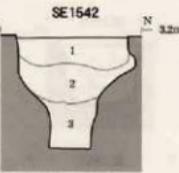
SE1543断面（西から）



| No. | 土色・土性 | 混入物など | 備考 |
|-----|-------------------|---------------|----|
| 1 | 黒褐色(10Y3/3)シルト | 第V層ブロックを多く含む | |
| 2 | 黒褐色(2.5Y2/1)砂質シルト | 第V層ブロックを多量に含む | |
| 3 | 灰オリーブ色(3YW2/1)シルト | 堅硬層 | |



SE1702断面（南から）

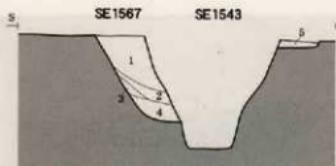


| No. | 土色・土性 | 混入物など | 備考 |
|-----|-------------------|---------------|----|
| 1 | 黒褐色(10Y3/3)シルト | 第V層ブロックを多く含む | |
| 2 | 黒褐色(2.5Y2/1)砂質シルト | 第V層ブロックを多量に含む | |
| 3 | 灰オリーブ色(3YW2/1)シルト | 堅硬層 | |

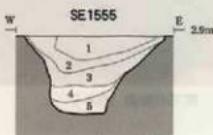
| No. | 土色・土性 | 混入物など | 備考 |
|-----|-------------------|-----------------|----|
| 1 | 褐褐色(10Y3/2)砂質シルト | | |
| 2 | 褐褐色(10Y3/2)砂質シルト | | |
| 3 | 黒褐色(2.5Y3/2)粘土 | | |
| 4 | 褐褐色(2.5Y4/2)シルト | オリーブ褐色層を多量に含む | |
| 5 | オリーブ褐色(2.5Y4/2)砂質 | | |
| 6 | 褐褐色(2.5Y3/2)砂質シルト | 黑色粘土の薄層を多量に含む | |
| 7 | オリーブ褐色(2.5Y4/2)砂質 | 第V層ブロックを多く含む | |
| 8 | 褐褐色(2.5Y4/2)粘土 | | |
| 9 | オリーブ褐色(2.5Y4/2)砂質 | 黑色シルト質粘土ブロックを含む | |
| 10 | 褐褐色(2.5Y3/2)砂質 | | |
| 11 | 黄褐色(2.5Y3/2)砂質 | | |
| 12 | 黒褐色(10Y3/2)シルト | 第IV層ブロックを多く含む | |
| 13 | 黒褐色(10Y3/2)シルト | 第IV層ブロックを多く含む | |
| 14 | 黒褐色(10Y3/1)シルト | 灰褐色の質粘土を多量に含む | |

図版50 B区井戸跡（1）

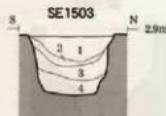
SK1702堆積土 SK1704堆積土



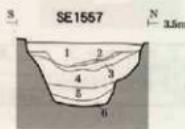
| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|------------------|-----------------|-----------|
| 1 | 灰褐色(10YR10/4)シルト | 黒褐色シルトブロックを多く含む | |
| 2 | 黒褐色(10YR8/2)シルト | | SE1567堆積土 |
| 3 | 灰褐色(10YR6/2)シルト | | |
| 4 | 灰褐色(10YR6/2)シルト | 黒褐色シルトをラミナ状に含む | |
| 5 | 灰褐色(10YR3/2)シルト | 第V-VI層ブロックを含む | 土堀堆土 |



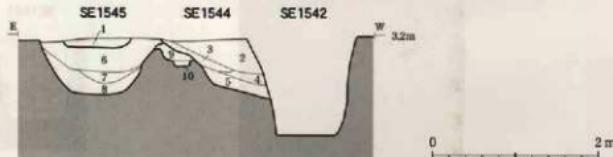
| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-------------------|-----------------|------|
| 1 | 黒褐色(10YR10/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR8/2)シルト | 黒褐色シルトブロックを多く含む | |
| 3 | 灰褐色(10YR6/2)シルト | 黒褐色シルトを含む | |
| 4 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 泥質層をラミナ状に含む | |
| 5 | 暗灰褐色(2.5YR3/2)シルト | | 壁面堆土 |



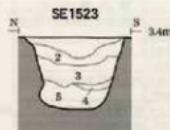
| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|------------------|---------------|----|
| 1 | 灰褐色(10YR10/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR8/2)シルト | 第III層をラミナ状に含む | |
| 3 | 灰褐色(10YR6/2)シルト | | |
| 4 | 灰褐色(10YR3/2)シルト | | |



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-------------------|---------------|----|
| 1 | 褐色(10YR4/4)泥質シルト | 黒褐色シルトブロックを含む | |
| 2 | 褐色(10YR4/4)泥質シルト | | |
| 3 | 褐色(10YR4/4)泥質シルト | 泥質層ブロックを含む | |
| 4 | にじみ黄褐色(10YR5/4) | | |
| 5 | 暗褐色(7.5YR3/2)シルト | 第IV-V層ブロックを含む | |
| 6 | 褐色(5.5YR3/2)泥質シルト | | |



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-------------------|-----------------|-----------|
| 1 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 第V-VI層ブロックを含む | SD1533堆積土 |
| 2 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | | |
| 3 | 灰褐色(10YR2/2)シルト | | SE1544堆積土 |
| 4 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 第VI-VII層ブロックを含む | |
| 5 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | | |
| 6 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V-VI層ブロックを含む | SE1542堆積土 |
| 7 | にじみ褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 8 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 泥質層をラミナ状に含む | |
| 9 | にじみ褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 10 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | SE1567堆積土 |

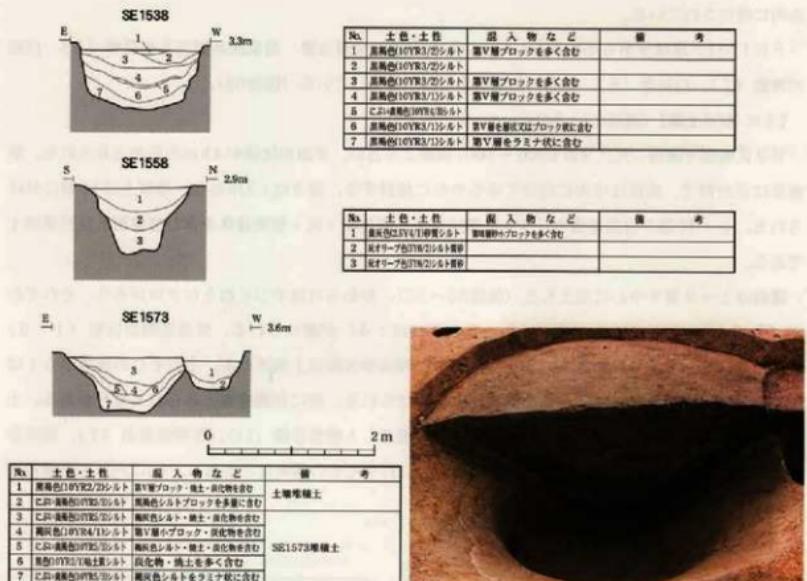


| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-------------------|------------------|----|
| 1 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V-VII層ブロックを含む | |
| 2 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 第V-VII層ブロックを多く含む | |
| 3 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 第V-VII層ブロックを多く含む | |
| 4 | 暗褐色(2.5YR3/2)シルト | | |
| 5 | にじみ褐色(10YR3/2)シルト | 黒褐色シルトブロックを含む | |



SE1523断面 (西から)

図版51 B区井戸跡 (2)



図版52 B区井戸跡 (3)



図版53 B区井戸跡出土遺物

1類：径が4mを超える大型土壤

B2区の4基(SK1008・1310・1311・1704)がこれにあたる。平面形は円形もしくは梢円形で、断面形は逆台形(SK1008・1310・1311)と捕鉢形(SK1704)があり、とくにSK1310・1311は底面がほぼ平らである。深さは0.9~1.3mある。建物群を避けるように分布しており、なかでもSK1310・1311は、区画Gの東端に位置する。堆積土の状況は土壤によって異なり、SK1311・1704は自然堆積、SK1008は間に廃棄層をはさむ自然堆積、SK1310は自然堆積のうち

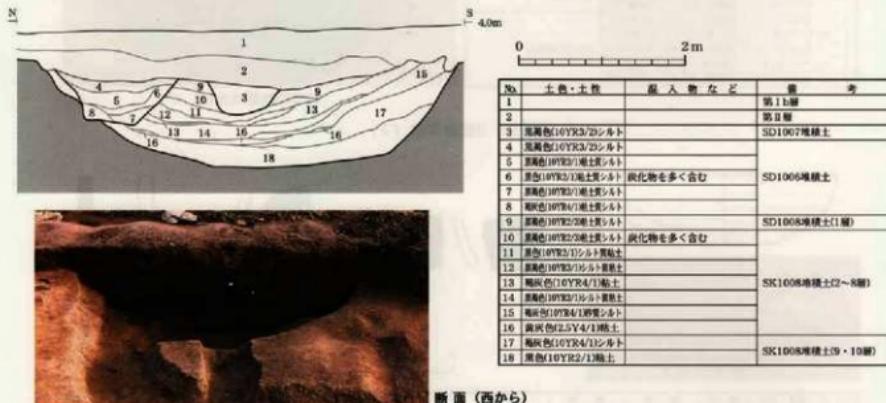
為的に埋戻されている。

S K 1704の堆積土から小皿を含むロクロかわらけ、常滑産壺、龍泉窯系割花文青磁碗（5）、白磁四耳壺（7）、白磁壺（6）、砥石、動物遺体などが出土している（図版68）。

【SK 1008土壤】（図版35・54）

B 2区南部で検出した。SD 1006・1007溝跡より古い。平面形は径が4.8mの円形とみられる。断面形は逆台形で、底面は中央に向けてゆるやかに傾斜する。深さは1.3mある。堆積土は10層に分けられる。9・10層が自然堆積土、1～8層は焼土・炭化物・灰・植物遺体を含む廃棄層と自然堆積土である。

遺物は1～8層を中心出土した（図版55～57）。かわらけは手づくねとロクロがあり、それぞれ皿（手づくね：2）と小皿（手づくね：3 ロクロ：4）が認められる。常滑産陶器は壺（1・5）と片口鉢（6・8・9）がある。1・5は胸部に押印が3段以上施される。それぞれの特徴から1は1b～2型式期、6・8は4～5型式期に位置付けられる。他に在地産とみられる破片がある。土器・陶器以外としては漆器碗（10）・片口鉢、木器皿、人物墨書き（11）、不明鉄製品（7）、凝灰砂岩の切石（12・13）、鐵滓、イシガイ科殻皮、ウリ科やモモの種実などがある。10は内外とも黒色漆



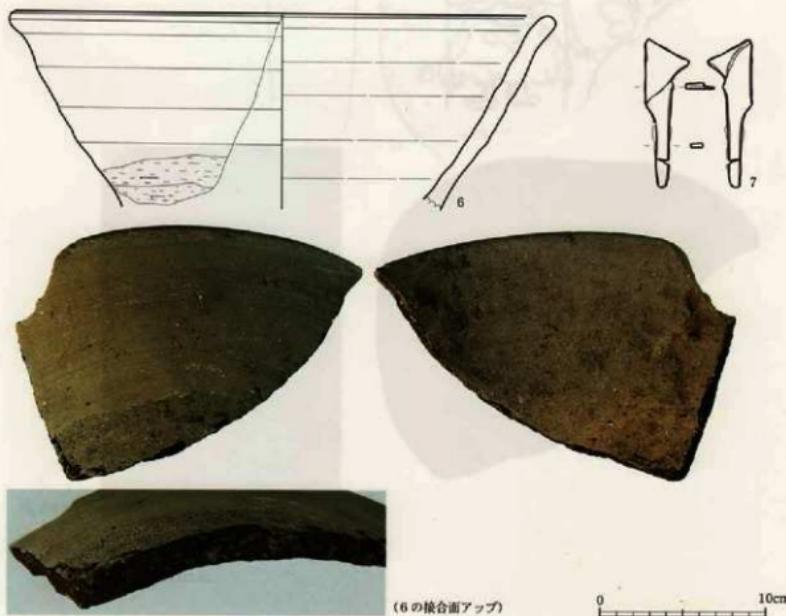
SK1008 漆器片口鉢出土状況

SK1008 木皿出土状況

図版54 SK1008土壤



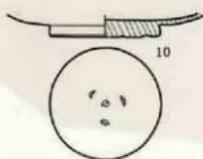
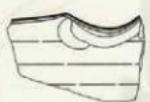
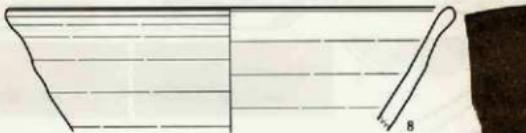
(1bのアップ)



(6の接合面アップ)

0 10cm

図版55 SK1008土壤出土遺物（1）



10



11



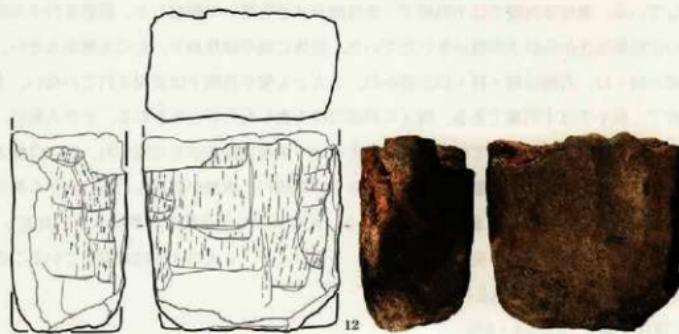
(11のアップ)



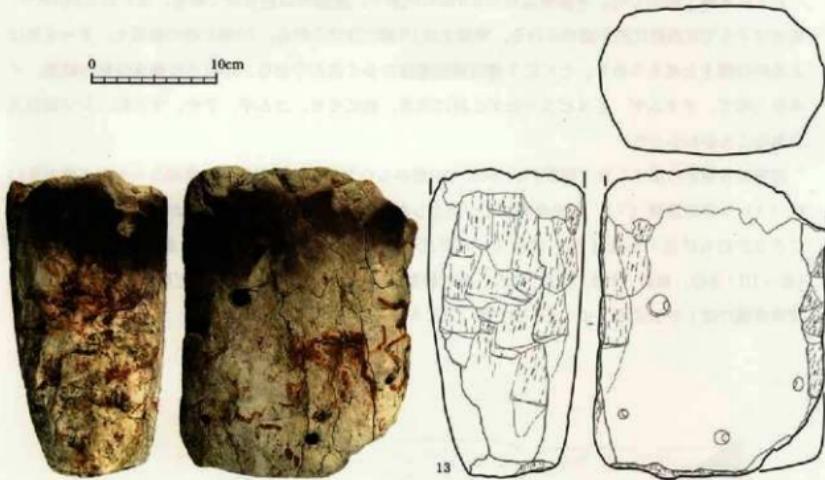
図版56 SK1008土塚出土遺物（2）

（（1）～（3）は地盤調査のもの）

11は扁平な梢円形の砂岩の一面に2人の人物が描かれたものである。礫は火を受けており、炭化物



0 10cm



| No. | 出土地 | 種別 | 圖 | 種 | 地 | 特 | 號 | 量 |
|-----|------|---------|------|------------|------------------------------|--------------------------------|---------------------|-------|
| 1 | 1-8層 | 陶輪脚 | 圓 | 圓 | 常滑 | 円筒底以上 輪脚・鉄縄 | 漆器【底面2-3mm】 | 94004 |
| 2 | 1-8層 | かわらけ 小底 | | | | 手づね 口縁部一一段ナギ | 灯明皿に使用 | 94046 |
| 3 | 1-8層 | かわらけ 小底 | 口8.4 | 底6.4 腹高1.4 | 口縁部:一段ナギ 底部外腹:オサエ 底部内腹:一向向ナギ | 94001 | | |
| 4 | 1-8層 | かわらけ 小底 | 口8.4 | 底6.8 腹高1.5 | ロクロナギ 底部:網転丸型-板状压痕 SD1007と接合 | 94006 | | |
| 5 | 1-8層 | 陶器 | 圓 | 圓 | 常滑 | 円筒底-長縦縫合 | | 94005 |
| 6 | 1-8層 | 陶器 | 複数 | 常滑 | | 口径32.8 厚壁 | 【底面5-6mm】 SK1008と接合 | 94006 |
| 7 | 1-8層 | 鉢脚底 不明 | | | | 口径8.8 幅2.7 厚0.3 | | 94022 |
| 8 | 1-8層 | 陶器 | 複数 | 常滑 | | 口径27.0 【底面5-6mm】 | | 94051 |
| 9 | 1-8層 | 陶器 | 片口縁 | 常滑 | | | 【底面3mm】 | 94009 |
| 10 | 1-8層 | 陶器 | 塊 | | | 高径6.5 内外腹:黒漆塗り 底部:ロクロ仄納 【漆木取り】 | | 94007 |
| 11 | 1-8層 | 石製品 | 墨書き | 残存底(23.0) | 常滑 | 残存底(18.2) 厚5.3 二人の人物の身體を描く【妙絵】 | | 94075 |
| 12 | 1-8層 | 石製品 | 研石 | 残存底(15.9) | 厚15.8 厚8.7 刮り痕 磨けはじけ【磨灰鉈】 | | | 94066 |
| 13 | 1-8層 | 石製品 | 切方 | 残存底(24.7) | 厚18.2 厚12.4 刮り痕 磨けはじけ【磨灰鉈】 | | | 94067 |

図版57 SK1008土壤出土遺物（3）

で仕上げられ、平高台に低い輪高台が付いた椀で、底面に4個のロクロ爪痕跡が認められる。

（人物墨書きについて）

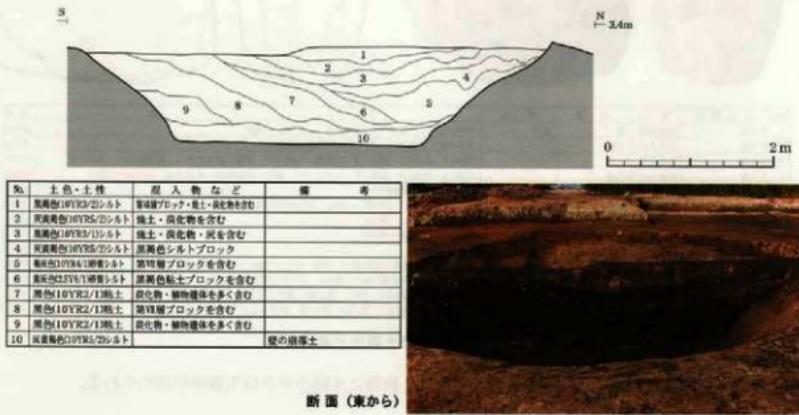
11は扁平な梢円形の砂岩の一面に2人の人物が描かれたものである。礫は火を受けており、炭化物

が付着している。墨痕は肉眼では不明瞭で、赤外線カメラを用いて観察した。観察を行った東北歴史博物館の山田晃弘氏から以下の教示をいただいた。全体に描写は稚拙で、左の人物が大きい。頭は左側が輪郭と目・口、右側は眉・目・口が描かれ、2人とも髪や烏帽子は表現されていない。上半身はいかり肩で、腕や手は不明確である。胸元の斜線は襟を表したものとみられる。右の人物は、肩の上に別な線があり、何かを背負っているように見える。下半身は裾広がりに描かれ、裾には縦とみられる表現がある。腰の中央には、腰紐の結び目とみられる楕円と直線が認められる。胸から腹にかけては円や半円状の表現があるが、意味は不明である。左の人物も全体的な特徴は右側と共通している。異なる点は左よりの縦線と胸中央の曲線である。したがって、2人の人物は剃髪していること、衣服の特徴から修驗者もしくは僧侶とみられる。

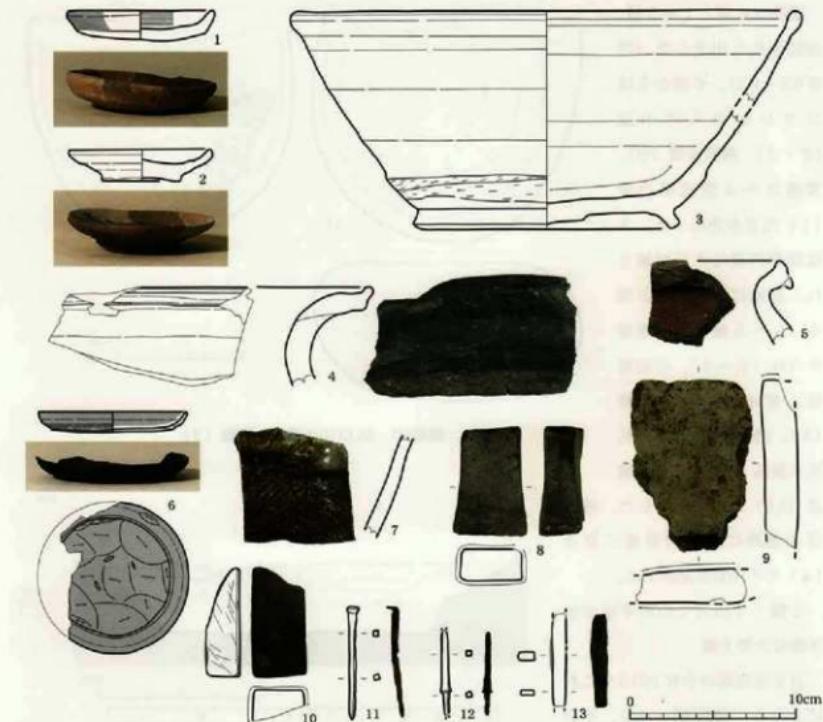
【SK 1310土壤】(図版34・58)

B2区東端で検出した。平面形は径が6.0mの円形で、断面形は逆台形である。深さは1.3mあり、底面は平らで北西壁に段が認められる。堆積土は10層に分けられる。10層が壁の崩落土、1~9層は人為的な理土と考えられる。とくに7層は植物遺体を多く含んでおり、これらは種実分析の結果、イネが主体で、オオムギ、イヌビエーヒエこれに次ぎ、他にモモ、コムギ、アサ、マメ科、シソ属などであることがわかった。

遺物は各層から出土した(図版59・60)。10層からロクロかわらけ小皿、常滑5~6型式期の片口鉢(3)や常滑産甕(7)、在地産甕などが出土した。1~9層には、手づくねかわらけ小皿(1)とロクロかわらけ皿・小皿(2)、常滑4~5型式期の甕(4・5)、渥美産甕、漆器小皿(6)、砥石(8~10・14)、鉄釘(11)、鉄鏃(12)、棒状鉄製品(13)のほかスサを含んだ甕土などが出土した。常滑産甕には1b型式期(4)と5型式期(5)がある。



図版58 SK1310土壤



| No. | 出土地点 | 種別 | 器種 | 產地 | 特 | 記 | 登録番号 |
|-----|------|------|-----|----|---|---|-------|
| 1 | 1-9層 | 小わらけ | 小瓶 | | 口徑8.9 高さ1.7 定形 外腹：1段ナゲ・オサエ、内腹：ヨコナゲ | | 61062 |
| 2 | 1-9層 | 小わらけ | 小瓶 | | 口径8.5 底径4.7 高さ1.9 残存3/5 ロクロナゲ 底面：側輪孔切 | | 61063 |
| 3 | 10層 | 脚部 | 片口鉢 | 常滑 | 口徑30.8 高さ径16.0 腹高13.0 残存：一部 玉縁【常滑5-6型式鉢】 | | 61061 |
| 4 | 1-9層 | 脚部 | 裏 | 常滑 | 口縁周間に浅い凹み 口縁部内面が渋く凹む【常滑11型式鉢】 | | 61064 |
| 5 | 1-9層 | 脚部 | 裏 | 常滑 | 口縁周間に浅い凹み 口縁部内面が渋く凹む【常滑5型式鉢】 | | 61065 |
| 6 | 1-9層 | 漆器 | 小瓶 | | 口径9.1 高さ7.4 高さ1.2 残り4/5 両面黒漆塗り 底面：ロクロ爪跡 【ケヤキ】 | | 61222 |
| 7 | 10層 | 脚部 | 裏 | 常滑 | 神戸(鉄鋤) | | 61060 |
| 8 | 1-9層 | 石製品 | 砾石 | | 長6.6 幅3.7 厚2.2 【鰐粒砂利】 | | 61291 |
| 9 | 1-9層 | 石製品 | 砾石 | | 現存長10.1 現存幅7.0 厚2.0 【細粒砾石】 | | 61405 |
| 10 | 1-9層 | 石製品 | 砾石 | | 長6.6 幅3.0 厚1.9 【玄山岩】 | | 61396 |
| 11 | 1-9層 | 鉄製品 | 釘 | | 長6.2 幅0.3~0.7 厚0.3 | | 61262 |
| 12 | 1-9層 | 鉄製品 | 絲 | | 現存長5.1 幅0.3~0.6 厚0.3 | | 61267 |
| 13 | 1-9層 | 鉄製品 | 伸状 | | 現存長6.1 幅0.3~0.5 厚0.3~0.5 | | 61365 |
| 14 | 1-9層 | 石製品 | 砾石 | | 現存長17.8 幅2.5 厚1.0 【玄山岩】 | | 61455 |

図版59 SK1310 土壌出土遺物（1）

【SK1311土壤】(図版34・61)

B2区東端で検出した。SD1319溝跡より古い。平面形は5.0×4.4mの椭円形で、断面形は逆台形である。底面は平らで、深さは0.9mある。堆積土は6層に分けられが、自然堆積と考えられる。6層は植物遺体を多く含んでおり、種実分析の結果、イネ、オオムギ、イヌビエーヒエ、ホタルイ属A、アサ、ヤナギタデ近似種、シロザ近似種、ヒユ属が目立ち、他にウメ、コムギ、カナムグラ、サンエタデ近似種、ギシギシ属、ナデシコ科、メナモミなどであることがわかった。

遺物は6層と1~5層、確認面から出土した（図版62・63）。6層からはロクロかわらけ小皿（2・3）、渥美産甕（9）、常滑3~4型式期の甕（1）などが出土した。3は底部内面にナデが施され、底面に板状圧痕が残る。1~5層から在地産片口鉢（6~8）、在地産甕、常滑産小型片口鉢（5）、曲物底板（12）、札状木製品（10）、板状木製品（11）などが出土した。確認面の遺物には、常滑産三筋甕（4）や不明鉄製品がある。

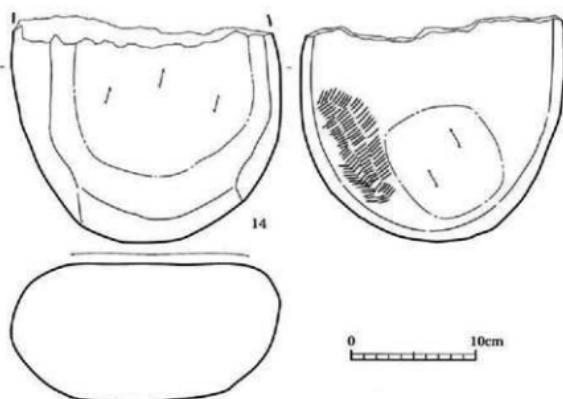
2類：4m×4mの平面形が不整な大型土壙

B2区南部のSK1015がこれにあたる（図版35・64）。平面形は不整形で、深さは0.4m、断面形は皿形である。建物群南側の空地に位置する。堆積土は下層（2~4層）が自然堆積、上層（1層）は人為的な埋土である。堆積土からロクロかわらけ皿が出土した。

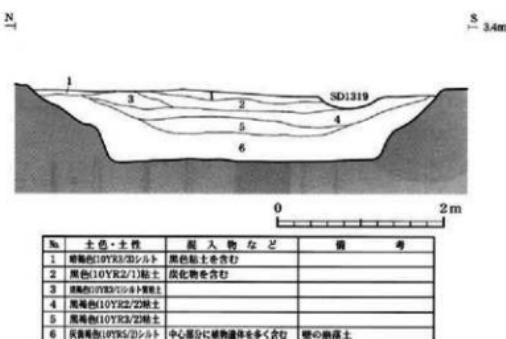
3類：径もしくは長軸の長さが1.6m以上~4m未満の中型土壙（図版64・65）

B1区の7基（SK1507・1525・1530・1531・1532・1540・1571）、B2区の12基（1010・1012・1013・1024・1517・1576・1580・1581・1582・1705・1706・1711）、B3区の2基（SK1023・1046）がこれにあたる。B1区は井戸跡集中域の東側に分布する。B2区は11基が区画G内に位置する。これらはSK1012・1013・1576を除いて建物群と重複せず、その西部（2基：SK1705・1706）、北東部（3基：SK1580・1581・1582）、南部（2基：SK1010・1024）に分布する。また、SK1711は区画Gの西外側に位置する。

平面形は円形もしくは梢円形で、断面形は逆台形（10基：SK1010・1012・1013・1024・1530・1531・1540・1571・1580・1582）やU字形もしくは上が開くU字形（8基：SK



図版60 SK1310土壤出土遺物（2）



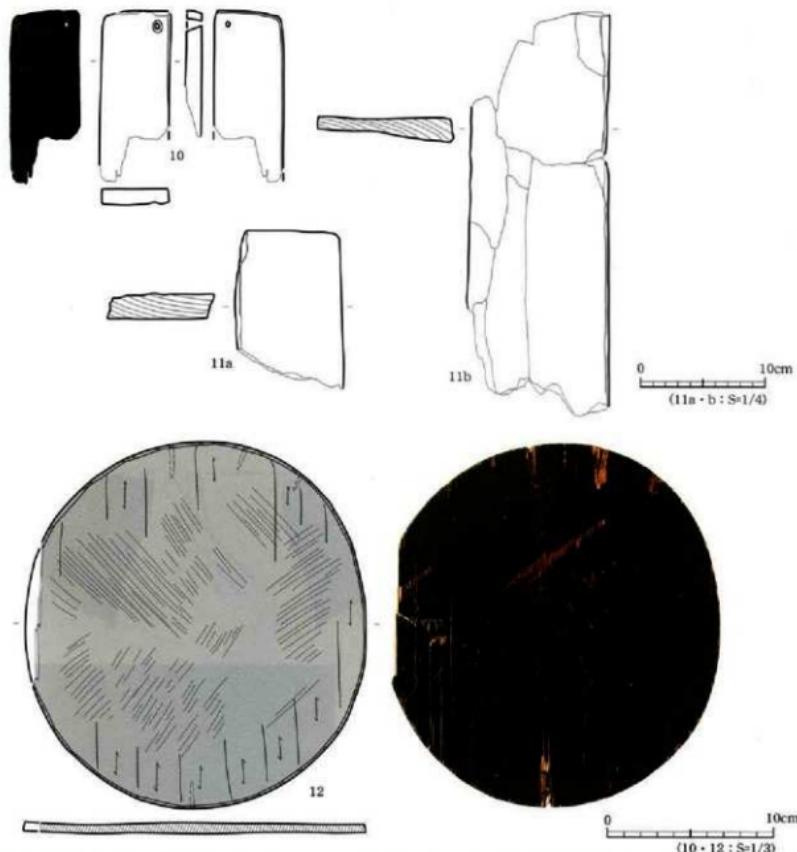
図版61 SK1311土壤



図版62 SK1311土壤出土遺物（1）

1507・1517・1525・1532・1576・1581・1705・1711)、皿形 (SK1706) がある。深さは0.3~1.2mあるが、0.5~0.7mが多い。堆積土の状況は自然堆積、もしくは自然堆積のち人為的に埋戻されているものが多い。

遺物は堆積土や確認面から少量出土している (図版67)。SK1012から常滑1b~3型式期の壺 (3)、SK1013から東海産三筋壺 (10)、SK1023から銭貨「開元通寶」(13)、SK1532からロクロかわらけ小皿 (2) やスサを含む壁土 (14)、SK1705からロクロかわらけ柱状高台 (1) などが



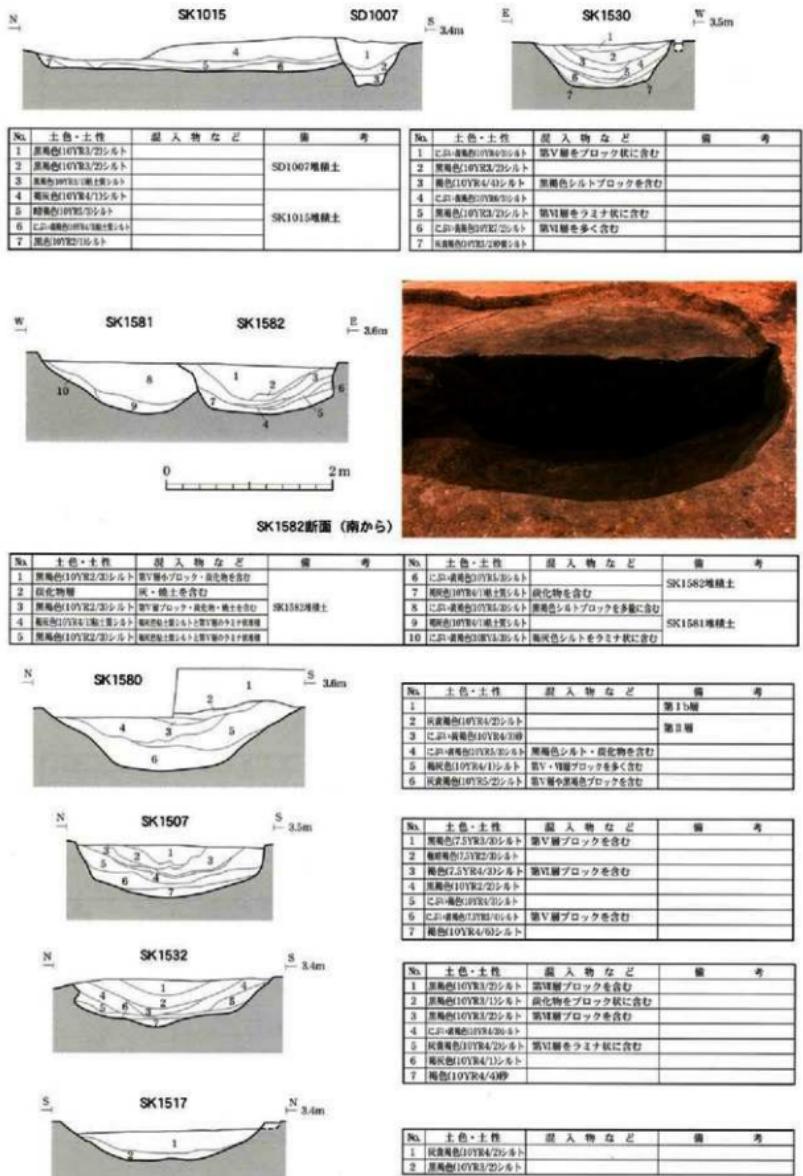
| No. | 出土層位 | 種別 | 断面 | 产地 | 特徴 | 基盤 |
|-----|------|------|-------|-----------------|---|-------|
| 1 | 6層 | 陶器 | 圓 | 常滑 | [深縫3~4型式間] | 01051 |
| 2 | 6層 | かわらけ | 小皿 | 口径7.2cm 直径4.8cm | 高さ1.5cm 壁厚1/4 | 01049 |
| 3 | 6層 | かわらけ | 小皿 | 口径9.0cm 直径4.6cm | 高さ1.9cm 完形 ロクロナデ→回転糸切 | 01048 |
| 4 | 確認面 | 陶器 | 三脚盆 | 常滑 | 沈存:陶器 | 01058 |
| 5 | 1~3層 | 陶器 | 小型片口鉢 | 常滑 | 口径18.0cm 底径11.0cm 高さ5.5cm 残存:一部底面が剥離 底部内面に使用痕 | 01057 |
| 6 | 1~3層 | 陶器 | 片口鉢 | 有應古窯 | 口径端部に浅い凹み | 01053 |
| 7 | 6層 | 陶器 | 片口鉢 | 在地 | | 01054 |
| 8 | 1~3層 | 陶器 | 片口鉢 | 有應古窯 | 内面に折し目 | 01052 |
| 9 | 6層 | 陶器 | 甕 | 細美 | 押立(腰側) | 01050 |
| 10 | 1~5層 | 木製品 | 札状木製品 | | 残存長10.2cm 幅4.2cm 厚0.9cm 端部に貫通孔 | 01269 |
| 11 | 1~5層 | 木製品 | 板状木製品 | | 残存長32.1cm 幅11.1cm 厚1.9cm | 01268 |
| 12 | 1~5層 | 木製品 | 曲物状板 | | 幅19.8~23.0cm 厚0.7cm 内面のみ接着 断面に木打痕 | 01253 |

図版63 SK1311土壤出土遺物（2）

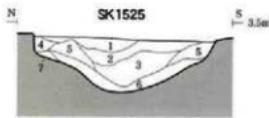
出土している。

4類：その他の土壤（図版65・66）

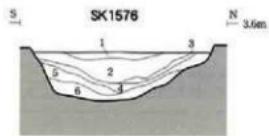
径もしくは長軸の長さが1.5m以下の小型土壙を一括した。平面形は円形や楕円形が主体で、断面形



図版64 B区土壤断面図 (1)



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-----------------|--------------------|----|
| 1 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第VI層をブロック状に含む | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第III層をブロック状に含む | |
| 3 | 褐色(10YR4/3)シルト | 黒褐色(10YR3/2)シルトを含む | |
| 4 | 黒褐色(10YR4/3)シルト | | |
| 5 | 褐色(10YR4/4)シルト | | |
| 6 | 褐色(10YR4/4)シルト | | |
| 7 | 褐色(10YR4/2)シルト | | |



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|-------------------|----|
| 1 | ビード状褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V層ブロックを多量に含む | |
| 3 | 炭化物層 | 第V層や黒褐色シルトブロックを含む | |
| 4 | ビード状褐色(10YR3/2)シルト | 黒褐色シルトをミナ状に含む | |
| 5 | ビード状褐色(10YR3/2)シルト | 地表落土 | |
| 6 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V層ブロックを多量に含む | |

E SK1571 W 3.6m

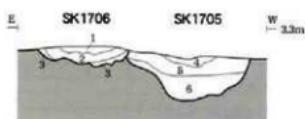


| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|------------------|---------------|----|
| 1 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 第VI層をラミナ状に含む | |
| 2 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 褐色色シルトラミナ状に含む | |
| 3 | 褐灰褐色(10YR4/3)シルト | 1~5層をラミナ状に含む | |
| 4 | 褐灰褐色(10YR4/4)シルト | 第VI層を含む | |
| 5 | 暗白色火山灰 | 第VI層ブロックを多く含む | |

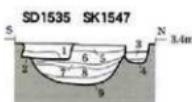
SK1576断面(東から)



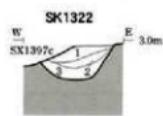
| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|------------------|---------------|----|
| 1 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 原生物を多量に含む | |
| 2 | 河濱褐色(10YR4/2)シルト | 黒褐色シルトブロックを含む | |
| 3 | 褐色(10YR4/4)シルト | | |
| 4 | 褐色(10YR4/4)シルト | 黒褐色シルトブロックを含む | |



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|------------------|---------------|-----------|
| 1 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 原生物を多量に含む | |
| 2 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | | SK1706堆積土 |
| 3 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 第IV層ブロックを多く含む | |
| 4 | 河濱褐色(10YR4/2)シルト | | |
| 5 | 河濱褐色(10YR4/2)シルト | 第IV層ブロックを含む | SK1706堆積土 |
| 6 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 第IV層ブロックを含む | |



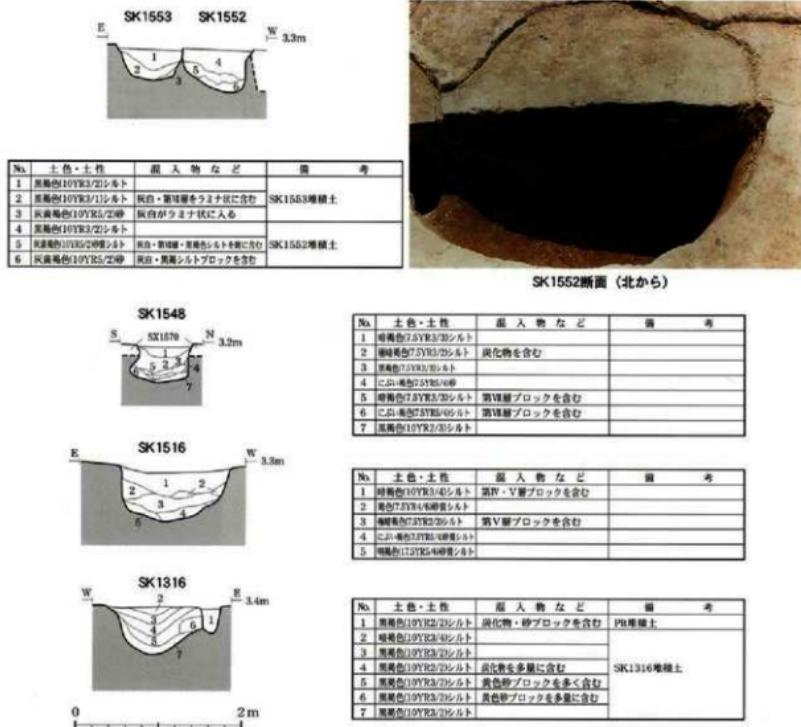
| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|-----------|-----------|
| 1 | オリーブ褐色(10YR4/2)シルト | | SD1535堆積土 |
| 2 | 暗褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 3 | オリーブ褐色(10YR4/2)シルト | | FIU堆積土 |
| 4 | 灰褐色(10YR5/2)シルト | 第IV層を多く含む | |
| 5 | 灰褐色(2.5YR7/2)シルト | | |
| 6 | 黒褐色(2.5YR7/2)シルト | | |
| 7 | 黒褐色(2.5YR7/2)シルト | | SK1547堆積土 |
| 8 | 灰褐色(2.5YR7/2)シルト | 第IV層を含む | |
| 9 | 灰褐色(2.5YR7/2)シルト | | |



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-----------------|-------------|----|
| 1 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 砂ブロックを多く含む | |
| 2 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 灰褐色色ラミナ状に含む | |
| 3 | 褐褐色(10YR3/2)シルト | 灰褐色色ラミナ状に含む | |

0 2 m

図版65 B区土壤断面図(2)



図版66 B区土壤断面図（3）

は逆台形、U字形もしくは上が開くU字形、皿形、箱形などがある。深さは0.5m以下が多い。B1区中央部から東側、B2区中央部に分布する。とくにB2区は土壤1~3類と異なり、位置が建物群と重複するものが多い。

遺物は堆積土や確認面から少量出土している（図版67）。SK1314から砥石（15）や鉄釘（17）、SK1502から近世陶器碗（4）、SK1505から砥石（16）、SK1513から常滑産甕（12）、SK1516から常滑産甕（9）や渥美産甕（11）、SK1573から常滑産甕（8）などが出土している。12は破片を砥石に転用されている。

D. 溝跡

25条確認した。このうち13条（SD1005・1006・1007・1017・1040・1045・1320・1515・1533・1564・1565・1708・1709）は個別に取上げ、これらを含む溝跡の個別データは第5表にまとめた。



| No. | 出土遺物・朝代 | 種別 | 器種 | 産地 | 特徴 | 備考 | 登録番号 |
|-----|------------|------|------|------|---------------------------------|----|-------|
| 1. | SK1705 2層 | 陶器 | 小わらけ | 新松高台 | 断面径6.6 残存1/2 ロクロナゲ 圓筒底面:斜板角(切欠) | | 63007 |
| 2. | SK1532 上層 | 陶器 | 小わらけ | 小組 | 口径8.0 高さ5.8 斜面1/4 ロクロナゲ 圓筒:斜板斜切 | | 62074 |
| 3. | SK1012 1層 | 陶器 | 葉 | 宝積 | 【宝積1b-3期】 | | 94064 |
| 4. | SK1562 2層 | 施釉陶器 | 柄 | 高台原 | 径6.2 残存半 外面:施釉 内面:灰釉 | | 62070 |
| 5. | SK1704 2層 | 青磁 | 柄 | 龍泉窯系 | 内面に施花文 | | 63004 |
| 6. | SK1705 1層 | 青白磁 | 器 | | | | 63003 |
| 7. | SK1705 1層 | 白磁 | 四脚壺 | | 内面は施物なし【大字府分類 白磁四耳壺Ⅱ類】 | | 63005 |
| 8. | SK1573 墓葬土 | 陶器 | 南瓶 | 常滑 | 押印(豪) | | 62115 |
| 9. | SK1516 墓葬土 | 陶器 | 葉 | 常滑 | 押印(格子) | | 62071 |
| 10. | SK1013 墓葬土 | 陶器 | 三點壺 | 東海 | 虎頭:黑繪 | | 94013 |
| 11. | SK1516 墓葬土 | 陶器 | 葉 | 深美 | 押印(豪文?) | | 62072 |
| 12. | SK1513 墓葬土 | 陶器 | 葉 | 常滑 | 破片を粘合に転用 | | 62073 |
| 13. | SK1023 墓葬土 | 施釉 | 器 | 境元酒井 | 径2.5 厚2.0 【唐 初唐】 | | 94018 |
| 14. | SK1532 墓葬土 | 石製品 | 碧玉 | | スサを含む | | 62208 |
| 15. | SK1314 墓葬土 | 石製品 | 碧玉 | 横須賀 | 残存長6.5 残存幅7.1 厚2.8 【縦張質シルト型】 | | 61883 |
| 16. | SK1505 墓葬土 | 石製品 | 碧玉 | 横須賀 | 残存長10.4 幅6.3 残存厚0.6 【砂引スレーー化】 | | 62362 |
| 17. | SK1314 墓葬土 | 鉄製品 | 刃 | | 残存長21.6 幅6.4~1.5 厚0.4~0.8 | | 61344 |

図版67 B区土壤出土遺物

※出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、盤は片口盤、鏡面は鏡面を文様を指す。

第4表 B区土壤属性表

【SD 1005・1518溝跡】(図版31・32)

B2区北部で確認した東西溝跡で33.0m分を検出した。SK 1021井戸跡、SK 1569土壌、SD 1520・1521溝跡より新しく、SK 1047・1517土壌より古い。上幅1.9~2.5m、下幅0.4~1.0m、深さは0.2mある。方向はE-5°~10°-Sである。底面はほぼ平坦で、断面形は皿形である。堆積土はぶい黄褐色シルトで自然堆積である。堆積土から近世染付磁器椀、ロクロかわらけ、常滑産甕などが出土した。

【SD 1006溝跡】(図版35・54)

B2区南部で確認したL字形の溝跡で、南北長10.6m、東西は4.8m分を検出した。SK 1008土壌、SD 1019溝跡より新しく、SD 1007溝跡より古い。上幅1.0~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は5層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。堆積土からロクロかわらけ皿(3・4)、ロクロかわらけ小皿(5)、東海産甕・片口鉢、在地産甕、銭貨「皇宋通寶」(19)などが出土した(図版71・72)。



SD1006断面

【SD 1007・1715溝跡】(図版31・32・64・68)

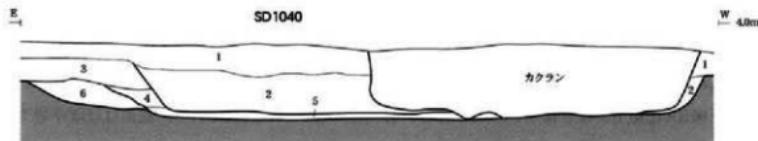
B2区南部で確認した東西溝跡で26.0m分を検出した。SK 1008・1015土壌より新しく、SD 1006溝跡より古い。上幅0.8~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.6mある。方向はE-35°-S前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は箱形である。堆積土は3層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。堆積土からロクロかわらけ皿(7)、常滑産甕、鐵鎌もしくは鐵釘などが出土した(図版71)。



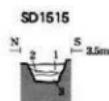
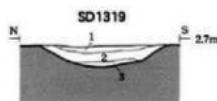
SD1007断面

【SD 1017・1319・1710溝跡】(図版31・32・68)

B2区中央部で確認した東西溝跡で79.5m分を検出した。SK 1048・1311土壌、SX 1397B湿地跡より新しく、SK 1018土壌、SD 1045溝跡より古い。上幅0.7~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.4mある。方向はE-15°-S前後である。底面は中央がやや凹み、断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられ、1・2・4層が自然堆積、3層は人為堆積とみられる。堆積土からロクロかわらけ皿、常滑産甕、在地産片口鉢、銭貨「熙寧元寶」(20)、棒状木製品(21)などが出土した(図版71・72)。

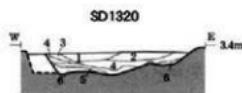
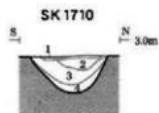


| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-------------------|-------|------------|
| 1 | | | 第1b層 |
| 2 | | | 第1c層 |
| 3 | こじき褐色(10YR4/2)シルト | | 第Ⅲ層 |
| 4 | 黒褐色(10YR4/2)シルト | | SD1040B堆積土 |
| 5 | こじき褐色(10YR4/2)シルト | | |
| 6 | こじき褐色(10YR4/1)シルト | | SD1040A堆積土 |



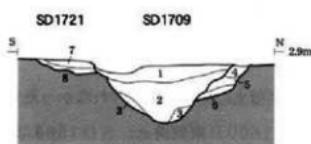
| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-----------------|-------------|----|
| 1 | 暗褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | | |
| 3 | 黒褐色(10YR2/2)シルト | 灰白ブロックを多く含む | |

| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-----------------|--------------|----|
| 1 | 黒褐色(10YR3/1)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V層ブロックを含む | |
| 3 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V層ブロックを多く含む | |

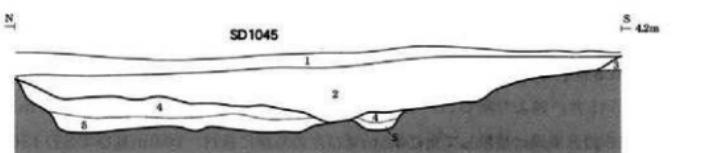


| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|------------------|-------------------|----|
| 1 | 暗褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(2.5YR3/2)シルト | | |
| 3 | 黒褐色(2.5YR3/2)シルト | | |
| 4 | 黒褐色(2.5YR3/2)シルト | こじき褐色(10YR4/2)シルト | |

| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-----------------|--------------|----|
| 1 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 3 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第V層ブロックを含む | |
| 4 | 黒褐色(10YR3/1)シルト | | |
| 5 | 黒褐色(10YR3/1)シルト | 第V層ブロックを含む | |
| 6 | 黒褐色(10YR3/1)シルト | 第V層ブロックを多く含む | |



| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-------------------|----------------------------|------------|
| 1 | 暗褐色(10YR4/1)シルト | 炭焼褐色のブロックをラミナ中に含む | |
| 2 | 暗褐色(10YR4/1)シルト | | SD1709C堆積土 |
| 3 | 黒褐色(2.5Y4/1)シルト | 炭焼褐色のブロック中に含む | |
| 4 | 半灰褐色(10Y5C5/2)シルト | 褐色シルトをラミナ中に含む | |
| 5 | 半灰褐色(10Y5C5/2)シルト | | SD1709A堆積土 |
| 6 | 半灰褐色(10Y5C5/2)シルト | 褐色シルトをラミナ中に含む | |
| 7 | 半灰褐色(10Y5C5/1)シルト | こじき褐色(10YR4/1)シルトをブリッジ中に含む | |
| 8 | 褐色(10YR4/1)シルト | こじき褐色のシルトをブリッジ中に含む | SD1721堆積土 |



| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-------------------|-------|-----------|
| 1 | | | 第1b層 |
| 2 | | | 第1c層 |
| 3 | こじき褐色(10YR4/2)シルト | | 第Ⅲ層 |
| 4 | 半灰褐色(10Y5C5/2)シルト | | SD1045堆積土 |
| 5 | 褐色(10YR4/1)シルト | | |

0 2 m

図版68 B区溝跡（1）

【SD 1040溝跡】(図版31・68)

B2区とB3区の間で確認した東西溝跡で16.0m分を検出した。2時期(A→B)認められる。近世以降に溝跡の凹地を拡張して水田に利用されたため、上部が大きく壊されている。B期は上幅3.8m以上、下幅3.4m以上、深さは0.4~0.5mある。方向はE-25°-S前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は2層に分けられるが、自然堆積とみられる。

【SD 1045溝跡】(図版31・32・68)

B2区中央部で確認した東西溝跡で61.0m分を検出した。SD 1040と同じく近世以降に溝跡の凹地を拡張して水田に利用されたため、溝上部や西側と東側は大きく壊されている。SK 1048土壤、SD 1017溝跡より新しく、SK 1018土壤より古い。上幅3.7m以上、下幅2.9m以上、深さは0.5~0.6mある。方向はE-20°-S前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は2層に分けられるが、自然堆積とみられる。

【SD 1320溝跡】(図版31・68)

B2区北部で確認した南北溝跡で16.3m分を検出した。SK 1568土壤より新しく、SE 1523井戸跡やSD 1518溝跡より古い。上幅2.0m、下幅1.5m、深さは0.3mある。方向はN-10°-E前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は6層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。4~6層から龍泉窯系鉢蓮弁文青磁碗やかわらけ、1~3層からロクロかわらけ、常滑産甕、堆積土からロクロかわらけ、常滑3~5型式期の片口鉢(13)、在地産片口鉢(10)などが出土した(図版71)。10の内面には、ヘラ書きが認められる。

【SD 1515溝跡】(図版32・68)

B2区北端で確認した東西溝跡で11.3m分を検出した。上幅0.6m、下幅0.3m、深さは0.3mある。方向はE-6°-S前後である。底面は平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は3層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。堆積土からロクロかわらけ小皿(図版71-6)、スサを含む壁土などが出土した。

【SD 1533・1564・1565溝跡】(図版31・69・70)

B1区南西部で確認した。3条の溝跡はそれぞれの接続部で堆積土に違いが認められなかったため、同時期に機能した溝跡と判断した。さらに、SD 1564はSX 1600B東側溝と、SD 1565はSX 1600B東側溝とSD 1501B区画溝跡と接続する。したがって、SD 1533・1564・1565は、区画G北西コーナー外側の東西16.0m、南北14.0m以上の区域を画する小区画溝跡とみられる。

SD 1533はSD 1565に接続して東に7.0m延びたのち北に折れ、6.5m以上延びるL字形の溝跡である。SE 1545井戸跡より新しい。上幅0.6~0.8m、下幅0.4~0.6m、深さは0.1mある。SD 1565はSX 1600B東側溝に接続して東に5.5m延びたのち南に折れ、10.0m延びてSD 1501Bに接続するL字形の溝跡である。2時期(A→B)認められ、SD 1566溝跡より新しい。B期は上幅0.6~1.2m、下幅0.4~0.6m、深さは0.3mある。SD 1564はSD 1565とSX 1600B・SD 1501Bで囲まれた内部を2つに分割する東西溝跡である。上幅0.6~0.8m、下幅0.3~0.4m、深さは0.3mある。断面形はSD 1533が皿形、SD 1564・1565は逆台形である。堆積土は、いずれも自然堆積とみら

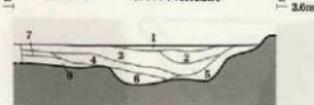
れる。

遺物は堆積土や確認面から少量出土している(図版71・72)。S D 1564堆積土からロクロカわらけ、常滑産甕(9)、鉄釘(17)、フック状鉄製品(18)、SD 1533確認面から白磁壺が出土した。



図版69 SD 1533・1564・1565溝跡周辺の遺構(北東から)

E SD 1546 SX1600東側溝



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|-----------------|-------------------|-------------|
| 1 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 細いラミナ状に含む | |
| 3 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 細いラミナ状に含む | |
| 4 | 黒色(10YR3/2)シルト | 黒褐色シルトをうき出し、炭化物含む | SX1600B期堆積土 |
| 5 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 6 | 黒色(10YR3/2)シルト | 黒褐色灰シルト・炭化物含む | |
| 7 | 褐色(10YR4/4)シルト | 褐色・黒褐色ブロックを多く含む | SD1564B期堆積土 |
| 8 | 褐色(10YR4/4)シルト | | |

N SD 1565



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|------------|-------|
| 1 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | こじり青褐色(10YR4/5)シルト | 青褐色ブロックを含む | B期堆積土 |

SK 1703



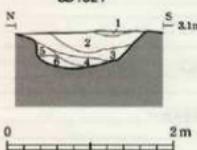
| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|------------|----|
| 1 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 2 | こじり青褐色(10YR4/5)シルト | | |
| 3 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 第1層ブロックを含む | |
| 4 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |

SD 1708



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|----------------|----|
| 1 | こじり青褐色(10YR4/5)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | | |
| 3 | 黒褐色(10YR4/4)シルト | こじり青褐色をウミナリに含む | |

SD 1321

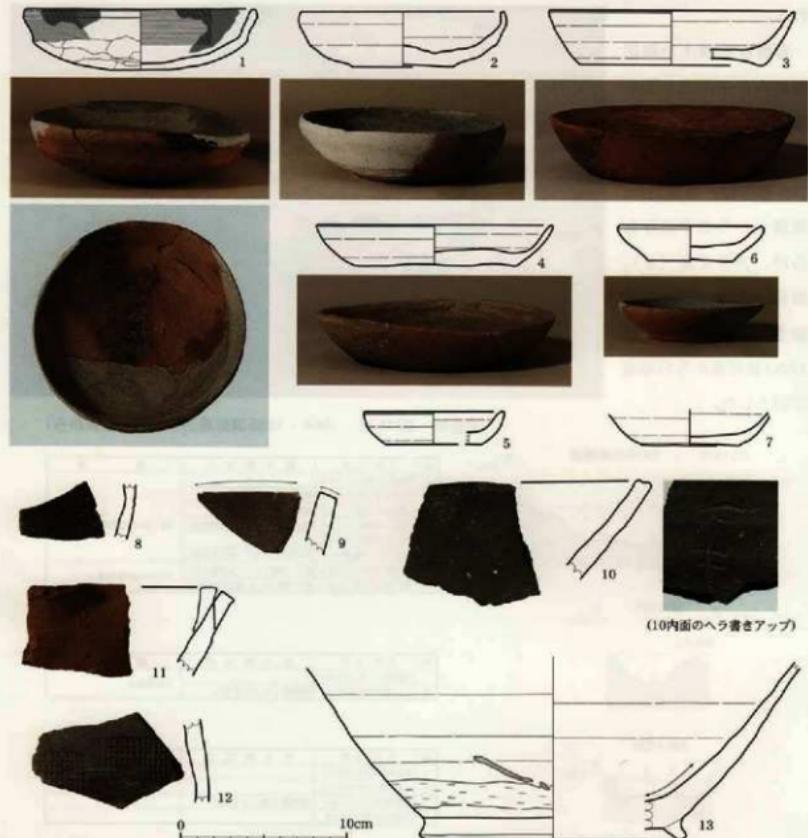


| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|---------------|----|
| 1 | 暗褐色(10YR3/4)シルト | | |
| 2 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 炭化物を多く含む | |
| 3 | こじり青褐色(10YR4/5)シルト | 第1層ブロックを含む | |
| 4 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 炭化物・砂ブロックを含む | |
| 5 | 黒褐色(10YR3/2)シルト | 黄褐色ブロックを多く含む | |
| 6 | こじり青褐色(10YR4/5)シルト | 黒褐色シルトブロックを含む | |

図版70 B区溝跡(2)

【SD 1709溝跡】(図版31・70)

B2区西端で確認した東西溝跡で16.0m分を検出した。2時期(A→B)認められ、SD 1721溝



(10内面のヘラ書きアップ)

| No | 出土遺物・部位 | 種別 | 器種 | 生地 | 特徴 | 量目 |
|----|------------|------|-----|-----------------------------|--|-------|
| 1 | SD1703 1層 | かわらけ | 瓶 | | 口径14.0 高さ3.6 残存1/2 口縁部：1段ナチ 脇外：オサエ 内外に油煙状付着物 | 03005 |
| 2 | SD1703 1層 | かわらけ | 瓶 | | 口径12.3 瓶径6.0 残高3.2 残存1/2 ロクロナデ(方削輪) 底部：回転角切 | 03009 |
| 3 | SD1606 地表土 | かわらけ | 瓶 | | 口径14.8 瓶径11.0 高さ3.2 ロクロナデ 底部：回転角切 | 9-002 |
| 4 | SD1606 地表土 | かわらけ | 瓶 | | 口径14.2 瓶径9.7 高さ2.3 ロクロナデ 底部：回転角切 | 9-003 |
| 5 | SD1606 地表土 | かわらけ | 小瓶 | | 口径8.5 瓶径5.6 高さ2.0 ロクロナデ 底部：回転角切 | 9-043 |
| 6 | SD1515 下部 | かわらけ | 小瓶 | | 口径8.8 瓶径6.1 高さ2.1 残存1/3 ロクロナデ 底部：回転角切 | 9-067 |
| 7 | SD1607 1層 | かわらけ | 小瓶 | | 底径5.9 ロクロナデ 底部内面：一方向ナデ 底部：回転角切 | 9-024 |
| 8 | SD1574 地表土 | 陶器 | 三筋壺 | 常滑 | 浅縁：三筋 | 02114 |
| 9 | SD1565 地表土 | 陶器 | 壺 | 常滑 | 板片合板焼に利用 | 02069 |
| 10 | SD1329 地表土 | 陶器 | 片口鉢 | 白螺白石か | 内面にヘラ書き(2丁) | 91105 |
| 11 | SD1710 1層 | 陶器 | 片口鉢 | 白螺白石か | | 03013 |
| 12 | SD1710 1層 | 陶器 | 壺 | | 押凹彫様子 | 03014 |
| 13 | SD1329 地表土 | 陶器 | 片口鉢 | 東南 | 高台 体部下端にヘラ記号「1」 体部下端に回転角切り 【常滑3～5型式期】 | 91106 |
| 14 | SD1712 1層 | 陶器 | 壺 | 常滑 | 押凹彫様 | 03011 |
| 15 | SD1712 1層 | 陶器 | 片口鉢 | 白螺白石か | 押凹彫様+斜線 | 03012 |
| 16 | SD1533 地表土 | 白磁 | 壺 | 高台1.1 残存：一部【大学前分離 自磁面耳垂直彫り】 | | 02076 |
| 17 | SD1565 地表土 | 陶製品 | 鉢 | | 長3.0 幅0.3～0.5 | 02288 |
| 18 | SD1565 地表土 | 陶製品 | 不明 | | 長3.9 幅0.4 フック状 | 02289 |
| 19 | SD1606 2層 | 陶製品 | 壺 | 生灰質灰 半灰 | 【生灰 半灰】 [生灰 初唐1039年] | 94015 |
| 20 | SD1607 1層 | 陶製品 | 壺 | 照光灰質灰 | 口径2.4 高さ2.9 【生灰 初唐1068年】 | 94017 |
| 21 | SD1319 地表土 | 木製品 | 柄 | 残存18.8 幅2.3 [生灰] | | 01231 |

図版71 B区溝跡出土遺物（1）



図版72 B区溝跡出土遺物（2）

跡より新しい。規模は東側で上幅0.8m、下幅0.5m、深さは0.3mであるが、西端では、上幅1.6m、下幅0.8m、深さ0.6mと大きくなる。他の溝跡に較べて平面形が盃み断面形も一定しない。壁の崩壊が著しい部分は、上幅が2.7mとなっている。堆積土は3～4層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。堆積土から常滑窯、動物遺体、モモが出土した。

| 遺構No. | 区 | 地盤(m) | 断面形 | 幅(㎝) | 方向 | 基盤土 | 出土 遺物 | 備考 | 回数 | |
|-------------|-----|-------|-----|---------|---------|---------|-----------------|--|---------------------------|----------|
| SD1069(15)B | B 2 | 3.30 | 直形 | 1.9-2.5 | E-10° S | 自然 | 井付鉢、常滑窯、ロクロ | 普通用跡 | 31-32 | |
| SD1066 | B 2 | 14.8 | 逆台形 | 1.0-1.3 | 0.4-0.6 | U字 | 常滑窯、在鉢、常滑灰、ロクロ灰 | 小区域溝 | 35 | |
| SD1067(17)B | B 2 | 2.60 | 直形 | 0.8-1.3 | 0.4-0.6 | E35° S | 自然、常滑窯、ロクロ窯、鉄釘 | 普通用跡 | 31-32 65 | |
| SD1017 | B 2 | 45.5 | 逆台形 | 0.7-1.3 | 0.4-0.6 | 0.4 | E15° S | 常滑窯、在片口鉢、ロクロ灰、開掌 元寶(初跨1066年)、桙木本財品 | 31-32 69 | |
| SD1019 | B 2 | 5.8 | 逆台形 | 0.8-0.9 | 0.3 | 0.4 | 鐵道敷石 | | 35 | |
| SD1040-A-B | B 2 | 16.0 | 直形 | 3.40 | 1.0-3.4 | E25° S | 自然 | 近世以降水田として利用 | 31 69 | |
| SD1048 | B 2 | 61.0 | 直形 | 0.6-7.0 | 0.6-6.0 | 0.5-0.6 | E20° S | 自然 | 近世以降水田として利用 | 31-32 69 |
| SD1322 | B 2 | 16.3 | 逆台形 | 2.0 | 1.5 | 0.3 | N10° E | 下層青磁縫接、かわらけ 上層青磁 窯・ロクロ 地盤骨材・片口鉢・ロクロ | 31 69 | |
| SD1321 | B 2 | 3.2 | 逆台形 | 1.4 | 1 | 0.4 | 鐵道敷石 | 自然 常滑窯 | 32 71 | |
| SD1515 | B 2 | 11.3 | 直形 | 0.6 | 0.3 | 0.3 | E6° S | 自然 ロクロ 磁土 | 32 69 | |
| SD1526 | B 2 | 4.7 | 逆台形 | 0.4 | 0.2 | 0.1 | E5° S | 自然 | 31 | |
| SD1521 | B 2 | 1.8 | 直形 | 0.4 | 0.2 | 0.2 | 鐵道敷石 | 自然 かわらけ、常滑窯 | 37 | |
| SD1538 | B 1 | 13.5 | 直形 | 0.6-0.8 | 0.4-0.6 | 0.1 | U字 | 磚 白磁窯 | 小区域溝、SD1504-1565と一通 | 31 |
| SD1538 | B 1 | 4.9 | 直形 | 0.5-0.6 | 0.3 | 0.7 | E10° S | 自然 | 31-32 | |
| SD1561 | B 1 | 2.3 | 直形 | 0.4-0.6 | 0.2 | 0.3 | 鐵灰 | 自然 かわらけ | 33 | |
| SD1564 | B 1 | 5.2 | 逆台形 | 0.6-0.8 | 0.3 | 0.4-0.5 | E5°-10° N | 自然 ロクロ | 小区域溝、S X1600号重複・SD1553と一通 | 31 71 |
| SD1568-A-B | B 1 | 15.0 | 直形 | 0.6-1.2 | 0.4-0.6 | 0.3 | U字 | 常滑窯、ロクロ、鉄釘、フック状鉄製品 | 31 71 | |
| SD1566 | B 1 | 3.9 | 直形 | 0.4-0.6 | 0.2-0.3 | 0.1 | U字 | 自然 ロクロ | 31 | |
| SD1574 | B 2 | 4.2 | 直形 | 0.4-0.6 | 0.2-0.3 | 0.3 | E20° N | 自然 湿潤三面窓 | 32 | |
| SD1703 | B 2 | 14.0 | 直形 | 1.3 | 1.2 | 0.2 | N10° E | 自然 手づくね、ロクロ | 31 71 | |
| SD1708 | B 2 | 18.0 | 直形 | 1.4-1.7 | 1.0-1.2 | 0.2 | N10°-E | 自然 动物、瓦頭火鉢 | 普通用跡 | 31 71 |
| SD1709 | B 2 | 16.0 | 直形 | 0.8-1.6 | 0.5-0.8 | 0.3-0.6 | E20°-N | 自然 常滑窯 | 31 71 | |
| SD1712 | B 2 | 7.0 | 直形 | 0.7-1.0 | 0.3-0.4 | 0.2 | E40° S | 自然 常滑窯、鉢、ロクロ | 31 | |
| SD1713 | B 2 | 8.0 | 直形 | 0.9-1.1 | 0.6-0.9 | 0.1 | NSF-NF | 自然 ロクロ | 31 | |
| SD1714 | B 2 | 5.2 | 直形 | 1.0 | 0.8 | 0.2 | 自然 | 小さく航行する | 31 | |
| SD1721 | B 2 | 13.3 | 直形 | 0.7 | 0.5 | 0.2 | NSF-NF | 自然 | 31 71 | |

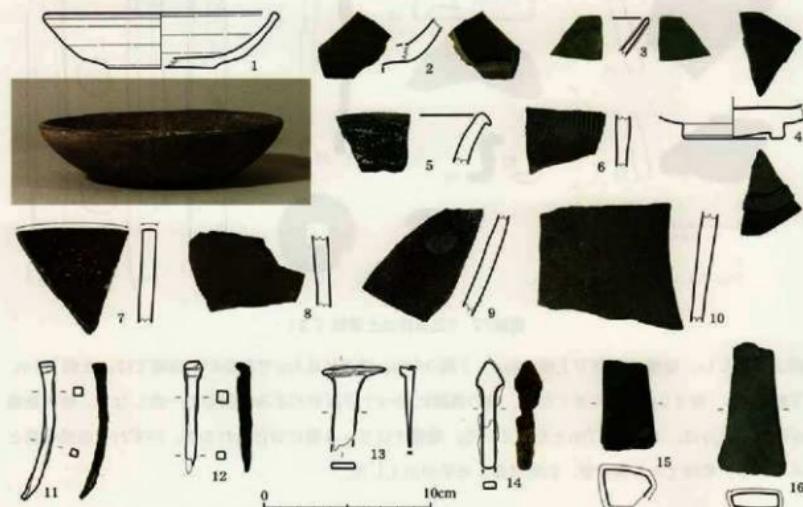
東出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、鉢は片口鉢、縫接は縫接文縫接を指す

第5表 B区溝跡属性表

E. 表土出土遺物（図版73）

表土からロクロかわらけ皿（1）、常滑窯（5）、三筋窯（7・9）、甕（6・7・10）、龍泉窯系割画文青磁碗（2・4）、龍泉窯系鱗弁文青磁碗（3）、鉄釘（11～13）、鉄錠（14）、砥石

(15・16) などが出土した。



| No. | 出土層位 | 種別 | 器種 | 地 | 特 | 目 | 登録 |
|-----|------|------|-----|------|--------------------------------------|---|-------|
| 1 | 第1層 | かわらけ | 盤 | | 口径14.1 奥6.5 器高3.3 ロクロナデ 底部:斜面名切 板状压痕 | | 94048 |
| 2 | 第1層 | 青磁 | 碗 | 鹿島窯系 | 断文 | | 94020 |
| 3 | 第1層 | 青磁 | 碗 | 鹿島窯系 | 断文 [太字部分 施釉面青磁碗口部] | | 01143 |
| 4 | 第1層 | 青磁 | 碗 | 鹿島窯系 | 底内面に擦傷文 [太字部分 鹿島窯系青磁碗:口部] | | 01142 |
| 5 | 第1層 | 陶器 | 三筋壺 | 常滑 | 断文 | | 01141 |
| 6 | 第1層 | 陶器 | 壺 | 常滑 | 押出模様 | | 02098 |
| 7 | 第1層 | 陶器 | 壺 | 常滑 | 施釉を焼石に転用 | | 02099 |
| 8 | 第1層 | 陶器 | 壺 | 常滑 | 押出模様(子) | | 02097 |
| 9 | 第1層 | 陶器 | 三筋壺 | 常滑 | 沈文:鹿島 | | 01144 |
| 10 | 第1層 | 陶器 | 壺 | 常滑 | 押出模様 | | 09017 |
| 11 | 第1層 | 瓦製品 | 瓦 | | 長3.9 幅0.4~0.5 | | 01368 |
| 12 | 第1層 | 瓦製品 | 瓦 | | 長3.7 幅0.4~0.5 | | 01353 |
| 13 | 第1層 | 瓦製品 | 瓦 | | 長3.5 幅3.8 厚0.4 | | 94076 |
| 14 | 第1層 | 瓦製品 | 瓦 | | 長3.4 幅0.4 厚0.4 斜面部压痕 | | 94078 |
| 15 | 第1層 | 石製品 | 鏡石 | | 塊径5.2 幅3.9 厚2.2 [砂岩] | | 01403 |
| 16 | 第1層 | 石製品 | 鏡石 | | 長7.8 幅2.4~3.8 厚1.1 [砂岩] | | 01402 |

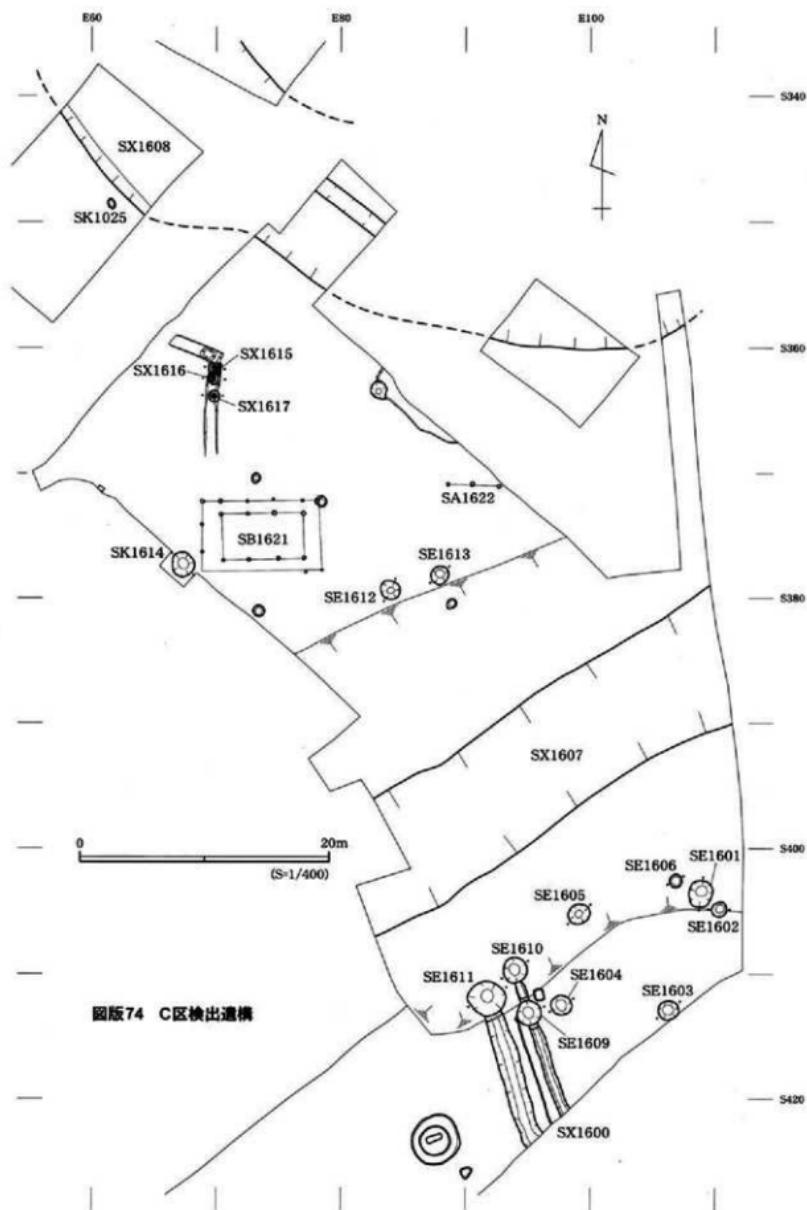
図版73 B区表土出土遺物

(5) C区

調査区の東側で掘立柱建物跡、掘立柱列跡、井戸跡、墓跡、土壤などを確認した(図版74)。B区に較べて造構密度が低い。造構の年代は南部が中世、北部は近世とみられる。これは、C区北端から中央部を平安時代のSD 1100が流路を変えながら流れ、その後北端と中央部の凹地にSX 1607・1608湿地跡が形成されたことから、この区域は中世まで地盤が悪く、造構をつくるのに不向きな土地であったためと考えられる。遺物は井戸跡、墓跡、土壤から土器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品などが少量出土している。

A. 掘立柱建物跡、掘立柱列跡

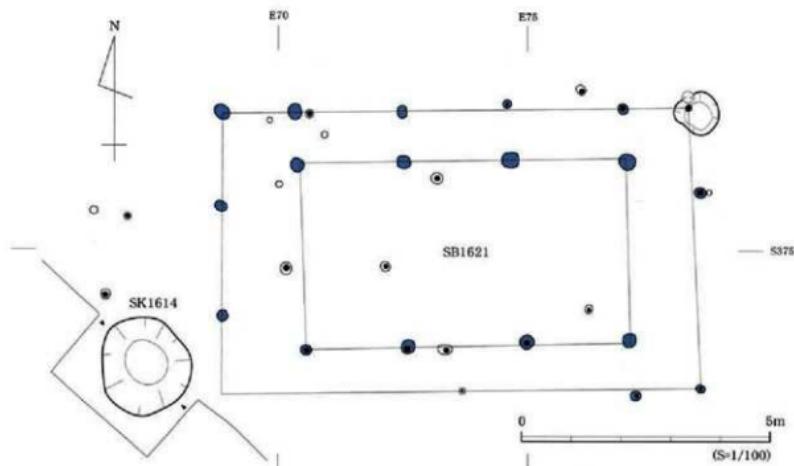
調査区北部で掘立柱建物跡1棟、掘立柱列跡1条を確認した。建物の方向はほぼ真北を向く。



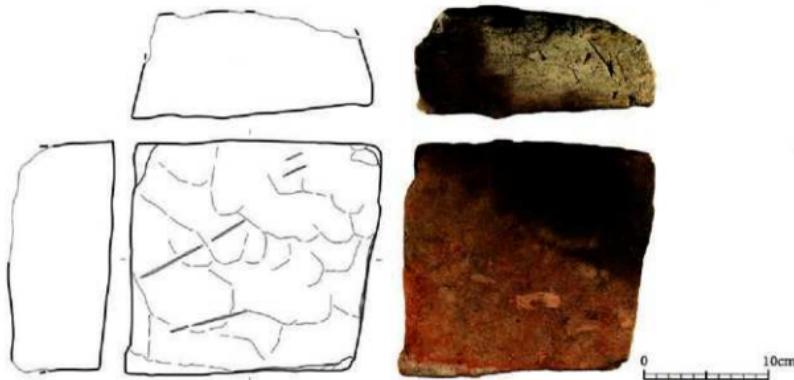
図版74 C区検出遺構

【SB1621建物跡】(図版75)

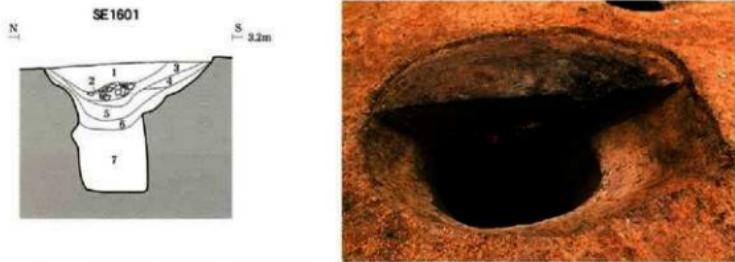
東西5間、南北3間の東西棟建物跡で四面に庇が付く。柱穴は身舎が8箇所、庇は11箇所で確認している。全ての柱穴に柱抜取穴があり、その堆積土は焼土や炭化物を多く含み、焼けた切石などが出土することから、本建物は火災で焼失したと考えられる。平面規模は桁行きが身舎北側柱列で総長6.6m、柱間寸法は西から2.1m、2.2m、2.3m、梁行きは東妻で3.6m、庇の出は桁付きが西で1.5m、東は1.3m、梁行きは1.0mとみられる。方向は身舎北側柱列で測るとE-1°-Nである。柱穴は身舎が径30~40cmの円形で、深さは40~50cm、庇は径20~30cmの円形、深さは40~50cmある。庇北西隅柱穴から凝灰岩の切石が出土した(図版76)。



図版75 SB1621建物跡



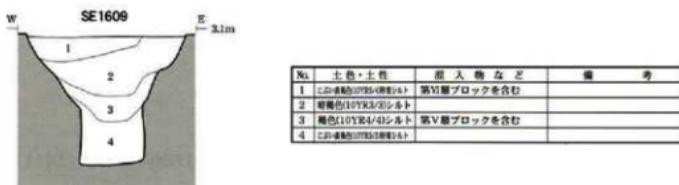
図版76 SB1621建物跡出土遺物



| No. | 土色・土性 | 組入物など | 備考 |
|-----|--------------------|------------------|----|
| 1 | 褐色(10YR4/4)シルト | 第VI層ブロックを含む | |
| 2 | C-E-褐色(10YR4/5)シルト | 焼けた褐灰色調石を多量に含む | |
| 3 | 炭化物層 | | |
| 4 | 褐褐色(10YR5/2)シルト | 第VI層ブロックを含む | |
| 5 | 褐色(10YR4/1)シルト | 第VI・VII層ブロックを含む | |
| 6 | C-E-褐色(10YR5/2)シルト | 第VI層を2ミナ伏に含む | |
| 7 | 褐褐色(10YR5/2)シルト | 第VI・VII層をラミナ状に含む | |

SE1601断面(西から)

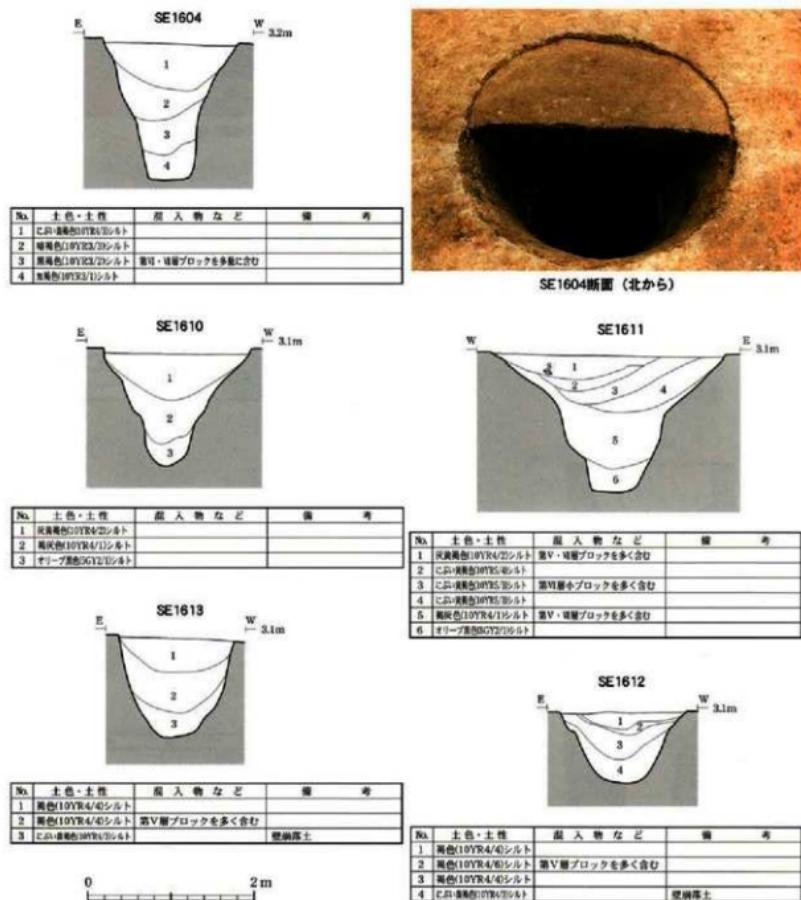
0 2m



図版77 C区井戸跡(1)

【S A 1622柱列跡】(図版74)

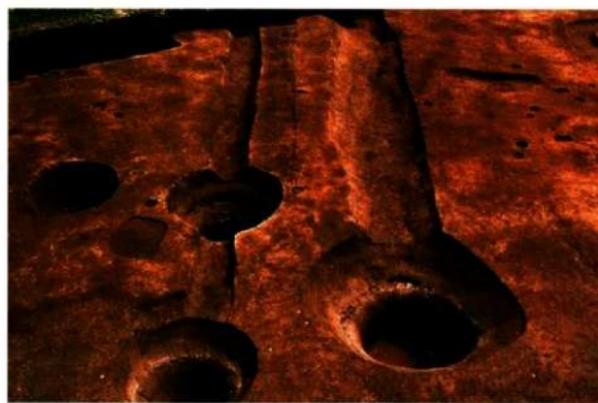
東西2間の柱列跡である。柱穴は3個検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認している。総長は4.1m、柱間寸法は西から1.9m、2.2mである。方向はE-1°-Nである。柱穴は一辺20~40cmの方形で、深さは30cmある。埋土は暗褐色シルトである。



図版78 C区井戸跡 (2)

B. 井戸跡

調査区北部で2基 (SE 1612・1613)、南部で9基 (SE 1601~1606・1609~1611) 確認した (図版74・77・78)。いずれも素掘りで、平面形は円形もしくは円形基調である。断面形は、円筒



図版79 SE1604・1608・1610・1611井戸跡（北から）

形（6基：SE1602・1603・1604・1606・1612・1613）と漏斗形（5基：SE1601・1605・1609・1610・1611）がある。規模は径が1.0～2.8m、深さは0.8～1.7mある。堆積土は下部に壁の崩落土を含む機能時の自然堆積層、上部には廃絶後埋め戻された人為堆積土や廃絶後放置されたことを示す自然堆積土が認められる。なかには最上層に第Ⅱ層が認められるものもある。個々の属性は第6表にまとめた。

遺物は堆積土から少量出土した（図版80）。SE1601から手づくねかわらけ小皿（1）、ロクロかわらけ、渥美童甕（3）・片口鉢、SE1604から折敷（4）が出土した。また、SE1601の2層や確認面からは焼けた凝灰岩の切石（5）が多量に出土している。

| 遺構名 | 構造 | 平面形 | 断面形 | 幅 横(m) | 深 さ(m) | 堆積土の状況 | 出 土 遺 物 | 備 考 | 認 定 号 | |
|--------|----|-----|-----|---------|--------|--------|------------------------|-----|-------|-----|
| | | | | | | | | | 平面図 | 断面図 |
| SE1601 | 漏斗 | 円 | 漏斗 | 2.0×1.9 | 1.6 | 自然→人為 | 渥美童・鉢、手づくね小皿、ロクロ、凝灰岩切石 | | 74 | 77 |
| SE1602 | 漏斗 | 円 | 円筒 | 径1.2 | 0.8 | 自然 | | | 74 | 77 |
| SE1603 | 漏斗 | 円 | 円筒 | 1.8×1.6 | 1.6 | 自然 | ロクロ | | 74 | 77 |
| SE1604 | 漏斗 | 円 | 円筒 | 径1.6 | 1.7 | 自然 | 折敷 | | 74 | 78 |
| SE1605 | 漏斗 | 円 | 漏斗 | 1.7×1.6 | 1.6 | 自然 | | | 74 | 77 |
| SE1606 | 漏斗 | 円 | 円筒 | 径1.9 | 0.8 | 自然→人為 | | | 74 | 77 |
| SE1609 | 漏斗 | 円 | 漏斗 | 2.0×1.9 | 1.6 | 自然 | | | 74 | 77 |
| SE1610 | 漏斗 | 円 | 漏斗 | 径1.8 | 1.4 | 自然 | | | 74 | 78 |
| SE1611 | 漏斗 | 円 | 漏斗 | 径2.8 | 1.7 | 自然→人為 | 米器 | | 74 | 78 |
| SE1612 | 漏斗 | 円 | 円筒 | 径1.5 | 0.8 | 自然 | | | 74 | 78 |
| SE1613 | 漏斗 | 円 | 円筒 | 径1.4 | 1.2 | 自然 | 米器、ロクロ | | 74 | 78 |

*出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、鉢は片口鉢、鍋陶は鍋陶方言を指す。

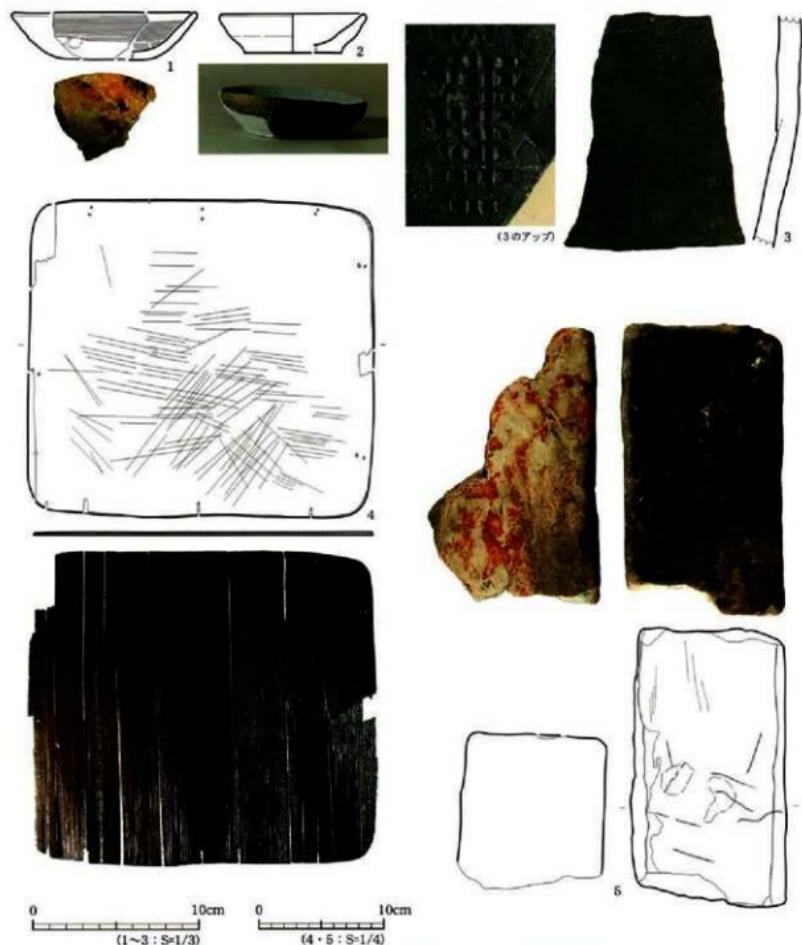
第6表 C区井戸跡属性表

C. 墓跡

調査区北部で3基確認した（図版74・81）。平面形は円形（SX1616・SX1617）と方形（SX1615）がある。

【SX1615墓跡】

方形木棺墓である。SX1616より古い。木棺は底板が92cm×58cmあり、側板は底板付近が残存



| No. | 出土遺物・層位 | 種別 | 基準 | 底地 | 特徴 | 微 | 登録 |
|-----|-----------|---------|----|-------|---|---|-------|
| 1 | SE1601 2層 | かわらけ 小皿 | | | 口径11.2 厚さ2.8 残存1/4。口縁部：一段ナデ。底部外面：オサエ。底部内面：一方山ナデ | | 02006 |
| 2 | SK1614 2層 | かわらけ 小皿 | | | 口径11.2 厚さ2.8 残存1/4。ロクロナデ | | 02007 |
| 3 | SE1601 2層 | 陶器 | 裏 | 鏡面(手) | | | 02005 |
| 4 | SE1604 底面 | 木製品 | 前板 | | 長27.5 幅27.7 厚0.2 圓柱方形容。縫欠隙【スギ板目】 | | 02235 |
| 5 | SE1601 1層 | 石製品 | 切石 | | 残存高23.2 幅11.4 残存厚12.3 【緑閃岩】 | | 02294 |

図版80 C区井戸跡、土壤出土遺物

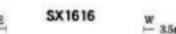
していた。掘方は115cm×95cm、深さは40cmある。棺は掘方底面に薄く土を入れ（5層）、その上に4本の棒を棒状に渡したのち設置している。底板のほぼ中央から錢貨「寛永通寶」が5枚、「開元通寶」が1枚出土した（図版82-1～5）。



| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|------------------|--------------|------|
| 1 | 赤褐色(0Y3/3)粘質シルト | | |
| 2 | 黄褐色(1Y3/3)粘質シルト | | |
| 3 | 黄褐色(1Y3/4)シルト | 廻り層ブロックを多く含む | |
| 4 | 黄褐色(1Y3/2)粘質シルト | 廻り層ブロックを多く含む | 側方埋土 |
| 5 | オレンジ(2Y3/2)粘質シルト | 廻り層ブロックを多く含む | |



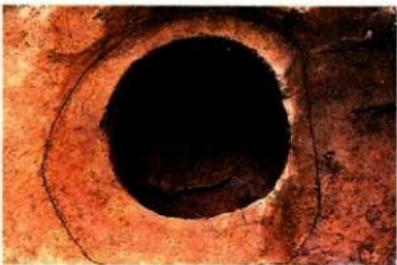
SX1615 底板検出状況（西から）



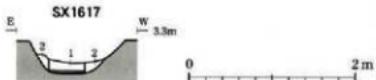
| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-----------------|--------------|----|
| 1 | 黄褐色(2Y3/4)シルト | 廻り層ブロックを多く含む | |
| 2 | 黄褐色(1Y3/3)シルト | 第四層ブロックを多く含む | |
| 3 | 赤褐色(2Y3/1)粘土(6) | 荒砂ブロックを多く含む | |



SX1615 底板除去後（西から）



SX1616 棺上蓋検出状況（東から）



| No. | 土色・土性 | 埋入物など | 備考 |
|-----|-----------------|--------------|------|
| 1 | 黄褐色(1Y3/4)シルト | 廻り層ブロックを多く含む | |
| 2 | 黄褐色(1Y3/2)粘土シルト | 廻り層ブロックを含む | 側方埋土 |

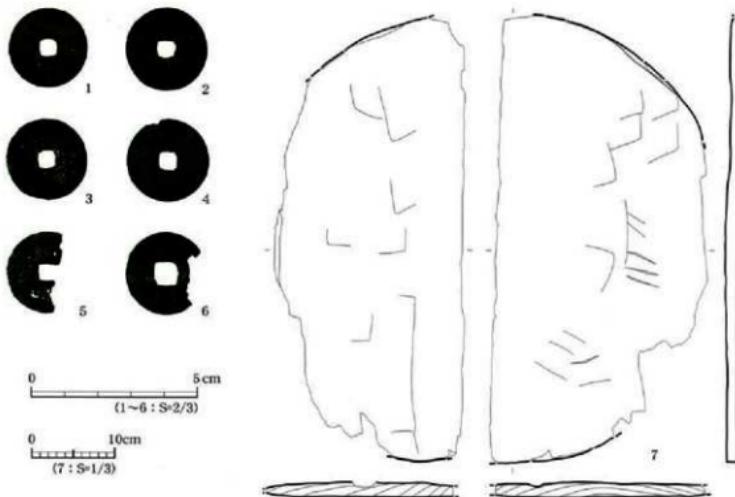


SX1617 棺底板検出状況（東から）

図版81 SX1615・1616・1617墓跡

【SX 1616墓跡】

円形木棺墓である。SX 1615より新しい。木棺は底板が径55cmあり（図版82-8）、その上に蓋板が落ちていた。側板は底板付近が残存していた。掘方は径85~90cm、深さは80cmある。棺は掘方底面に薄く土を入れ（3層）、その上に設置している。木製やガラス製の数珠が出土した。樹種同定の結果、底板はマツ属、数珠がカキノキ属であることがわかった。



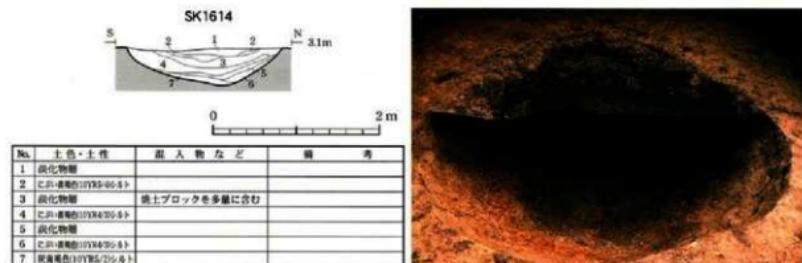
図版82 SX1615・1616・1617墓跡出土遺物

【S X 1617墓跡】

円形木棺墓である。木棺は底板が径45cmあるが、残りが悪かった。掘方は径88cm、深さは40cmである。棺は、掘方底面に直接設置している。底板のほぼ中央から銭貨「元祐通寶」が出土した（図版82-6）。

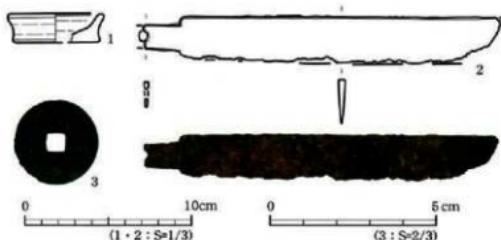
D. 土壙

S K 1025は調査区の北端で確認した（図版74）。平面形は0.8m×0.5mの楕円形である。堆積土からロクロかわらけ皿、刀子が出土した。S K 1614は調査区の北部 S B 1621建物跡西脇で確認した（図版75・83）。平面形は1.9mほどの円形である。深さは0.4mで、断面形は上が開くU字形である。堆積土は7層に分けられたが、自然堆積層と炭や焼土ブロックを多く含む廃棄層に大別でき、両者の



図版83 SK1614土壙断面図

互層となっている。確認面から口
クロかわらけ小皿（図版80-2）、
スサを含む壁土が出土した。



E. 表土出土遺物（図版84）

表土からロクロかわらけ小皿
(1)、刀(2)、「寛永通」(3)
が出土した。

図版84 C区表土出土遺物

第IV章　まとめ

第I章で述べたとおり、県教育委員会による中野高柳遺跡の発掘調査は6年に及ぶ。今回報告を行ったのは、そのうちの流通地区西側A～C区の古代遺構、B区およびC区の中世より新しい遺構についてである。主な検出遺構は、古代が畑跡1、区画溝跡1で、中世以降が南北道路跡1、区画溝跡2、掘立柱建物跡39、掘立柱列跡2、井戸跡36、墓跡3、土塘87、溝跡25である。さらに、古代の河川跡1、中世の湿地跡3を確認した。以下、これらの遺構の概要をまとめることとする。

1. 遺構検出面

今回報告した遺構は、基本層序第VII層のものと第IV・V層のものがある。第VII層の検出遺構は溝で区画された畑跡で、第VI層である灰白色火山灰に覆われている。第IV・V層の検出遺構は、中世や近世の屋敷跡に関わる遺構や近世以降の水田跡などである。本遺跡で検出した遺構は、大別して7期に整理されている（宮城県教育委員会2003）。以下、各遺構の概要をまとめながら大別遺構期への位置付けを行う。

2. 検出遺構の概要と年代

(1) 第VII層上面の遺構

S F 1593畑耕作痕は、S D 1100河川跡に接続するS D 1592溝跡によって西と南を区画されている。同一面で確認した遺構に住宅地区のS F 1334畑耕作痕がある。両者は、S D 1100に接続する溝によって区画されており、畑の方向はS D 1100におおむね直交する、灰白色火山灰（第VI層）が耕作痕や溝の底面もしくは底面付近に認められる、といった共通点が認められ、一連の遺構と考えられる（図版4）。したがって、S F 1593畑跡は第I期に位置付けられる。S D 1256・1257・1592溝によって区画されたS F 1334・1593の耕作域は、東西が16～32m、南北は164mとみられる。年代は灰白色火山灰との関係から9世紀末～10世紀前葉であり、その降灰によって廃絶したと考えられる。

(2) 第IV・V層の遺構

A 出土土器・陶磁器の年代

遺構や湿地跡から、かわらけ・陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品が出土している。以下、遺物がある程度まとまって出土した遺構について、図示資料を中心に検討を行いたい（図版85）。遺物の検討にあたっては、奢侈品である瀬戸瓶子、青磁・白磁、貯蔵具である陶器甕などは、伝世したり使用期間が長期にわたるケースが考えられるため、これらより食器や灯明皿、あるいは儀式・祭祀にあたって一時的に使用されたかわらけ、調理具として日常使われる頻度が高く、使用期間が短いと想定される陶器片口鉢の年代を優先し、奢侈品や貯蔵具の年代は補助的に扱うこととする。

【S X 1397】

A期はロクロかわらけ小皿、B期はロクロかわらけ皿・小皿、手づくねかわらけ小皿、古瀬戸前期の瓶子I類、C期はロクロかわらけ小皿、在地産片口鉢、常滑5型式期（13世紀第2四半期）の甕が出土している。ロクロかわらけ皿・小皿の器形は、A～C期をとおして楕形や逆台形である。C期から出土した在地産片口鉢は、器形や細部の特徴から常滑系と考えられる。

宮城県内の中世在地窯は、渥美窯の技術移入で成立した水沼窯と、常滑系の技術系譜に連なる伊豆沼・三本木・白石の各窯群が知られる（吉岡康暢1994）。年代は前者が12世紀前半、後者は13世紀中葉から14世紀前半と考えられている（高橋博志2002）。同時期のかわらけの様相は、12世紀中頃から從来のロクロ楕・小皿のセットに加え、新たに手づくねかわらけ皿・小皿が共伴する。12世紀後半になると、ロクロかわらけ楕は器高が低くなり、皿に変化する。新器種である手づくねかわらけは、13世紀前半代のうちに皿が欠落し、後半代には小皿も消滅するとみられる。一方、ロクロかわらけは皿・小皿とも、13世紀末頃から14世紀前半に從来の楕形や逆台形から箱形へ変化し、14世紀後半になると、皿は前代に比べて器高が高くなる（佐藤洋2002）。

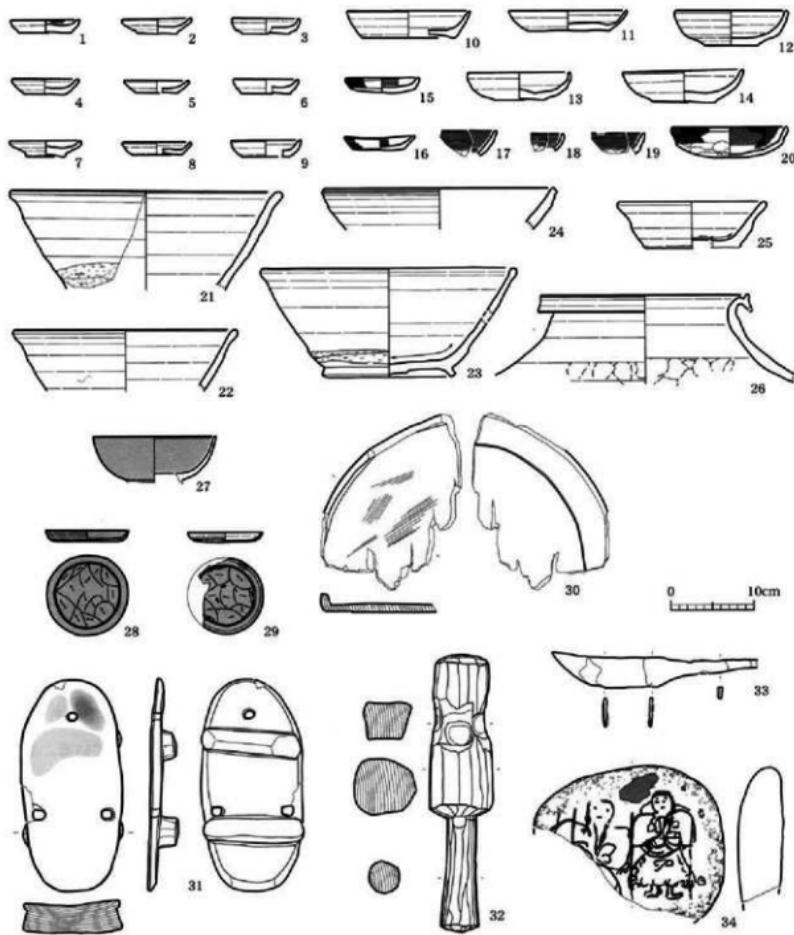
したがって、S X 1397 A～C期の年代は、13世紀代と考えられる。また、D期は出土遺物が少ないが、A～C期と同じ特徴をもっており、S X 1397の年代は13世紀中心とみられる。

【S K 1008・1310・1311】

S K 1008は手づくねかわらけやロクロかわらけ小皿、常滑4～5型式期（12世紀末～13世紀前半）の片口鉢、在地産甕が、S K 1310は手づくねかわらけやロクロかわらけの小皿、常滑5～6型式期（13世紀第2～第3四半期）の片口鉢、在地産甕、常滑5型式期（13世紀第2四半期）の甕が出土している。S K 1311は、ロクロかわらけ小皿、在地産片口鉢・甕、常滑3～4型式期（12世紀第4四半期～13世紀第1四半期）の甕が出土している。いずれもロクロかわらけに箱形は認められず、在地産片口鉢・甕は、器形や細部の特徴から常滑系と考えられる。したがって、S K 1008・1310・1311は13世紀中葉～後半頃と考えられる。

【S D 1007～1745】

S K 1008より新しく、かわらけは扁平で口径に比べて底径が大きい箱形のロクロかわらけ皿・小皿、常滑甕が出土している。14世紀前半頃とみられる。



- 1~9 ロクロかわらけ小皿
 10~14 ロクロかわらけ皿
 15~16 手づくねかわらけ皿
 17~20 手づくねかわらけ皿
 21~23 常滑底片口鉢
 24 在地底片口鉢
 25 常滑底小型片口鉢
 26 常滑底甕
 27 接器輪
 28~29 接器小皿
 30 接器丸皿

- 31 速削下鉢
 32 横切
 33 包丁
 34 人物墨書き

- 1~2・28・31・32 : SX1397A
 3~6・14・17~19・27・33 : SX1397B
 30 : SX1397D
 7・15・23・29 : SK1310
 8・16・21・22・34 : SK1008
 12 : SE1003
 9~11 : SD1006
 13・20 : SD1073
 24・26 : SX1600
 25 : SK1311

図版85 区画Gの主な出土遺物

【その他の遺構】

B区のSK1502・1711は近世陶器、SK1517は土師質土器、SD1005(1518)は染付磁器輪、SD1708は瓦器や土師質土器が、C区のSX1615・1617は「寛永通寶」が出土しており、近世以降と考えられる。また、これらの遺構と重複して新しいSK1047、SX1616も近世以降と考えられる。さらに、SK1018・1506は堆積土の特徴から、近世以降とみられる。

他の遺構から出土した遺物をみると、かわらけが楕形や逆台形、箱形のロクロかわらけ皿・小皿を主体とし、ほかに手づくねかわらけ小皿がある。陶磁器は在地産や常滑産の片口鉢・甌を主体としており、在地産は、器形や細部の特徴から常滑系と考えられる。こうしたあり方はSX1397、SK1008・1310・1311、SD1007出土遺物と基本的に共通しており、年代は13世紀～14世紀代と考えられる。したがって、B・C区で検出した中世より新しい遺構は、13～14世紀代のものと、17世紀以降のものが多く、前者が主体を占めている。大別遺構期への位置付けは前者が第IV期、後者は第VII期と考えられる。

B SX1600南北道路跡

A区からC区で検出した南北道路跡で、自然堤防の西縁に沿って設けられており、東側溝はSD1500・1501区画溝跡、SD1564・1565溝跡と接続する。SX1600は住宅地区でも確認しており、総長は390m以上で南は遺跡外へ延びる。路面の両端には素掘りの側溝が伴い、2時期の変遷(A→B)がある。A・B区では東側溝が西側溝に較べて幅が広く深いが、C区では逆に西側溝の規模が大きい。路幅はB期側溝の心々で測ると、3.0～4.0mである。B期東側溝からは、SX1397やSK1008・1310・1311と共に特徴をもつ遺物が主体的に出土するが、ほかに1点ずつではあるが、古瀬戸後I～II期の天目茶碗(14世紀後葉～15世紀初頭)、古瀬戸後期の小皿が出土している。したがって、SX1600の年代は13世紀～14世紀を中心とするが、15世紀前半まで存続した可能性がある。

C B2区の検出遺構

B2区には、「中野高柳遺跡I」で第IV期に位置付けた区画Gが存在する(宮城県教委2003)。今回報告した出土遺物の主体は、区画内の遺構とそれを画する溝跡や湿地跡からのものである。以下、区画Gについて検討を行う(図版86)。

－区画G－

〈規模〉区画Gは北を幅1.5～2.5mのSD1500・1501区画溝跡、西をSX1600道路東側溝跡で画され、東はSX1397湿地跡に面している。南はSD1040溝跡によって画されたとみられる。したがって、区画Gは、平面形が方形で、規模は東西70m前後、南北50～53mと考えられる。

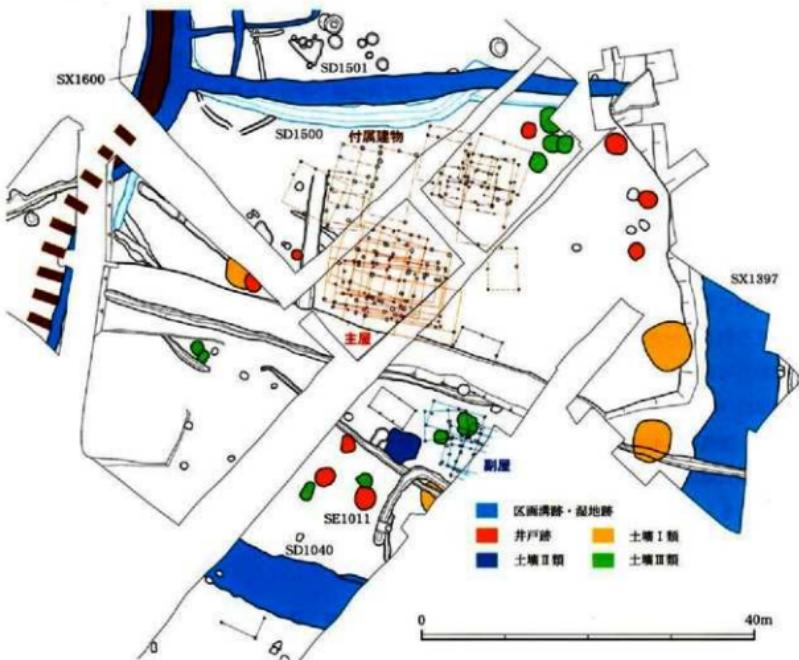
〈年代〉区画内部の遺構出土遺物は、前述したとおり第VII期に位置付けられた遺構を除くと、SX1397、SK1008・1310・1311、SD1007出土遺物と基本的に共通する。したがって、区画Gの屋敷の年代は、13～14世紀代とみられる⁽ⁱⁱⁱ⁾。

〈内部の様子〉

建物跡

区画内部の建物は、北部中央と南東部に大別され、さらに前者は、中央と北西、北東の3群に細別できる。したがって、区画Gの建物は、①庇や縁をもつ東西棟大型建物を主体とする建物群（S B 1415～1422）、②北西の①より小型の建物群（S B 1671～1675）、③北東の小型建物を主体とする建物群（S B 1676～1684）、④南東部の小型建物群（S B 1052～1058・1061・1062）の4グループに分けられる。これらの中で、①は区画内の位置や建物規模から主屋、その南東の④は副屋と考えられ、②や③は、厨や納屋、倉庫、作業小屋といった、雜舎などの主屋に付属する建物と考えられる。区画Gの4つの建物群は、ほぼ同位置で建替えを繰り返しており、建物配置が固定的かつ継続的であったと考えられる⁽³²⁾。

建物群①～④の方向をみると、N-8°～21°-Eの間に集中する。重複がみられる建物は3例あるが、いずれも東への傾きが大きいものが新しいことから（S B 1422→S B 1418、S B 1683→S B 1677、S B 1684→S B 1681）、新しい時期の建物は東への傾きが大きくなるとみられる。



図版86 区画Gの構成

その他の施設

井戸跡は9基検出されている。このうち、井戸側をもつのは1基（SE1011）で、他は素掘りである。区画南部に3基（SE1009・1011・1016）、北東隅付近に4基（SE1002・1003・1021・1573）、西部に2基（SE1523・1702）認められ、いずれも建物群と重複していない。側をもつSE1011の構造は、板材を縦方向に組み、横棟で保持した縦板組横棟止め井戸（宇野隆夫1982）で、本遺跡で県教委が調査した井戸跡の中では最も立派である⁽³³⁾。

土壌は、規模から1～4類に分けた。1類の大型土壌は建物群と重複せず、区画周縁部に位置する。このうち3基（SK1008・1310・1311）は、自然堆積の間に、焼土や灰・炭化物・植物遺体などが顕著に認められる層があり、遺物も多く出土することから、1類は廃棄土壌（ゴミ穴）と考えられる。こうした大型土壌が区画周縁部に分布するあり方は、第V期に位置付けた区画B・B'でも認められる（宮城県教委2003）。3類の中型土壌は、10基のうち8基が建物群と重複せず、区画周縁に位置する。堆積土は自然堆積、もしくはその後人為的に埋戻されている。したがって、3類は区画内の位置や堆積土の状況から、機能は1類と同じとみられる。4類の小型土壌は、1・3類と異なり、建物群やその周間に多く分布する。これらの中には、堆積土に焼土や炭化物を多く含むものがある。

〈屋敷の構成〉

区画内部の様子は、中央北側に主屋が、南東に副屋が位置する。主屋は東西棟が主体で、他の建物に比べて大型であり縁や庇をもつものが多い。背後の建物は厨や倉庫、納屋、作業十屋といった、主屋に付属する建物とみられる。これらの建物は、ほぼ同位置で建替えを繰り返している。主屋の南は、建物が1棟認められるに過ぎず井戸や土壌、溝跡がまばらに分布することから、広場的な空間と考えられる。

井戸は、広場（前庭）や主屋の西、区画北東部に作られている。なかでも、側を有し、構造的に他より立派な井戸が前庭に作られることは、その機能とかかわっていたと考えられる。ゴミ穴とみられる中・大型土壌は区画周縁部に位置するものが多い。さらに湿地跡からも焼土や灰・炭化物・植物遺体とともに遺物が多く出土することから、区画東縁部周辺はゴミ捨て場として長期間利用されていたと考えられる。一方、西側は広場より遺構密度が低く、空閑地となっており、畠や馬場として利用されていた可能性がある。こうした施設構成をもつ方形プランの屋敷跡は、山王遺跡（宮城県教育委員会1997）や新田遺跡（千葉孝弥1992）でも認められ、区画Gは在地領主層の屋敷跡と考えられる。

また、屋敷の基本的な構成要素である建物・前庭・井戸・ゴミ穴の配置状況は、第V期の区画B・B'、第VI期の区画C・Dや区画C'・D'と同じである。したがって、屋敷内の場の使い方は、固定的であるとともに、そのあり方は中世をとおして変わらなかったといえる。

D 他地区的検出遺構

B1区では、SX1600の東で掘立柱建物跡・井戸跡・土壌・溝跡を確認した。井戸跡は中央部にかたよっており、とくにSE1643周辺は5基重複していた。SD1533・1564・1565は、SX1600東側溝に接続することから、第IV期とみられる。その他の遺構は、出土遺物が少なく時期の特定は難

しいが、S B 1692は、建物の上屋柱と下屋柱が認められ、中世に位置付けた建物と構造が異なることから、近世以降とみられる。また、S E 1534・1539は、同じ構造をもつA区S E 1647の年代観から17世紀以降とみられる。こうしたあり方から、B 1区は、第VII期に属する遺構が多いとみられる。

B 3区は遺構密度が低く、S X 1600の東で掘立柱建物跡5棟と数基の土壙を検出したにとどまる。遺物はSA1026から古瀬戸前Ⅲ～IV期の瓶子、SK1023から常滑窯などが少量出土しており、区画Gと同じ第IV期とみられる。溝などの区画施設が認められず、建物も小型であることから、区画Gの屋敷の主人に従属する階層の住まいとみておきたい。

C区は、北側で掘立柱建物跡・掘立柱列跡・井戸跡・墓跡・土壙を、南側で道路跡・井戸跡・土壙を確認した。B区に較べて遺構密度が低い。遺構の年代は出土遺物が少なく特定は難しいが、北側の遺構は、S X 1615～1617の年代から第VII期以降の屋敷とそれに伴う施設とみられる。一方、南側の年代は、S E 1601からS X 1397に類似するかわらけが出土していることから、区画Gと同じ第IV期のものが多いとみておきたい。調査区の北側と南側で時期が異なるのは、C区北端から中央部を平安時代のSD 1100が流路を変えながら流れ、その後北端と中央部の凹地にS X 1607・1608湿地跡が形成されたことから、C区北側が中世まで地盤が悪く、遺構をつくるのに不向きな土地であったためと考えられる。

E S E 1534・1539井戸跡の構造について

B 1区で検出したS E 1534・1539は、革を簾状に組んで井戸側とするものである。こうした構造の井戸跡は本遺跡A区のSE1647、大和町下草古城跡S E 683（宮城県教育委員会1995）があり、近県の例としては、山形県閔B遺跡S E 41（山形県教育委員会1983）、藤島城跡S E 300・301（山形県教育委員会1990）などがあげられる。また、秋田県洲崎遺跡（秋田県教育委員会2000）では、精査を行った271基のうち20基の側が革であった。こうした例はあるものの、革を例とする構造は、中世以降の井戸全体からみて数は非常に少ない⁽⁴⁴⁾。

類似する井戸は、側の縦板外側に革が簾状に並べられているものが多賀城市新田遺跡第8次調査S E 1・2（多賀城市埋蔵文化財調査センター1989）や洲崎遺跡S E 153に、側の横板外側に革が簾状に並べられているものが洲崎遺跡S E 305に認められる。また、新田遺跡第7次調査S E 3は、側板の有無は不明であるが、革が簾状に組まれていた（多賀城市埋蔵文化財調査センター1989）。こうした構造の井戸は、側内部に入る地下水の浄化を目的としたと考えられる。本遺跡・下草古城跡・閔B遺跡・藤島城跡・洲崎遺跡にみられた革が簾状に組んで側とする井戸は、縦板や横板を省略した形と判断され、革がその機能も兼ねたとみられる。

これらの時期は本遺跡S E 1647が17世紀以降、下草古城跡が17世紀初頭中心、閔B遺跡が15世紀前半、藤島城跡が16世紀頃、洲崎遺跡は13世紀後半から16世紀後半、新田遺跡は15世紀頃と考えられており、中世から近世初期に位置付けられている。本遺跡SE1534・1539は、出土遺物がないため特定はできないが、同じ構造をもつSE1647の年代から17世紀以降とみておきたい。簾状の革を側とする井戸跡は、今後、革材の供給地に近い、沖積地の遺跡で類例が増えるとみられる。資料の增加に

期待したい（註5）。

- （註1）第IV期の年代は、「中野高柳遺跡Ⅰ」で13世紀中心と指摘したが、今回の検討で区画内部の遺構にも14世紀代のものがあり、SX1600は13世紀～14世紀を中心に機能したとみられるから、第IV期の年代を13世紀～14世紀中心と改めることにしたい。
- （註2）山王遺跡八幡地区では、16世紀代の武士階級の屋敷跡が確認されている（宮城県教育委員会 1997）。屋敷は中央に主屋、その東・西・北に付属建物、東端に井戸戸が配置され、主屋の南は前庭となっている。こうした施設構成は、一貫して変わらなかったと指摘されており、区画Gで確認された屋敷の様子と共通する。なお、建物群②のSB1672は4×2間の南北棟総柱建物である。繪輪物に描かれた中世武士の屋敷をみると、屋敷は板敷であり、SB1672は床であった可能性もあることを指摘しておきたい。
- （註3）仙台市教委が平成7年度に調査した第1次調査区（荒巣地区A区の北隣接地）では、側をもつ井戸が3基発見されており、そのうちの1基は側に削抜き材を使用している。報告書が刊行されていないため、詳細が不明であり、構造や時期などの検討はできない。
- （註4）これらは、欄柱の有無によって細分が可能である。本道跡SE1534・1539、藤島遺跡SE300・301は構造がなく、本道跡SE1647、下草SE683、岡B道跡SE41、洲崎遺跡の全例は欄柱が残る。なお、洲崎遺跡では井戸の分類が行われており、草を欄柱に組んで井戸側とするものはC2型井戸とされている（秋田県教育委員会2000）。
- （註5）茅葺材を用いた井戸については、秋田県弘田町調査委員会所蔵学氏、山形県埋蔵文化財センター高桑弘美・吉田江美子氏、多賀城市埋蔵文化財調査センター千葉季尋・相沢清利氏、岩沼市教育委員会川又賛氏にご教示いただいた。

〈引用・参考文献〉（著者別、五十音順）

- 秋田県教育委員会（2000）「洲崎遺跡」秋田県文化財調査報告書第303集
- 飯村均（1997）「中世食器の地域性－東北南部－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp.58～76
- 飯村均（1998）「東国のわらけ」『中世土器の基礎研究』XIII 日本中世土器研究会 pp.13～26
- 飯村均（2002）「中世奥州の村」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 高志書院 pp.159～178
- 石黒伸一郎（1988）「仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概説」『東光寺遺跡 第1・2次調査』仙台市文化財調査報告書第112集 pp.110～137
- 和泉剛義（1991）「多賀城市内の供養碑」『多賀城市史 4 考古資料』pp.655～694
- 伊藤一義（2000）「鎌倉の御家人たち」『仙台市史 通史編2－古代中世－』仙台市史編さん委員会 pp.214～236
- 入間田宣夫・大石直正編（1992）「よみがえる中世7～みちのくの都 多賀城・松島」平凡社
- 入間田宣夫・本郷鉄輔編（2002）「平家の世界」奥羽史研究叢書3 高志書院
- 及川司（1998）「岩手県における11～19世紀の土器－かわらけを中心として－」『東北地方の在地土器・陶磁器II』東北中世考古学会・福島県考古学会 pp.65～69
- 宇野健夫（1982）「井戸考」「史林」第65巻第5号
- 宇野健夫（1989）「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」真羅社
- 及川司・杉沢昭太郎（2003）「陸奥北部1・岩手県」『中世奥州の土器・陶磁器』東北中世考古学会 pp.37～48
- 大石直正（1992）「みちのくの都の中世」「くらしを支える市場」「よみがえる中世7～みちのくの都 多賀城・松島」平凡社 pp.28～37、99～107
- 大石直正（1995）「平泉と多賀国府」「中世都市研究」第2号 中世都市研究会 pp.73～102
- 大石直正（1998）「仙台市史の板碑」「仙台市史 特別編5－板碑－」仙台市史編さん委員会 pp.494～505
- 大石直正（2000）「躍る動乱」「仙台市史 通史編2－古代中世－」仙台市史編さん委員会 pp.354～375
- 岡田清一（2000）「村と市と在宅」「板碑のこころ」「仙台市史 通史編2－古代中世－」仙台市史編さん委員会 pp.237～257、263～270
- 小野正敏編（2001）「国解・日本の中世遺跡」東京大学出版会
- 小泉和子・玉井哲雄・黒田日出男編（1996）「绘巻物の建築を読む」東京大学出版会
- 斎藤利男（1992）「多賀国府の都市プラン」「よみがえる中世7～みちのくの都 多賀城・松島」平凡社 pp.44～62
- 佐藤洋（2003）「陸奥南部2・宮城県」『中世奥州の土器・陶磁器』東北中世考古学会 高志書院 pp.29～36
- 佐藤正人（1992）「東光寺窯所・町場の板碑」「よみがえる中世7～みちのくの都 多賀城・松島」平凡社 pp.130～161
- 白鳥良一（2003）「多賀城から中世多賀国府へ」「白い国の詩」平成15年11月号（通巻567号）pp.4～13
- 白根晴大（2000）「在園と公領」「仙台市史 通史編2－古代中世－」仙台市史編さん委員会 pp.176～187
- 仙台市教育委員会（2000）「王ノ堀遺跡」仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市史編さん委員会編（1998）「仙台市史 特別編5－板碑－」
- 仙台市史編さん委員会編（2000）「仙台市史 通史編2－古代中世－」
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター（1989）「新田遺跡（第7次）」「新田遺跡（第8次）」「年報3」多賀城市文化財調査報告書第20集 pp.5～9
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター（1990）「新田遺跡 第4・11次調査」多賀城市文化財調査報告書第23集
- 大宰府市教育委員会（2000）「大宰府奈良跡XV－陶器分類編－」大宰府市の文化財第49集
- 高橋栄一・吉野武（2001）「中野高柳遺跡」「木簡研究」第23号 pp.91～92
- 高橋博志（2002）「陶器生産と陶器器流送」「鎌倉・室町時代の奥州」奥羽史研究叢書4 高志書院 pp.228～249
- 田中則和（1992）「川沿いの屋敷群」「丘の上の世界」「よみがえる中世7～みちのくの都 多賀城・松島」平凡社 pp.93～98、145～161

- 田中剛和 (1995) 「仙台市域の中世館・集落跡」『中世都市研究』第2号 中世都市研究会 pp.32~48
- 田中剛和 (2000) 「堀戻と路の跡から探る中世」『城郭のまちとくらし』『仙台市史 通史編2 -古代中世-』 仙台市史編さん委員会 pp.271~282
- 田中剛和 (2002) 「陸奥国「国府城」の考古学的特徴」『雄倉・宝町時代の奥州』 奥羽史研究叢書4 高志書院 pp.50~77
- 千葉孝弥 (1992) 「武士の星数の発見」「よみがえる中世7~みちのくの都 多賀城・松島」 平凡社 pp.66~92
- 千葉孝弥 (1995) 「多賀城から府中へ」『中世都市研究』第2号 中世都市研究会 pp.13~31
- 千葉孝弥 (1997) 「考古学からみた中世の多賀城」「多賀城市史1-原始・古代・中世-」 pp.549~591
- 東北学院大学中世史研究会編 (1994) 『中世陸奥国府の研究』
- 東北中世考古学会編 (1998) 「東北地方の在地土器・陶磁器 II」
- 東北中世考古学会編 (2001) 「獨立と聖穴ー中世道標の調査ー」 高志書院
- 中野晴久 (1994) 「生産地における編年について」「中世常滑焼をもって」資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所 pp.7~181
- 中野晴久 (1997) 「壺器系中世陶器の生産」「研究記要 第5輯 潟戸市埋蔵文化財センター pp.7~24
- 水原慶二編 (1995) 「常滑焼と中世社会」 小学館
- 相模美術館学芸部 (1996) 「甦る雄倉ー遺跡発掘の成果と伝世の名品」 相模美術館
- 日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編 (2000) 「はたけの考古学」 日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集
- 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会編 (2001) 「都市・平泉ー成立とその構成ー」 日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 羽柴直人 (2001) 「平泉遣跡群のロクロかわらけについて」「岩手考古学」第13号 岩手考古学会 pp.41~62
- 羽柴直人 (2003) 「平泉におけるロクロかわらけの用途と機能」「中世奥羽の土器・陶磁器」 東北中世考古学会 pp.289~302
- 平泉文化研究会編 (1992) 「奥州藤原氏と柳之御所跡」 吉川弘文館
- 平泉町文化財センター編 (2000) 「常設展示回顧」「柳之御所資料館
- 平田敏文 (2003) 「陸奥南部1-福島県界ー」「中世奥羽の土器・陶磁器」 東北中世考古学会 pp.17~28
- 福島県考古学会中近世部会編 (1996) 「かわらけ編年の中世検討-11世紀から19世紀-(その1)」「福島考古」第37号 pp.65~85
- 福島県考古学会中近世部会編 (1997) 「かわらけ編年の中世検討-11世紀から19世紀-(その2)」「福島考古」第38号 pp.67~85
- 福島県考古学会中近世部会編 (2000) 「東北地方南部における中世常陸の諸問題ー獨立柱建物跡を中心としてー」
- 藤井良祐 (1994) 「中世瀬戸窯の動態」「古瀬戸でめぐる中世陶器の世界」 潟戸市教育委員会・瀧戸市埋蔵文化財センター
- 藤井良祐 (1997) 「中・近世瀬戸焼の編年」「東北地方の在地土器・陶磁器 I」 東北中世考古学会
- 藤井良祐 (1991) 「東北地方出土の常滑焼・瀬戸焼について」「知多平家の歴史と現在」 No.3 校倉書房 pp.29~56
- 藤沼和彦 (1992) 「石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏」「石巻の歴史」第6巻 特別史編 pp.364~419
- 北陸中世考古学研究会 (2001) 「中世北陸の井戸」
- 松本達也 (1993) 「柳之御所跡出土のかわらけ編年試案」「紀要」XIII 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.53~60
- 松本達也 (1994) 「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」「岩手考古学」第6号 岩手県考古学会 pp.23~44
- 松本達也 (2002) 「かわらけは語るー平泉の窯ー」「白い国の詩」平成14年4月号(通巻548号) pp.4~11
- 馬淵和雄 (1997) 「中世食器の地域性ー雄倉ー」「国立歴史民俗博物館研究報告」第71集 pp.311~330
- 宮城県教育委員会 (1995) 「草古城跡はほか」 宮城県文化財調査報告書第166集
- 宮城県教育委員会 (1997) 「山王遺跡V」 宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 (1998) 「一本柳遺跡I」 宮城県文化財調査報告書第178集
- 宮城県教育委員会 (1999) 「発掘ダイジェストー山王・市川遺跡ー」
- 宮城県教育委員会 (2001) 「一本柳遺跡II」 宮城県文化財調査報告書第185集
- 宮城県教育委員会 (2003) 「中野高柳遺跡I」 宮城県文化財調査報告書第194集
- 村田晃一・吉野武 (2002) 「中野高柳遺跡」『木簡研究』第24号 pp.76~77
- 八重樋忠郎 (1994) 「常滑・瀬戸窯業の12世紀後半における変化ー國産陶器一括発表事例からー」「岩手考古学」第6号 pp.34~44
- 八重樋忠郎 (2001) 「東北における中世初期陶磁器の分布」「都市・平泉ー成立とその構成ー」 日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 pp.67~76
- 八重樋忠郎 (2002) 「平泉藤原氏の支配領域」「平泉の世界」奥羽史研究叢書3 高志書院 pp.112~126
- 八重樋忠郎 (2003) 「奥羽における輸入陶磁器の受容」「中世奥羽の土器・陶磁器」 東北中世考古学会 高志書院 pp.269~278
- 柳原敏昭・飯村均編 (2002) 「雄倉・宝町時代の奥州」 奥羽史研究叢書4 高志書院
- 山形県教育委員会 (1983) 「関B遺跡2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第68集
- 山形県教育委員会 (1990) 「藤島城跡2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
- 吉岡廣輔 (1994) 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 四柳嘉章 (1996) 「漆器」「鐵器 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会 pp.522~538
- 四柳嘉章 (1997) 「北陸の漆器考古学」「北陸の漆器考古学ー中世とその前後ー」 第1分冊 北陸中世土器研究会 pp.1~41

報告書抄録

| ふりがな 書名 | なかのたかやなぎいせき 中野高柳遺跡II | | | | | | |
|------------------------|---|-----------------|--|--|--|---|-----------------------------|
| 副書名 | 宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書II | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 宮城県文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第197集 | | | | | | |
| 編著者名 | 村田晃一・三好秀樹・白崎恵介 | | | | | | |
| 編集機関 | 宮城県教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3685 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2004年 3月 31日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村・遺跡番号 | 北緯 ° ° °' | 東経 ° ° °' | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| なかのたかやなぎ 中野高柳 遺跡 | みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 なかのあざたかやなぎ 中野字高柳 | 04100-01146 | 38度 16分 11秒 | 140度 58分 55秒 | 1次調査 199410~11 2次調査 199507~08 3次調査 20010409~1106 使用測地系 日本測地系(改正前) | 約1,050 約950 約6,500 (確認300) 約10,400 (確認1,120) 約6,930 | 土地区画 整理事業 に伴う事 前調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 中野高柳遺跡 | 烟跡 | 平安時代 | 烟跡 区画溝跡 河川跡 | 土師器 赤焼土器 | 南北に延びる自然堤防 上を烟として利用して おり、溝で区画されて いる。 | | |
| | 集落跡 | 鎌倉～江戸時代 | 屋敷跡 区画溝跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土壙 溝跡 | かわらけ 中世陶器 青磁・白磁 木製品 漆製品 金属製品 石製品 | <p>鎌倉～室町時代は、遺跡内を南北道路が縱断しており、南と北で屋敷跡が検出された。屋敷跡は、溝などによって方形に区画されている。南の屋敷の主は、遺構や遺物のあり方から在地領主であり年代は鎌倉～南北朝時代とみられる。主屋・副屋・雜舎・前庭・井戸・ゴミ穴などは、一定に場所に配置されており、屋敷内部の場の使い分けは、固定的かつ継続的であった。</p> <p>遺物の中では、鎌倉時代のゴミ穴から出土した2人の人物が墨で描かれた蹟(人物墨書き)が注目される。</p> | | |

宮城県文化財調査報告書第197集

中野高柳遺跡Ⅱ

-宮城界仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅱ-

平成16年3月25印刷

平成16年3月31発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
